

今月の編集はくあこら新宿

178号



PKOの背後にあるもの

●カンボジアはPKOで救われるの

NGOとして援助を続けて
主婦の眼で見たカンボジア

JVOC 谷山博史・谷山由子
長島治美

●PKOの表と裏

—— マスメディアが伝えない真実に迫る

PKO — それは大企業進出の先兵 降旗節雄

9・27 渋谷II山手教会・街頭デモ・リリーススピーチに燃える

10・4 山川暁夫・鈴木裕子氏を囲んで — 女たちのかんかんガクガク討論集会

●怒りを結集して今こそ巨悪の構造に迫ろう

金住典子・増田れい子・斎藤千代

●PKOバネが、いま日本を揺るがす

防災訓練に戦車が出動 大倉八千代

侵略をたたえる「新発田連隊遺跡の譜」 高野ゆう子

自らを撃たずに「反対」を叫べますか 浦島悦子

●私たちは黙っていない

札幌・仙台・東京・横浜・広島・香川・福岡・沖縄から

●反PKO選挙戦を通して見えてきたもの 内田雅敏

「インタビュー」 戦後責任とPKO — 臼杵敬子

「新連載」 看護婦・光と影(1) — 増田れい子



いまこそ憤りを行動で示そう

斎藤千代

P K O 法案の強行成立、カンボジア強行派兵……と、国民の半数の危惧や憂慮を無視して、日本の「新体制」は、その姿を日に日に明らかにしている。

片や、暴力とさえ癒着する政・財界の腐敗も明らかになったが、五億円の収賄は二十万円の罰金で片がつけられた。

カンボジアに強行派兵される構造——アジアの利権と深く結びつく日本の軍事大國化、今や公然と裏街道を表街道として認知させようとする政財界の動きは、P K O 促進の構造とも根深い政治腐敗とも、コインの表裏にはかならない。それは戦後補償に誠意を尽くさず、教科書に史実を記載しない体質と見事なほど一致している。へあこらは、静かで穏やかな運動を標榜し続けてきたが、今こそあらゆる手段をつくして訴え、行動しよう。

これほどの人権無視、人権じゅうりんを黙過することは、人権運動としてのフェミニズムの灯を掲げる者に許されることではない。

静かで穏やかな生活を愛するからこそ、それを侵すものに、私たちは公憤を明らかにしたい。

全国各地で、この、新しい人権運動が火の手をあげている。
共にたたかい続ける覚悟として、この号を送る。

— 目次 —

巻頭言 今こそ憤りを行動で示そう 斎藤千代 1

カンボジアはPKOで救われるの？

NGOとして援助を続けて——JVC 谷山博史 谷山由子さんの報告 4
主婦の眼で見たカンボジア 長島治美 20

PKOの表と裏——マスメディアが伝えない真実に迫る 25

許すなカンボジア派兵！ 9・27行動への道 中島光子 25

PKO——それは大企業進出の先兵 降旗節雄 26

日本はアジアの信頼を失わないでほしい 李白 34

日本の過去を、私たちは「恨」として忘れない 金平成 36

9・27共同行動 渋谷Ⅱ山手教会、街頭デモ・リリースピーチに燃える 遠藤むら子 39

10・4山川暁夫・鈴木裕子氏を囲んでⅡ女たちのかんかんガクガク討論集会 生田あい 42

怒りを結集して今こそ巨悪の構造に迫ろう

AGORAZEIN 金住典子・増田れい子・斎藤千代 46

PKOバネが、いま日本を揺るがす

防災訓練に戦車が出動 大倉八千代 64

侵略をたたえる「新発田連隊遺勲の譜」 高野ゆう子 68

自らを撃たずに「反対」を叫べますか 浦島悦子 72

私たちは黙っていない

札幌・仙台・東京・横浜・広島・香川・福岡・沖縄から 75

反PKO選挙戦を通して見えてきたもの 内田雅敏 92

戦後補償が行われていればPKO派兵はなかったはず

インタビュー へ日本の戦後責任をハッキリさせる会 白杵敬子さん 100

新連載―看護婦・光と影(1) 増田れい子 105

連載―凄惨! 首里城地下の沖縄戦② 116

めじゃーなりすとのめ 住井あさんと八千五百人 小島明日奈 124

気になる英語 奥川 睦 126

あこら読書室 128

集会から 133

女の講座・女の集会 138

あこらのあこら 141

カンボジアはPKOで救われるの？

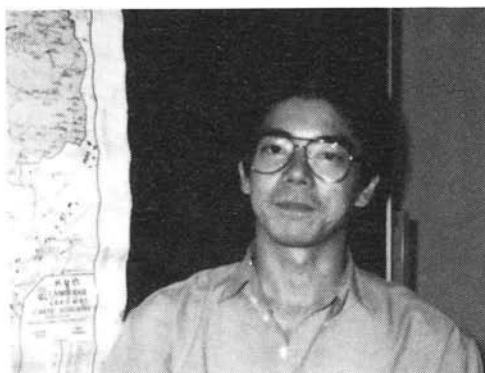
NGOとして援助を続けて

JVC 谷山博史さん 谷山由子さんの報告



JVC（日本国際ボランティアセンター）カンボジアプロジェクト代表の谷山博史さんと社会福祉センター担当の谷山由子さんが一時帰国し、報告会を開きました。カンボジアの人々が待っている国際貢献とは何か？ホットな現地のお話の中から探ってみました。

谷山博史さんの報告①



今日は皆さんにいま現在のカンボジアの様子、そして私たちのPKOに対する考え方などをお話したいと思います。

私がカンボジアに入ったのは、五月です。

前任の代表に代わ

るということでタイからスライドしました。ちょうど私が入ったころは、PKO活動が本格化し、難民などの帰化も本格化した時で、カンボジアに大きな変化が表れていて、私自身これからどのように支援していくかということについて大きなインパクトを受けました。

三つのプロジェクト

大きく変わりつつあるカンボジアの中で、今年からJVCが力を入れるようになったプロジェクトが三つあります。

ひとつは難民支援のプロジェクト。やっと実現することになりました。JVCが十三年間国境で関わってきて、いつ彼らがカンボジアに帰れるんだろうかと夢を見ていたその日が実際にやってきた。私たちはそれ以前からカンボジアに入っていたという利点を利用して、彼らが帰ってくるに当たって有効に農村地域に潜れるように、側面援助をしていこうとしています。

もうひとつは昨年の併合以来プノンペン市は急激に

流入する外国の資本、あるいは国連を通しての援助に伴って人の出入りが増えてきた。主に外国人観光客がブノンペンを経過するようになったわけですが、そういう社会の大きな変化の中で落ちこぼれていく人たちの支援するということが、現在のカンボジアに対する対応として非常に重要になってくるわけです。

もうひとつは国民の九割を占める農民を、より長期的に、根本的に、支援していくということ。彼らが自分たちの力で農村を復興していくための支援、ということでは井戸掘りを通してのコミュニティ作りをやってきています。

ますます貧富の差が

皆さんがカンボジアというと非常に暗いイメージがあると思うんです。私たちにもやはりカンボジアという非常に暗いイメージがつきまわっています。ポルポトの虐殺とかですね、そういう過去をカンボジア人一人ひとりが背負っている。みんなが同じ歴史を共有

するわけですが、難民キャンプでも人に会えば、自分の親が殺されたの、兄弟が殺されたのという話になり、涙ぐんでいる。すべての人たちが、歴史をポルポトのために失っている。それ以外に、本人も強制労働に駆り立てられて栄養失調になったりとか、ひどい生活をしていたわけです。

そのあとベトナムが侵攻してきて、新しい政府が出来たんですけど、私たちが日本にいて受ける報道というのはベトナムの傀儡政権で、ベトナム人の指導による国作りがされていて、カンボジア人はただそれに耐えているというイメージがありました。まだ戦争が行われていて、いたるところに地雷が埋められていると思われていますが、私たちはブノンペンにいて、知合いの農村にも行くんですが、置かれているのはどこかほとんどわかっている。だいたい地雷の被害に会うのはわかっている、しかたがなく農作業に行くとかあるいは山に木を切りに行くとか、そういう特殊な事例のときに起こることが多くて、一応私たちが活動する上でほとんど危険なことはないということを断ってお

きたいと思います。

しかし今のカンボジアの状況を象徴するようなことを言いますと、ちょうど先週の末、業務連絡がプノンペンから届きまして、いまプノンペンが緊張しているというんですね。その連絡があった前の日だったでしょうか、中央市場の前で、ある武装した人が無差別的に市民を射殺したという非常にショッキングな情報が入りました。一方外国人は今まで安全とされていたんですが、国道4号線上でUNTAACのスタッフが襲われ、ホールドアップされて賃金を全部持っていかれたということ、UNTAACは狙われないという神話はくずれたわけですけれども、物騒なことが起こっているのも事実なんですね。

どうしてこういうことが起こるのか。UNTAACが入れば和平が達成されると思うのは大間違いで、UNTAACなどとともに起こってきた大きな変化ですね。UNTAACを目当てに企業なども入ってくるし、一時外国に逃げていた華僑なども帰ってくるわけですが、彼らが落とすドル、外国の豊かな生活をしているとい

う情報、土地の買い占め、土地転がしなどによって、富む人はますます豊かになり、落ちこぼれていく人はますます落ちこぼれていくという、貧富の差が急激に増している中で、やるかたのない鬱憤みtainなものがカンボジア人の中にある。経済的に追い詰められている人もあれば、政治的にもカンボジア人自身の手で和平が達成できなかったというジレンマがある人の中にあるんですね。UNTAACを歓迎するというのは、カンボジア流のお世辞であって、そのジレンマというのは非常に深いものがあると思うんです。たとえば貧富の格差ですけれども、シアヌークが新聞紙上で、カンボジアで問題なのは、ポルポト以上に貧富の格差が各地に蔓延していることだと言ったんです。

これは非常に的を得た発言だと思うんですが、このまま貧富の差が増していけば、一時的な和平は今のUNTAACの展開によって確保されるかもしれないけれど、その後、経済開発が進んでいって、ますます貧富の差が広がり、農村から住民が都市に流れて来るような状況の中で、ポルポトは満を持してもう一度そうい

う不安層を土台にして、勢力を獲得するだろうと言われている。実際にボルポトはじつと様子を見ながら時間を稼いでいるというのが、私たちプノンペンにいる者の意見なんです。

カンボジアの近代史

今、カンボジアの和平が達成され、選挙に向けて作業は進んでいますけれども、この和平というのがいったい何を意味するのか。昔を振り返ってみたいと思います。

御存知のように七〇年に、それまで非同盟中立の政治を行ってきたシアヌークがカンボジアの右派及びアメリカによって追われて、新しい右翼政権のロンノルが成立したわけですけれども、それ以後大同団結でロンノルを倒すということで、ボルポト派がシアヌークなども引き入れながら強化されていった。ボルポトの時代になりますと皆さんも知っているように三年半にわたる恐怖政治を引いて、住民を皆農村に駆り立て

て、原始共産的な政治を行ってきたわけです。その後、ベトナムが支援する中国民族統一戦線というのがボルポトを駆逐したわけですけれども、これがひとつのきっかけとなって百万人くらいのカンボジア人が国境に流出したわけです。当時は状況が流動的だったこともあって、タイに流れた難民たちもそうとう帰って来ていることは事実なんです。その後ベトナムに対する反対勢力を利用しようとする動きが、国際社会の中に出てきたわけです。御存知のように、追われたボルポトをはじめとして、シアヌーク派、ソン・サン派というゲリラ政府を、分裂している状態では力がないというところで、八二年にASEAN諸国が主導になって三派連合政府というのをつくったわけです。

そのバックにはもちろんアメリカもあったし日本もあった。

そしてベトナムに支援されているプノンペン政府と対立する構図をつくり上げてしまった。プノンペン政府の背後にはベトナムがあり、ベトナムの背後にはソ連があるという構図がばっちり出来てしまったわけで

すよね。

私たちはちょうどその頃に国境に行って難民を救援していたんですが、難民救援の間にも常に付きまっていた疑問というのが、難民はどうして国に帰れないんだろうかということでした。先ほど言いましたように、八九年、ベトナムが入って来た当時に、大量に出た人たちの一部は帰って来たわけですけれども、以後です。八二年の連合政府ができる頃から、難民が政治的に利用されて、三派政府の市民として位置づけられるというような形になったわけですね。三派政府にとっては市民がいらないことには国連の議席も得られない。国際社会の承認も得られないということ。右派は自分たちの支配下にある難民が国に帰ることを恐れ、国境上のキャンプに退避させたわけです。その難民を支援したのがやはり西側の国々でした。彼らは三派連合政府を強化するという形をとっていたのに援助したわけ。この十年たらずの間、三派連合政府とプノンペン政府という構図が出来てしまっ、難民は一人たりとも帰れないような状況になってしまった。難民問

題は非常に政治的な問題だったということがわかると思うんです。

政治的な理由で難民問題が進展しなかったと同じように、政治的な理由で状況が変化したために難民がやっと帰れるようになった。それは言うまでもなく、ベトナム軍が撤退し、冷戦の集結の中ではじめて実現されたわけです。数々の議論・会議をして昨年十月二十三日バリ和平合意というのが成立しまして、この合意の枠組みの中で、UNTAACが今年の三月から展開するようになったということになるわけです。

そう考えますと今までカンボジアの国を国際的に孤立させていた政策、難民が国に帰ることを阻んでいた政策が、こんど一挙にカンボジアを復興しようと、あるいは難民を一生懸命帰そうということに変わってきたわけです。これは冷戦の政治的な理由からですね。

タイの場合

一方、カンボジア地域を新しい東南アジア地域にお

ける市場形成に組み込もうと、各国の思惑が変わって来たというふうに位置づけられると思うんです。

その典型的な例がタイです。タイは一番積極的にゲリラ政府を支援していたのですが、それがベトナムの脅威がなくなること、急激にベトナムとカンボジアの関係を改善するようになりました。それにはタイという国の国内事情が大きく関わってきます。

タイは一九六〇年から輸出思考型経済に向けてスタートしたわけですが、そのために外貨が必要だということ、国内の資源、一番てっとりばやく金になるという木材を積極的に海外に輸出していた。山という山がかなり禿山になるまで木材伐採が進んだわけです。と同時にトウモロコシ、あるいはキャッサラと呼ばれる芋を、日本やEC諸国の飼料用作物として農民に、彼らがそれまで自分たちの生活の基盤であった自給のための田とか、畑などを潰してまでも作るよう勧めたわけです。どんどん単一作物を作り続けた結果、土地は疲弊していった、農民は借金を抱えるようになり、土地を手放してバンコクのスラムに出て行ったと

か、子どもを売らなければならぬとか、農村の貧困というのが現れてきたわけです。一方、バンコクは東京と変わらないくらい発展したのですが、農民のほとんどが借金を抱えている。あるいは住んでいる地域の土地がだめになった、というように将来にわたってつけをこうむってしまったわけです。この中でタイはこれ以上国内の資源を搾取したりとか、労働力を生み出すとかが難しくなってきた。八八年に、山の木を切りすぎたために大洪水がタイの南部で起こりまして、これをきっかけにしてタイ国内で森林伐採をやめようという声があがり、ついに政策を変えたんですけれど、このときにタイは、自分たちの工業化の進展のためには、資源豊かな周辺の国に、自分たちの経済を依存しようという政策に変わっていったわけです。これが戦場から市場へというような彼らの政策だったわけです。その中でタイは、積極的にカンボジアと平和についても主導権を握るようになっていきました。このようにしてタイはUNTAACに参加する中で、より効果的に自分たちの経済圏域を延ばせるように非常に工夫をし

ているわけです。

たとえばタイとカンボジアの国境であるポイペトウという地域から、アンコールワットのある観光地への道をタイ軍が入って直す。これは将来タイがカンボジアとの観光の主導権を握ろうとして率先してやっているし、あるいはバットアンバンという西部地域の作物の生産地と、タイ国境に至る道を整備するということで流通を図ろうとする。非常にこれは政策的なことだと思っんです。タイとカンボジアとの関係を一つとって、UNTAACの展開が、周辺地域のカンボジアに対する経済的な進出に大きく関係してくるのが実情です。それではわが日本のPKO活動はどうかというと、皆さんにも考えていただきたいんですが、たしかに和平を達成する国際貢献という形で入りますが、いったい自衛隊が入って直す道は誰が利用するんだ、私たちが一番支援しなければならぬはずの国民の九割を占める農民はその道を整備していったという利益があるんだらう。かつてタイが工業化を進めているときに、まっさきにアメリカのUSAIDだとか、世界銀

行が援助したのが道だったんですね。

この道を整備することによって木材を伐採する。農民が作った作物を有効に海外に売るといって、道が大きく機能したわけですけれども、それと同じような援助が日本の手によって行われる。日本が入る2号線3号線というのは、プノンペンと南部の港を結ぶ重要な路線なんです、それもやはり将来的にただ単に今の平和活動だけではなくて、皆さんがよく言っているカンボジアの復興開発という発展を考えてやっているわけです。じゃあ誰のための発展かといった時に、私たちは、一番底辺にいる住民にとってどういう意味をもつのか、ということを考えなければいけないと思うのです。



谷山由子さんの報告

ープノンペンではー



私は一九八八年からJVCの活動に参加しています。はじめはタイのパナニコム難民キャンプというところで、日本行きが決まった難民に、日本語の指導をしていました。そのあと、日本に帰ってきて東京のカンボジア担当を一年やっていました。それからタイにいた

んですが、今年の五月カンボジアに移りまして、プノンペン市内にあり、まず第四社会福祉センターの担当をしています。

先ほど話の中にあったんですが、貧富の格差が各地

にも広がっているということが、特にプノンペン市内は歴然としています。私自身は二年前に一度行っているんですけども、そのときと比べても急激にプノンペン市内が変わっています。印象としては以前に比べて全体が明るくなったというか、彩りが多くなった。二、三年前は建物や商店街が古いまま放置されていた。ここに来てUNTAACや援助関係者ツーリストなど、外国から入ってくる人たちを目当てにしたホテル、レストラン、商店街などが全部改装されているんですね。随分きれいになっていましたね。それから交通量が圧倒的に増えているんですね。二年前にはなかったような交通渋滞が、プノンペン市内で起こっています。以前はほとんどが自転車、輪タク、バイクで、車は政府の役人が乗っているようなのしかなかったんですけれども、いま現在は一般の人たちも車に乗るようになってますし、日本の中古のバイクがかなり入っています。それが市内を走り回っています。

それから人口の増加。統計で、全体の人口が今八百万人ちょっと超えているところなんですけど、一一%

がプノンペン市に集中している。もっとそれ以上いるんではないかと思えます。それから商店街に並んでいる品物が溢れんばかりなんです。海外から入っている食品・雑貨・電化製品など。でも実際それを買えるのはカンボジア人ではなくって、外国から来た人たち。それと平行して、物乞いの数が増えています。

物質的には豊かになったように見えるんですけど、農村から出て来た人たちの中には、物乞いを目当てに出て来ている人たちもいるんですね。それは以前から農閑期になると、現金収入を得るためにプノンペンに出て来るということは習慣としてあったようなんですよ。最近はそのだけではなくて、職を求めて出てくるというか、先ほども言いましたように、かなりの改築とか増築とか建築ラッシュになっていて、そこで働こうと出てくるわけです。でも建築が終わわり、職がなくなると村に帰ることもできないので、そこに停まって物乞いをしている。あるいは、戦争未亡人で村では現金収入を得ることができないのでプノンペンに出て来て物乞いをしている。タイのバンコクのようなスラムが出

来ていないのでその人たちは行き場がない。駅の周辺・公園・お寺などにその人たちが寝泊まりをしています。そこから外国人が集まるホテル、レストラン、商店街などに物乞いで集まってくるような状況です。

私が関わっている第四社会福祉センターはそういう人たちがいます。物乞いや障害者、未亡人、孤児、ホームレスの人などがここに収容されています。

ボルポト政権崩壊後に二十万近い未亡人、孤児などがでて、その人たちを収容する施設が必要だということでプノンペン市内に四つの孤児院が出来たんですね。そのうちの一つがこの第四社会福祉センターで、以前は第四孤児院と呼んでいました。

ここで、私がインタビュした人たちのことをお話します。

コンボンチュナムという村から来た人がいるんですが、その人は一九八八年にボルポトゲリラが仕掛けた地雷で夫を亡くしたということです。幼い二人の子を連れて農村では生活ができない。ボルポト時代に家族が離散してしまって頼る人がだれもないので、プノ

ンペン市内に福祉センターがあると聞いて出て来た。

これからもこのセンターで生活したいと言っています。

もう一人は孤児なのですが、十三歳の男の子でお母さんは病死、貧しいので村で暮らすことができなくてお父さんとブノンペンに出て来た。ところが途中でお父さんが行方不明になり、自分一人になってしまった。それで物乞いをしていたところを警察に補導されてこのセンターに連れてこられたと言っています。

健康な十六歳の男の子なんかもここに入っているんですね。その子は農村に希望が持てない、勉強がしたいからブノンペンに出て来たが住む所がないのでマーケットの中で寝泊まりしていた。そこを警察に保護されてこのセンターに連れて来られた、と言っています。

このセンターでJVCが行っているプログラムというのは彼ら自身がブノンペンであれ、農村であれ、自立できるような援助をするということです。でもここで行われていることは一時的な対症療法にしかすぎないのです。根本的な解決にはならない。農村の復興そのものが根本的な解決だと私たちは思っていますし、

カンボジア人自身もそう考えていると思います。

そこでの活動を強化していくということですね。

谷山博史さんの報告②

井戸は自分たちで掘ってこそ

都市の問題が深刻化する中で、見るに見かねる人たちを救わねばならないという活動があるわけですが、でも、その問題の根本は農村から人が出てくることにあります。その村では食っていけないということです。村人同士の関係が希薄になる中で、相互に助け合わねばならない慣習が薄れている。第四社会福祉センターに出てくる人たちは、本来なら村の中で社会保障的慣習によって生活できたはずなのですが、どうもカンボジアの農村というのはそれがどんどん薄れているような面がある。

それ以外に外部からくる圧力。具体的に言えば貨幣

経済により、農村の中にも貧富の差が出てきたり、あるいは消費経済にのっかって結局は損をしてしまうような人たちが出てくるようになるし、それが現象として起こり始めている。

では、カンボジアというのはどうしようもないほど助けを待っているだけなのかというと、とんでもない。そういう「受け身」の人たちではないんだということを、われわれが活動を通して発見することからしか、カンボジアを支援する方法はない。

農村のプロジェクトもまだ上から下へのサービスです。医療もそのひとつだったんです。薬を援助するとか、病院に連れて来るとか、衛生をどうするとか、与えられた水準を念頭においてそれを農民に普及しようとするのですが、実際農民の側から自分たちで起こすエネルギーがあるのかどうかということがずーと問われてきたし、それがなければ農村開発はすることができないと考えていたのです。

最近よく農村の事情が見えてきました。彼らは大きな歴史的な経験の中で、受け身にならざるをえなかつ

たということが言えると思うんです。具体的に言いますと、いまJVCは農村で井戸掘りのプロジェクトやっているんですが、かつてJVCがやっていた深井戸を機械を使って掘るやり方から、浅井戸を農民自身の手で掘らせるやり方に変えました。深井戸は確かに水は得られるけれども、それは外からの機械掘りで、掘るのは外部からの人間であり、農民は見ているだけ。設置したポンプが壊れた場合、なかなか彼らは修理できない。あるいは壊れないシステムを農民たちで作りに上げる経験がない。村人の実質的な力を高めることに繋がっていかなかったわけなんです。

私たちは、とにかく井戸が必要な人たちは自分たちの手でぜひ浅井戸を掘ってください、掘って水が出た家庭や地域には、JVCが掘った穴に埋めるセメントリングに必要な資材を提供します、というような協力活動に変えたわけです。セメントリングに必要なセメントと砂と砂利ですね。リングの間に入れる鉄の針金といったようなものを提供すると同時に、セメントリングを作るためのトレーニングを提供するという形に

替えたんです。村人にあなたたちも井戸を掘れますよと働きかけていったんですが、すぐには反応がないんですね。なかなかこちらの提案を受けて実行する人が出てこなかったんですが、たまたま六十すぎになるお婆さんが、自分は前から井戸を掘りたいと思っていた。この歳になると遠くまで水を汲みに行くのはたいへんだからということで、家族を動員して掘ろうと思っていた。JVCが来てくれて非常にありがたい、とまずはじめに井戸を掘ったんですね。五メートルくらい掘

って、その地域は非常にきれいな水が乾期の間も使えることになった。それをきっかけにして、お婆さんの家は水を利用して家庭菜園をどんどん広げていって、一部は市場に売るし、一部は自分の食生活に供するといつかたちで栄養管理もするようになった。

家畜も今まで一頭の牛しかいなかったんですが、水が出るということで二頭に増やした。こんなふうに自分で掘った一本の井戸でお婆さんの家族の生活がどんどんどんどん良くなっていく。それを見てつぎつぎと井戸を掘る人たちが増えてきた。そのお婆さんの村はコ

ール村といひまして、プノンペンから二時間くらい行った所なんですが、その村は結局六十家族あるうちの二十七家族が井戸を掘って、自分たちでトレーニングを受けて出来たリングを設置して水を確保するということになったんです。

それを聞いた村人が、他の地域から来まして、自分たちの所にも来てやってくれないかということで、今三つの村で井戸掘りが始まったということです。

昔は自前で井戸を掘る資力があつた

この過程で気がついたことは、いったいなぜ今まで掘らなかつたのかということです。昔も井戸はあつたじゃないのかと聞いてみると、私たちが井戸掘りした所にも古い井戸があるんですね。それが埋もれていて使えない状態になっている。よく聞くと、これは、シアヌーク時代一九五五年頃に作つたと。よく作れたなあと聞くと、その頃は作れたと言うんで、いったい今とどう違うのかと聞いていくと、井戸掘り慣習・作り

方の伝授はあり、彼らは井戸掘りに使うリングを共同で買って設置したんですね。

金銭的にも余裕があったんですね。それは、彼らカンボジア農民にとって一番重要な現金収入になっているヤシ砂糖を、自分たちで作って売った金が収入になっていたと言わけてです。今の人たちもヤシ砂糖を作っているんですが、これは非常に経費がかかっています。砂糖ヤシに登り樹液を取って、それを薪で煮詰めて時間をかけて作るんですが、その薪がプノンペン市ではほとんど手にはいらない。だから買わなければならぬ。それを買うと実際の実入りが三分の一くらいになっってしまうんです。以前村人が井戸を掘っていた頃は、ほとんどコストが掛からなかったというんです。まず薪は自分たちの森から取ってきた。森はあったのかと聞くと言う。彼らは自分たちで森を管理していたと、コミュニティの森があって、外の人が森に入って伐採するのを禁じていた。コミュニティがそういう人がいないようにいつも監視をしていた。村の中にも、やみくもに切ってはいけないという罰則があったというん

ですね。そしてもうひとつ、ヤシ砂糖を売る際、村人は協同組合を作って協同販売していたと。で、市場に直接持って行って売れたので仲買人などを通さずにすんだということで収入がたくさんあったんだということとです。

これは、私たちにとっては光が差し込んできたような話だったわけです。カンボジア人はどこに行ってもやる気がなくって、援助だけを待っているというようなことではなくなつて、もともとは彼ら自身のコミュニティ活動があったわけです。それが今、井戸掘りを通して彼らは自分で井戸を掘ることができるということを自覚し、村の中で井戸掘り委員会を組織して、どこに井戸を掘ったら皆により有効に使えるか考える。村人の共同活動が変わっていきつつあるんです。はじめはJVCもなるべく個人個人の意欲を尊重するということで、作った人たちに対して支援するようにしていたんですが、最近は村人のコミュニティの活動として、五本あるいは六本の井戸がいるのなら、村人で井戸を必要としている人たちは、近所の人と語り合ってグル

ープを作りなさいと。グループで井戸を掘って水が出たならば、そのグループに対して資材を支援するし、いろんな技術的な支援をするということを始めたわけです。

各村のグループ、五つか六つあるわけですけども、そこから代表を出して設立した井戸掘りコミュニティ、井戸掘り委員会が村全体の井戸掘りの計画に責任をもつようになった。この井戸が一つのきっかけとなって、次に自分たちで何をやるか、というような次の活動に進もうとしている。これは一つには彼らが参加するという経験を井戸掘りを通して得てきたということですね。井戸掘りがきっかけとなって農民の活動がかつてやっていたようなコミュニティ活動に繋がっていれば、きつとカンボジアの農民がよその援助に頼るんではなくって、自分たちの地域づくりが達成されていくだろうと、今はすごい希望を持ちながら支援をしているわけです。これも村人から聞いた話なんです、かつては米銀行があって貯蓄のようなことをしていたということです。

これがまあ言ってみればNGOの援助の仕方といえると思うんです。

外からPKO活動で組織された軍隊が入って道を作る、あるいは橋を直す、あるいはODAを通して多額の援助を外国の企業の資本で行うというのは、実際農民・地域の人たちにとってどれだけの利益があるのか、誰の利益になるのかということを考えた時に、それはおそらく現地の人たちの本来持っている力・意欲・希望を支えていく形の援助のほうが、カンボジア人自身の国づくり・地域づくりにとっては大切なことなんだと思います。

カンボジアの再建に役立つ本当の国際貢献を

JVCはPKOを通して、日本が国際貢献をしようというのに対して本末転倒なんではないかと考えているんです。

実際PKOを通してカンボジアがどういう状況に追い詰められていくのかということを、NGOとしてカ

ンボジアの草の根の人たちの視点から考えた時、どう考えてもこういう人たちが平和に暮らしていく方向には向かわないのではないか。言ってみれば、今まで三十年の間に、第三世界の人たちが被ってきた貧困化の問題を、よりいっそうの重圧の元に、しかもよりいっそう急激に直面せざるを得ないのではないかということを考えております。

ただ自衛隊を派遣しないというのではなくって、カンボジアがカンボジア人の手によって、国づくり、地域づくりができるよう支援する中で、長期的にカンボジアという国と付き合っていくことを考えたい。そのため協力と呼び掛けたいと考えています。

今の関心の高まりの中で、よく東京のカンボジア担当が講演に行くんですが、カンボジアの問題とは切り離して、とにかくPKO、自衛隊の派遣を反対しようということと議論が集結してしまう。それですとやはり、一体自衛隊が派遣されたカンボジアで何が起きているのか、その後いったいどんな国づくりがされるのか、どのように日本のODAは変わっていくのかというこ

とを抜きにしてはこの自衛隊の議論もPKOもなされないのではないかと。もっと市民の手によって、長期的な、国という枠にとらわれない協力の仕方をしてこそ始めて平和な国際交流や、平和なカンボジアの再建ができると考えているわけです。

(九二年九月二日JVC主催報告会より)



主婦の眼で見たカンボジア

長島治美

十月十三日、PKO本隊が発発した。

湾岸戦争の時から反対行動の結果が、こういう形で目の前に現されることに、悲しさを飛び越えて、寒気がする思いだ。国民の約半分が、PKO法案に反対し、国際貢献という名のもとに軍隊を出そうとする政府のやり方に不安感を抱いていたというのに。東南アジアの近隣諸国の市民グループからも反対の行動報告が、(アジア市民の会)に次々に入ってきて来ている。その国々と連帯して行なっている世界ネットワークの署名活動の波は今、少しずつ広がって来ている。

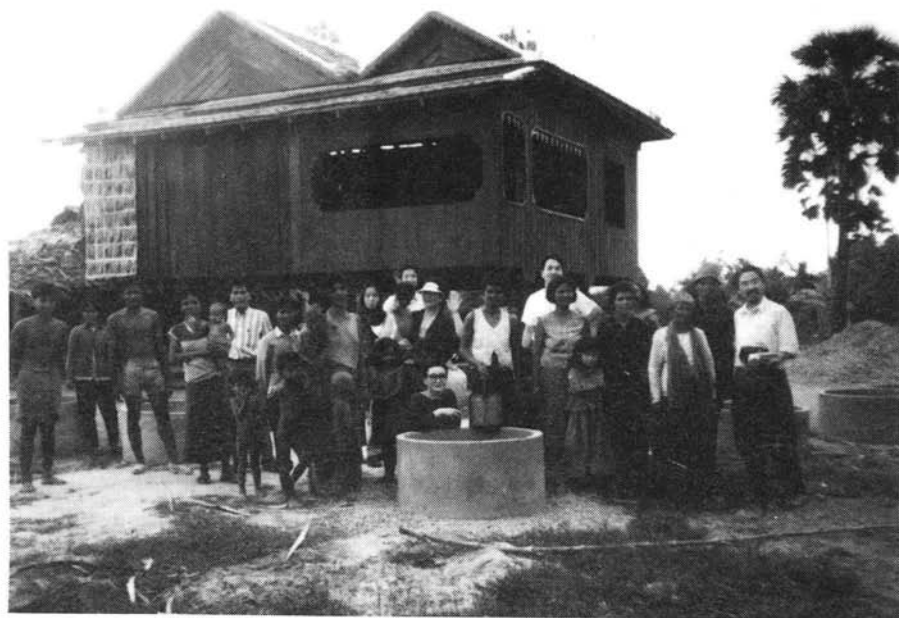
自分の眼で見たい

三人の子を持つ母親として、また約五十年生きた人間として、湾岸戦争の際の金銭での参戦と、今回の自衛隊海外派兵と二つの戦争への道を阻止できなかった自分を、心でどう処理したらよいのか、思いまどっている。目の前に起こりつつある戦争への道に對し、反戦行動を取っているつもりなのに、自分の行動と別枠でどんどん進められていく現実を、どう子どもに説明

したらよいのか？

署名活動、国会へのデモ、ハンスト、そして湾岸戦争後のイラク、そして去年の暮れのパレスチナへの旅は、すべて、私自身の生きていくための反戦行動の流れでもある。戦後の現実をマスコミを通すことなく、自分の眼と感性でしっかりと見極め、それをわが子に伝えてゆくことにより、人間として、女性として、母親としての自己確認も得られていくような気がする。

六月十五日のPKO法案可決の日からの悶々たる胸のつかえが、カンボジアの人々のほんとうの姿を確かめ



に行きたいという行動に向かわせた。湾岸戦争以来、私の中にあるマスコミに対する不信感も、当然そのエネルギーに力を増した。

七月二十日成田を出発した。単独で、現地に入っているNGOの人々と連絡をとり、できる限り市民の人々のなまの生活にふれ、交流して本音を聞きたいという要望で、スケジュールを作った。初めの三日間は日程がいっしょだった六人のグループの人と行動を共にし、農業訓練所や母子健康センター、ホームレスの老人、子ども、未亡人の収容所等の人々やNGOの人と交流することができた。

カンボジアの女性たち

カンボジアの中心地プノンペンとは、中古のオートバイ（仙台越後屋、中村酒店等の横書きのネーミングが付いたまま走っていた）とシクロ（自転車の前に人力車が付いている）が忙しく朝五時頃から往来していた。自動車はまだ少なく、UNTAAC、中国華僑や外国商

人の物が大部分とのことだ。商店街を歩くと十歳前後の子どもたちが、絵葉書や地図を売りにしっかりと取り囲み、その熱心な売り込みから逃れることがとても難しい。

老人も傷痍軍人も物乞いに来る。UNTACがカンボジアに入ってから約二万―三万の国連人口が増し、多くのドルがプノンペンに流出している。

その結果、家賃から食料品まで物価がはね上がり、インフレを起こし、貧しい人々はますます貧しく、家賃の安い郊外に追い出されていく。

人口の七〇%が農民という国柄で、人々はしっかりと自然と共存し、マイペースを保ち、自己を失わずに生きていた。兵士として留守がちの男性に代わり、女性たちが子どもや老人と共に他の家族と連帯を組み、農業をしっかり守っている。

早朝四時、五時から起き、農作物やさとうやしの煮つめたものをフリーマーケットで売り、その収入で日用品を買って帰る。シクロに乗り、あひるを何匹かぶら下げて、自然の風をいっぱい受けてわが家に帰って

ゆく母子を見て、全エネルギーを生きるために使っていないがら、ゆったりとマイペースを守るカンボジアの人々に教えられる思いだった。

私たち日本人は、高度成長したと言われる一方で、大切な、農業、漁業、そして人と人との心の絆、ゆとり、もろもろのものを失ってきていると感じていた私に、カンボジアの女性たちは身を持って大切なことを教えてくれた。日本の子どもたちが塾通いに全エネルギーを使っている時、貧しいと言われている国々の子どもたちは、全エネルギーを生きているということと、互いに助け合わないと生きられないという体験の中で、力強く生きていく。カンボジアの子どもたちも、キラキラ輝く目で相手をしっかりと見据えて、物乞いをし、物売りをし、母親を助けて生きていた。

二十一世紀に世界の子どもたちが手をつなぎ合って行動を起こす時、日本の子どもたちは、彼らと手をつなぎ合って生きていくことができるのだろうか？ 豊かな国とは、一体どういうことなのか？ 日本は今、どっちを向いて、どこに歩こうとしているのか、しっ

かり考えなければと、心を引き締めて日本に帰ろうと思った。

売春はP K Oと無関係ではない！

グループの他の人々が日本に帰ってから、一人でN G Oの方に頼んで、プノンペン市から近い売春街を案内してもらった。川沿いに二、三キロ、高床式の掘っ立て小屋のような建物が続いていた。

うすよくれた花柄のカーテン一枚で仕切られた木の床のそまつな部屋の横に、いすや縁台に座った十四五歳―二十二歳くらいの少女たちがお客を待っている。ベトナム、カンボジア両国の貧しい農家の少女たちが売られて、ここに來ているとのことだ。

カンボジアの身体を売る少女たちを増加させている大きな原因が、国連の介入や他国の経済進出の結果だということ、N G Oの人々から聞いた。貧しい農家の少女たちは働きたくても職がなく、インフレの結果、わが家を救うために自分を売る。

私にも十五、十七歳の娘が二人いることもありその夜は心が痛んで眠りにつけなかった。

自由恋愛が公に認められていないこともあり、十七歳くらいの青年たちが中古のオートバイで夜になると少女たちを買いに来るが、U N T A Cが入ってから、さらにその兵士目当てに少女たちの数が増えたとのことだ。

高級ホテルのロアリアルは高級売春と呼ばれていて、一晚五十ドル―七十ドルでU N T A Cの兵士が通って来る。ホールのチークタイムやディスコが格好の相手探しの場所になる。ホール近くのトイレで、厚化粧をした少女たちが鏡の前で一本のくしを代わるがわる使って髪を直しているのを見ていて、とても悲しく、胸がつまってしまった。日本人の企業の社員も多く來るとのこと。ここにコンドームを持った自衛隊の人々も通って来るのだろう。従軍慰安婦の問題さえ解決していない日本だというのに。

そしてこの延長上に、日本に出稼ぎに來る少女たちが存在することにもなるのだと思うと、日本は何をカ

ンボジアにもたらしに行っているのか、疑問が多く残る。

そして思ったこと

男性の欲望の受け皿として女性があるという封建制度の残るカンボジアに限らず、日本を含めて、男女両性に対する性教育とエイズ対策等、女性たちが手を結び合って感性和母性を保護できる教育の必要性を強く感じた。このことを理解してくれる男性の人々と共に、人材教育や職業訓練所等、援助できることはたくさんある。しかし、もっとも大切なことは、カンボジア自身の主体性を尊重することなのだと思う。その国の国柄、国民性を大切に、農業をしっかりと守りゆったりペースで生きている市民の生活に混乱を起こすような援助を、カンボジアの人々も求めていない。政府や企業のトップにいる男性たちの人間としての感性を、もう一度元に戻すことにより、男女両性の幸福とは何なのか？ 戦争により傷つき悲しむ人間をつくらないため

に、私たち女性も、男性の感性を取り戻す作業に協力しながら、何をするべきか、考えたいと思う。

世界の動き、日本の動き、何かがおかしい、と感じられる尺度は、人間本来の自然と共存する生命力と感性だと思う。一時も早く、感性を取り戻した男性と共に、平和への行動作業の時が来ることを心から祈りたい。次の世代にその後ろ姿をしっかりと見せられる大人として、今から責任ある行動をとるために、じっくり考えて歩き始めたい。



PKOの表と裏Ⅱメディアが伝えない真実に迫る

許すなカンボジア派兵！9・27集会への道 中島光子

PKO法案をくいとめ、海外派兵をやめさせようと議員会館に通いつめた毎日。私たちのその意志を民主的に示そうと、七月の参議院選挙では独自候補を市民の代表として立てて闘いました。PKO法案は成立したけれど、一人ひとりが主体者になって流れを変えていこう、このままではいけない、何かしなければ、という思いで、九月五日、第一回実行委員会を開催。自衛隊の海外派兵に反対し、平和憲法を活かそうと、六十名以上の個人と団体が集まりました。

一人ひとりが呼びかけて神奈川や埼玉からも駆けつけた実行委員会。とにかく緊急に行動しよう、集会の名は「許すな！カンボジア派兵 活かそう！平和憲法」に決まり、すぐに 日時は九月二十七日、場所は渋谷で、ということになりました。その二十七日が一刻も早く来いと言わんばかりに実行委員会は数日おきに進められました。その間にもどんどん呼びかけ人は増えていき、百三十三人に。団体も十二団体となりました。

さて、当日は、会場の山の手教会に三百五十人以上の人たちが、戦争への道を許さないぞ、と駆けつけて来ました。

武蔵野市の宇田川さんのあいさつで始まり、プログラムは、「なぜ急ぐカンボジア派兵、メディアが伝え

ない内幕に迫る」と題する 帝京大学教授 降旗節雄氏の講演、同日 京都の大久保基地で 人間の鎖の包囲行動をしている平和行動委員会の連帯のアピール、在日の中国と韓国のお二人による「アジアからの声」、「声機による暴騒音の規制に関する条例」案の撤回を求める特別決議、集会アピール、と続きました。

降旗氏の講演、アジアの二人の友人の発言は、私たちの今後の行動を考える上で深く心に迫るものがありましたので、その概要をお伝えします。

P K O — それは大企業進出の先兵 降旗節雄

地球の至る所で戦争や民族問題が絡んだ紛争が起こった時、国連は、平和を維持するための事後処理として、P K O という名の軍隊を送ってきました。そのP K O という組織が出来たのは一九五六年です。英仏の支配から自立しようとするエジプトのナセルが「スエズ運河国有化」を宣言したことに反発して英・仏の軍隊がスエズ運河を占拠したことによる「スエズ動乱」、共産圏の中で 自由を求めて立ち上がった「ハンガリー動乱」、イスラエルのシナイ半島侵略。これらに対して 国連のなかで、世界の大国が小国の権益を侵すのはけしからん、という主張が起り、カナダ政府から、「国連平和維持軍」をつくらうという提案がなされました。英仏米は反対しましたが、デンマーク、フィンランド、インド、インドネシア、スウェーデン、ノルウェーなど、十か国が賛成。大国が武力で小国をじゅうりんするのに対して「抵抗する組織」としてのP K O が可決、成立したわけです。小国の権益が大国によって侵害された時に、それを守るための軍隊という形でつくられたのがP K O だということを、まず最初に申し上げたいと思います。

その後六〇年代・七〇年代にわたって何度か、特にアフリカなどへ頻繁に、多くのP K O が出て行きました。この時、アメリカや日本はどういうふうに対応したか。アメリカは、国連に対して全く非協力。国連を

最大限に利用している今でも、分担金を何年も滞納しているのがアメリカです。日本は六〇年代に、PKOに自衛隊を参加させるよう何回も要請されましたが、国連の場でも国会の場でも、「日本には平和憲法があります」「自衛隊は軍隊ではありません」「PKOに協力することはできません」と言って拒絶してきました。PKOというのは、もともとそういうものだったのです。一九八八年には、そういう活動に対してノーベル平和賞が与えられました。しかしそれ以後、特に湾岸戦争以来、PKOは全く変質してしまいました。

当初の理念を失って完全に変質したPKO

一九八八、八九、九〇年に社会主義圏に大混乱が起り、ソビエトは分裂、中国も国内経済の問題で危機的状况、と、いずれも自国のことに精いっぱい国連どころではなくなってきたことによって、国連の勢力構造が完全に変わってきました。

国連には安保理事会がありますが、安保常任理事国というのが、絶対的権限、つまり拒否権をもっています。安保常任理事国は、第二次世界大戦の勝利国、米・英・仏・ソ・中国の五か国で、これらの国々の勢力が一応バランスしていたころはよかったのですが、ソビエトと中国が自国の問題に忙殺されて国連どころでなくなったため、完全に発言権を失い、米英仏、——現実にはアメリカ一国が支配する構造になったわけです。この時、湾岸戦争が始まりました。ですからあの時の多国籍軍というのは、国連とは何の関係もない軍隊なのです。結局アメリカの支配のもとに、多くの大国の軍隊がアメリカ軍に協力したわけで、しかも、量・質ともにたいへんな武力をもって、イラクを鎮圧したのです。

抗戦国の一方が認めようが認めまいが、圧倒的な武力で侵攻し鎮圧してしまったこの武力制圧の成果を受けて、PKOは、八八年にノーベル平和賞をもらったころまでのPKOとは全く異質のものになってしまいました。このことを、何よりもはっきりさせなくてははいけません。その点がごまかされています。ジャーナ

リズムも追及していません。湾岸戦争を口実に、その性質を全く変えてしまったPKOであるにもかかわらず、日本政府は、七月五日の大新聞に一齐に広告を出しました。「PKOというのはノーベル平和賞を受賞した非常に権威のある平和の組織で、それに協力するのは日本国憲法の建て前からいっても正しいのだ」とフルにごまかしてしまいました。社会主義諸国の崩壊によって国連安保理の勢力分野がガラッと変動したため、ノーベル賞受賞以後のPKOは、当初の理念はどこへやら、全く別のものになってしまっていることを、まず押さえておいて下さい。

カンボジア派遣の直接的な目的は

次に、利権争奪のための先兵としてのPKOという点をお話します。なぜ、無理を重ねて、今、カンボジアに自衛隊を送らなければならないのか。その直接的な目標は何か。

今、カンボジアでは、たいへんなことが起こっています。カンボジア紛争の收拾と再建のために、戦乱で荒れ果てた土地を自動車やトラックが走り回っているのですが、UNTAACやPKOが使っている車は、ほぼ一〇〇%がトヨタのランドクルーザーです。難民輸送にもたくさんさんの車が必要ですが、それは全部日産の車です。カンボジア紛争の後始末に必要ないろいろな物資、お金、武器、車……、日本の経済力をバックに、日本の商品が氾濫しています。日商岩井、トーメン、ニチメン、丸紅、伊藤忠などが現地に軒並み事務所を開き、復興用の受注を獲得するために走り回っています。つまり、今やカンボジアは、世界の大商社会社の利権のターゲットになっているわけです。したがって、一日も早く自分の国の軍隊を送り、ある程度そこで実績をあげてその国の政府と結び付き、復興のための経済獲得競争に割り込もうという必死の勢力が渦まいているのです。

それだけではなく、いかにしてベトナムに経済的に接近するかが大問題になってきました。明らかに地下

資源の争奪です。ベトナムは、インドネシアとほぼ同じくらい石油があり、石灰、鉄鉱石をはじめあらゆる地下資源を豊富にもつ国です。今や共產主義から百八十度転換して市場経済での経済立て直しをめざしている。したがって、資本主義国の資本をものすこい勢いで導入しようとしていますから、そこに割り込まなくてはいけないわけです。

こうして、今や世界の資本がインドシナ三国＝ベトナム、ラオス、カンボジアをめぐるてのぎを削って争っている。その先兵がPKOなのです。PKOにどれだけ自国の軍隊を出して、どれだけ協力するか、その実績で、向こうの政府との関係を良好にし、いかに経済的に進出していくか、それがPKOをめぐる直接の経済的な基礎になっているのです。「武器を使うことが武力の行使ではない」「武器を使っても武力は使わないのだから戦争ではない」などと、わけのわからないことを繰り返し、小沢はじめ政治家たちが、違法は承知で、とにかく行かざるを得ない、と強引に派兵を進めてきたのは、こうした経済的な理由によるのです。

高度経済成長で軍事化路線が準備された

現在、社会主義経済は結局だめ、資本主義経済が生き残ったではないか、と、よく言われます。資本主義経済というのは、やっぱり人間にとって最も合理的でノーマルな、我々が働いたり生活したりしやすいシステムなのではないかとも言われます。ところが、もうひとつ底をめくってみると、大変な問題があるのです。資本主義こそ戦争の原動力、そして推進力なのです。戦争はものすこい破壊をもたらす——これは当然のことですが、同時に、ものすこい生産力の上昇をもたらすのです。

例えば、第一次世界大戦でヨーロッパが戦場になりましたが、その時アメリカはあらゆる物資を送り込み、アメリカの生産力は何のすこく上がりました。武器を作れば政府が全部買ってくれるわけですから、アメリカの重化学工業生産は飛躍的に上昇した。それを、戦後どうするか、資本主義にとっての大きな問題なの

です。そこで出てきたのが、自動車社会というやつです。ここから、現代の問題が始まりました。

自動車というのは、そのころから、大量生産システムのもとに生産して安く売りまくり始めた。フォードは、「レーニン主義に対抗できるのはフォード主義」と言いました。これは、生産力を上げて労働者の賃金を上げれば、自動車という耐久消費財を労働者が買うという意味です。何百万もするものを数年で買い替えて消耗する。いま日本で六千五百万台、二人に一台ですから、この自動車がどういう意味をもっているかがおわかりでしょう。資源を乱費し消耗している。消耗するものがないと資本主義はもたない。つまり戦争で消耗するか、自動車のような耐久消費財で消耗するしか、資本主義が長らえる道はないということです。

アメリカに新しい資本主義が出来たということ——、消耗させ、乱費させ、それによって生産力を上げていく資本主義が出てきたわけで、これはレーニンも知らなかった。レーニン主義も帝国主義も今は通用しないと言われるのはこういう意味です。ところが、第二次世界大戦下ではもっとひどいことをやっていた。それがオートメーション化で、フォードが、たいへんな自動車産業をつくったのです。これを日本に輸出し、トヨタやホンダなどを中心にしながら、日本を自動車社会にした。これが、日本経済の高度成長の意味です。一九五五年から七三年にかけて、日本の生産力はすさまじい勢いで上がってきました。ライフスタイルが、自動車とか電気冷蔵庫や洗濯機などアメリカ型になってきたのです。しかしアメリカでならまだしも、アメリカの二十五分の一の狭い日本の国土には資源がない。そこでどうしたか。太平洋臨海コンビナートと言って、重化学工業の八〇%以上を海岸地帯に集中させてしまった。したがって、農業・林業・漁業という第一次産業は完全に絶滅です。こうしておいて、世界中から資源を買いあさり、さらには、重化学工業品・自動車・ハイテク製品・電機製品などに加工して世界に売りまくった。油づけにした工業国家、農林漁業を絶滅させた奇形な国家をつくりあげてしまった。これが高度成長の意味です。今日、これが日本のあらゆる問題の根源になっているのです。家族は核家族になって核分裂を起こし、親兄弟まで何がかうかるかというの

が基準になってしまうほど、日本は資本主義社会のトップクラスにせりあがってしまいました。しかし、本
当に生活は豊かになったかというところとも豊かではない。四、五十歳代の働き盛りの過労死。労働時間は
なんと二万一千時間。西ドイツは一万五千時間です。政府は年収の五倍で家と言っているが、都会では家
を持ちたくても持てない。地価が下がりだしたら、政府は途端に元に戻すために十兆七千億円ものお金を支
出した。地価と株価を元に戻すという意味です。十兆七千億円は一人当たり十万円、一家族四人なら四十万
円も出させて地価と株価をつりあげるというのが日本政府の方針です。

円高でアジア経済侵略に方向転換した日本

一九七三年に世界の高度成長もピリオドが打たれました。石油ショックの年です。世界は低成長に入っ
ていくなかで、日本のGNPは一〇%の成長を続けました。今五%に下げましたが、それでも世界的に見ると
驚異的な数字です。日本はME化、ハイテク化、ロボット化で突出し、今や世界の中で使われている生産現
場のロボットの七〇%が日本で使われていて、あとの三〇%はアメリカとヨーロッパにバラまかれている。
日本はロボット、ハイテク化の最先進国です。コンピュータと連動させると、十五年、二十年の熟練者と同
じようなレベルで緻密な作業を二十四時間繰り返すことができるのです。ロボットの導入に対して、アメリ
カ、イギリス、フランスなどの労働者は抵抗しました。生産性は上がるが、首を切られるわけで、労働組合
は全力をあげて阻止しました。ところが日本の労働組合は全面的に協力しました。例えばニッサンの労働組
合は、トヨタを追い越すために夏休みなんて休んでいられないほど、組合と企業が一体化しながら、ハイテ
ク王国になりました。七七、七八年ごろのすごく発達した時です。やがて労働力の需要は減りますが、
生産力は三〇―四〇%上がっていきます。中高年労働者はほとんど首を切られる、賃金は上がらない。総評
は十何年も春闘で連敗を重ねている。つまり、資本に利潤がたまり過ぎ、企業は銀行に借入金返済してし

まい、銀行は、企業がお金を借りてくれないので、家を建てるならお金を貸します、と言い始めた。さらに、余ったお金はというと、土地や株を買う、さらにはハワイやサンフランシスコの別荘地を買う、世界中の絵画を買うなど、お金がダブついたのが八〇年代。そこでアメリカは、八五年にレーガンが政策転換をし、ひどい円高ドル安になります。円高のショックは大きい。

そうやって、日本の商品が売れなくなると、日本の資本は東南アジアに殺到していきました。ここから日本の経済のビヘビアは変わってきました。それまではまだ、国内の生産力を上げ、生活水準を上げ、内需中心に盛り上げてきたのが、八〇年代後半から、もはや内需は頭打ちです。したがってフィリピン、インドネシア、マレーシアなどに資本がどんどん進出することになりました。日本からはすぐれた機械も持って行き、労働者を安いところでは八千円、平均一万五千円の月給で雇う。東芝、日立、ソニー、どこでもだいたい二十万円以下の物を作らせるのです。賃金が十数分の一ですから製品の原価は安いに決まってる。これに日本のブランド名をつけて世界中に売りまくるわけですから、利潤はどんどん入ってきます。

現地に派遣された日本人の賃金は国内にいるよりも割高になります。十人ぐらゐの使用人をもち、大邸宅に住むなどあたりまえ。自国の産業が発達するのではなく、日本の企業の都合で出たり入ったり、しかも利潤は日本に送り返される構造ですから、誘拐事件がひんばんに起きても不思議でなくなる。一百万円の所得と百万円の所得が向き合うのですから。

一日を争うアジアの利権確立のために出兵を

政府側がそういう力と結びついて、民衆とは対立した形で経済は発展し、国内治安は乱れてきます。社会的にも政治的にも乱れてきます。誘拐、革命、クーデターが起きる。

これを鎮圧してきたのがアメリカです。アメリカの世界的軍備配置というのは、ひとつには東西関係・南

北關係をにらんで世界を鎮圧するために配置したわけです。ところが、アメリカは急速に速力を失っていきます。今や赤字をかかえ、沈没寸前の世界最大の債務国です。その世界最大の債務国が世界を支配しているという奇現象が出てきた。そして、財政を切り詰めるには、まず軍事費から手をつけ、五か年計画で節約することになり、フィリピン・韓国から米軍を撤収し始めていました。

ところが、軍隊を配備しなかったら、北側の先進国は南側を収奪しながら発展する構想を維持できません。南側に社会的不安、政治的不安を巻き起こしながら局地的な紛争がたえず勃発するような構造になっているのを抑えつけないといけないというのがアメリカの要求で、その要求を満たすのは、もはや日本しかない。今まではお金を出していたが、軍事力を出さないというのがアメリカの要求なのです。日本自身が東南アジアへの経済の圧倒的な進出、経済的に支配するということをやり通さないと日本の発展は維持できないところまで追い詰められてきています。アメリカ側の要求、日本の東南アジアへのこれまでのアジアへの進出の利権を守り、これからベトナムを中心としたインドシナ三国へ急速に利権構造を定着させるという三つの力をピタッと結びつけ受けとめたのがPKO。何がなんでも法律として一日も早くカンボジアに兵隊を送りこみ、つばをつけるということは経済的な必然性だったわけです。

PKOで インフレと売春に荒れるカンボジア

具体的には今、カンボジアではその経済的必然性が何を生み出しているか。カンボジアの公務員の月給は平均二十ドル。家族四、五人でぎりぎり十ドルかかる。それに対して、自衛隊は一万五千円から二万円。一日百八十ドルです。PKOの一般の軍隊は一日百二十ドル。つまりPKOの軍隊は普通の人の百五十倍。どうしてこれが救援なんですか。カンボジア経済はたちまち大インフレに陥りました。もはや、UNTAACが受け入れた派兵は、八月で一万八千人。これから日本の自衛隊も到着しますと、戦後の物資不足のところ

へ二万人に近い人間が入り、百五十倍の賃金をもらっているわけですから、どうなりますか？ この三か月で七五％のインフレです。こうしてカンボジア内部はインフレと売春で荒れに荒れています。大売春地帯を張っている所へ二万人以上の軍隊が送り込まれる。いったい何のためか。先ほどお話しした利権争奪のための先兵として、経済目標獲得のために送り込まれるのです。

日本の企業は軒並み赤字構造になってきています。しかも需要は増えない。これから、ものすごい勢いで首切り旋風が吹き荒れると思います。そういう日本経済をバックにしながら、なんとかして回復しなければと、もはやターゲットは東南アジアしかないところまで追い詰められ、そこと結びついたPKOというのが本当の意味だということがわかりいただけたことでしょう。

PKOは国際貢献どころではない。まさに北側工業化国が南の国々を収奪する基礎固めです。だからこそ、万難を排して派兵を強行したのです。カンボジアのインフレと売春は、ますます深刻になるでしょう。日本は今、アジアに再び重大な罪を犯そうとしていることを銘記したいと思います。

日本はアジアの信頼を失わないでほしい

在日中国人留学生 李白

私は留学生の立場ですので、PKOに対しては反対とも賛成とも言うわけにいきませんが、PKOに反対する多くの人がいることをうれしく思います。

私になぜ、PKOに賛成と言わないかという、日本とアジア諸国との信頼関係がまだ充分でないからです。とくに、戦後処理の問題。今でもアジア諸国にいろいろな後遺症を残しています。日本の過去の精算の

仕方問題があるのではないでしようか。

P K O 派遣について、中国でも反対が起りました。これはなぜかというと、日本の戦争に対する姿勢だと思えます。その日本の姿勢というのは、日本の戦争体験の受け継がれ方に問題があります。例えば教科書問題とか、日本の若者には、この戦争でどういうことがあったのか、教科書には書かれないので知らないといったことが、いろいろな問題のもとになっていると思えます。そういう中で日本が P K O を海外に出すことは、日本がアジアの信頼を失うことになる。私はそれが非常に残念です。

日本がアジアから信頼関係を得るためには、まず、この戦争の事実の教育の仕方を根本から改革しなければと思います。そして、日本がこの戦争でアジア諸国を傷つけたからこそ、平和国家の理念を築いたことをハッキリと言うべきだと思います。この理念には、世界の他の国々との間にずれがあるのではないかと考えます。例えば、日本の常識は国際的にみれば常識ではないというずれがしばしばあります。つまり、日本の平和主義の常識は世界での常識ではないし、戦争についての日本での考え方も、ちょっとずれがあるのではないかと考えます。今の日本の現実には、日本の憲法が掲げている平和国家の理念とは根本から違っているのでは、と考えます。戦争もいろいろなレベルがありますが、いま日本社会から戦争や戦争準備をなくすために、何をしたらいいのか、皆さんと一緒に考えていきたいと思います。

今は特に日本にとって、一つの転換期になっていてのではないでしようか。日本の国内はどんどん国際化してきて、外国、特に東南アジアからの労働者や留学生がたくさん来ていますが、脅威と思わずあたたく迎え入れてほしいのです。社会になじまないこともあるでしょうが、消極的に考えるのではなく、積極的にこういう人たちを受け入れることによって日本をこれからだんだん国際的社会にしていこうというふうにみんな考えていただきたいのです。こういうことこそ、日本が信頼される基本です。

そして、もっとも日本政治に関心をもってほしいと思いますし、日本の経済力にふさわしい国際貢

献策がなければいけないと思います。「経済力にふさわしい国際貢献」には、さまざまな方法があります。それは決して「武力による貢献」ではないことを、最後にもう一度申し上げたいと思います。

日本の大学に学んで、私は日本を愛しています。ですから、どうか日本がアジアの信頼を失わないでほしい。そのことを、心をこめて申し上げます。

日本の過去を、私たちは「恨」として忘れない

在日韓国人 金平成

私には二つの立場があります。一つは、在日韓国人です。もう一つは、日本の戦後責任をハッキリさせる会Vで、朝鮮半島において今も戦争被害に苦しんでいる戦争犠牲者のみなさんの裁判支援をしています。

九一年十二月に太平洋戦争遺族会Vという韓国人の犠牲者の遺族団体が裁判を起こし、今年の六月に初公判をむかえ、九月十四日に第二回目の公判を終えました。その間、私は数回にわたって、過去の戦争責任だけにとどまらず、現在も続く戦争責任とはどういうものであるか、今も血と汗のなかで苦しんでいる方の生の声を聞くことができました。私が在日韓国人としてこの場にあり、被害者の方に対して接するということの意義を改めて深く思い知ったのです。そういうつたない経験のなかから、彼らがこのPKOについてどう言っているのかを代弁しつつ、なおかつその考えを若干述べさせていただきます。

PKO派兵のお金があるのに、なぜ補償はできないの

彼らは昨年の十二月に初来日した時も、六月の初公判の時も、奇しくもPKO問題ならびに自衛隊の海外派兵が声高に騒がれている焦点の時に来しました。十二月の時も国会が本当に膨大な数の機動隊に囲まれたな

かであって、ただ一人といえますか、先例をつけた形で、遺族会の方ではデモ行進をいたしました。六月の時もデモ行進しましたが。その時彼らは心の底から我々の戦後の問題をそのままにして、いまだに苦しんでいる犠牲者をそのままにして、今新たに軍国主義を復活し、海外派兵をもくろむPKOに対し、絶対に反対し、断固として拒否すると声高に言っていました。彼らがなぜそのようなことを言うのか、いまさら私が申し述べなくても、皆さんはご存じのことと思います。片腕を奪われたり、体に傷を受け、ずっと孤独と悲嘆のうちに四十数年間人生を生きざるを得なかった人々の声は、いま日本政府がマスコミの統制と国論および国際貢献という美名のもとに行なっているいかなる宣伝よりも真実をつき、また、いかなる宣伝よりも我々の心に訴えてくると私は思います。

アジアの民は、骨の髄まで苦しみを知っている

彼らの叫びは本当に聞く者の心を動かすものです。日本政府は彼らのそのような叫びに対して、これまで何らの補償も回答もしていません。遺族の人たちはそれに対し、PKO法案を言う暇があれば、とにかくわれわれの問題をなんとかしてほしいと訴えても、厚生省は自分が握っている名簿のひとつも公開しません。日本政府は、つい先日までは従軍慰安婦問題に関しても、強制連行、植民地謝罪はあずかり知らないと言っていました。証拠が出るや、これを翻し、ついにしるしを認めざるを得なくなりました。このような日本政府の二重の不誠実な態度は、日本のPKOの国際貢献というものを心から疑わせる原因といえましょう。我々してみれば、国際貢献、国際平和と唱えられても、私たちの夫を、妻を、娘を奪ったのは、まさしくそのような美名をふりかざしてアジア全部をじゅうりんした日本軍ではなかったかと思わずにはいられません。おそらくこの声は我が朝鮮半島だけではなく、二千万人というアジアの被害者のすべての声だと思えます。したがって、カンボジアでもこのような声が充満してくるのは疑いありません。あのインドシナこそ

は最も日本の血と現地の民衆の血が流された所でもあります。ベトナムでも、インドネシアでもカンボジアでもすべて、日本軍がどんなことをしたのか、我々は知らされてはいませんが、彼の地に住む人々は骨の髄まで知っているのです。

日本の国際貢献は国際的大迷惑

そのような状況のなかで行う海外派兵、日本政府の国際貢献論がいかに空虚なものであるかは、まさしく白日にさらされていると思います。金をばらまいて国際貢献だ、国連だ、と言ってだまそうとしても、実際にそこに住む人は国連軍に土地を奪われ、横暴なふるまいをすることにひんしゆくしているのが事実です。これは国際貢献ではなく、単なる国際的な迷惑だと思っています。複数の民族の入りくんだカンボジアのような所で国連というプレゼンスを大国の論理で処理しようと思っても、とうてい処理できるものではありません。私も含めて私たち韓国人は、カンボジアのことを多くは知りませんが、明石代表は総督府のようだ、顔は日本人だが、考え方は完ぺきな西洋人だ、と現地の人たちは言っています。

遺族の人たちは、日本の国旗を見るだけで寒気がする、しかも、裁判のためとはいえ再び日本に来ることも全身に嫌悪が走る。再び半島に日の丸を自分の目の黒いうちは見たくないし、死んでも阻止する、と言う人もいます。かつて同じ軍服を着て同じ日の丸のもとに犯した罪を、自衛隊が再び来ることによって、まさかと思ひ起こします。誤った国際貢献——国際迷惑という国際貢献ではなく、日本がきちんとした戦後補償と自己反省をしたうえででの論議を望みます。アジアの人たちに徹底的な不信感をまきおこさせないよう、我々が本当の友情と連帯のアジアを築きたいと思うのであれば、許しがたい自衛隊の海外派兵を全力をもって止めるように、こ一緒にがんばっていきましょう。

9・27 共同行動

渋谷Ⅱ山手教会、街頭デモ・リレースピーチに燃える

遠藤むら子

日曜の渋谷の雑踏は想像を絶する人の数で、私はこの駅に來ると片目で歩き、視界を拡げない。

国際貢献の言葉から何度足を運んだらう。

PKOカンボジア派兵は、アツと言う間に実施されてしまった。国民のためになる決議の実行は無視する政府が、こればかりは超スピード。なぜカンボジアで、なぜ憲法違反の自衛隊派兵なのか。降旗氏の講演で、ズバリ国際貢献の影響で、経済は地盤沈下の今、起死回生で資源豊富なアジアが、第二次大戦の時のように狙われている。権益の持続と拡大のため。トヨタがUNTAAC用車、日産が難民輸送車にと受注も確定と、その意図が明確にされる。

中国の留学生は満場の前で初めて話す緊張を隠して、日

本の経済的豊かさは、国際貢献の義務があるが、戦後処理を回避している平和国家の理念とのズレを指摘し、原因は教育にあり、教科書に戦中アジアでしたことの記事がなく、教えられていない等「中国からの留学生の立場として」と一言付け加えた後、静かに、注意深く訴えた。

続く在日二世は、戦後補償裁判で聞っている朝鮮から連れて來られた一世と、日本で生まれた二世の複雑な立場を、歴史の狭間の犠牲者として一言注意してから、日本の国際貢献は戦後処理なくてはありえない。二十万のアジアの同胞を未だに見殺しにしている、と怒りを表して訴えた。

会場の強く大きい連帯の拍手が高い天井に響いた。

四時、デモ行進は我々の連帯の思いを一つにする発露として絶好だ！

大きな行進のうねりがビルの谷間に、人混みの雑踏と共に展開する。警官の態度が国会前とは随分違う。交通整理並み。マイクにシュプレヒコール、ピースソングに金丸の仮面、横断幕や平看板と賑やかだ。

「あーら」の旗を持ってくれば良かった。人々の反応はそんなに悪いとは言えない。NHKが見える。まったくイヤになる。静かだ！

五時、ハチ公前。主人のいいなりになんかならない、変な舌打ち。私たちは夕映えを背に今度はリレー演説会三十余団体。「あーら」の前に法政平和教室の尾形憲氏が余生を平和の為に献げる、とこの危機を訴えられ今度は出番と、斉藤（「あーら」）の代替えで私は、『従軍慰安婦特集』つくりの中で知った、知らないこと、の恐ろしさ、知った、ことの恐ろしさ。このPKOがどんなにその道と一体なのかを知るにつけ、知ろうとすることの大事さと、その行動への結びつきを訴えた。恰好の良いことは言えないが、言える場で言わない限りもっと……。青島幸男氏の仲間が

駆けつけ、佐川急便の金丸議員辞職を訴えてハンスト中であるとの演説もあった。七時解散。人々の雑踏はかぎりなく続いた。

日本の一枚岩？の平和を楽しんで。

夜九時、電話がかかってきた。昨日丸の内日航本社前で自衛隊本隊を乗せるのに、日航のチャーター便で行くとの情報に雑則を心配する人たちで、社員にピラ配りをするから朝八時十分前に東京駅でと。ソレっ！小雨降る中、意外な顔をする社員たちの反応。ほとんどの人がチラシを受取り、PKOで儲けないで!!自衛隊の下請けをしないで!!と訴えも聞こえた風で、私たちは気をよくした。雑則の会は「民間の協力を得る」という箇所をいち早く、コレだ!!コレが国民総動員法と同じ効力を持ち、徴兵制に結びつく、とイヤな察知をして行動開始!!日航のパイロットも、物資輸送の貨物船の船員も社命とあれば断れない。軍需——戦費——税金、個人——会社——国——法律とつながる中、私たちは統制されていくマスコミの情報操作も見抜けない。

JVC（日本国際ボランティアセンター）の人は言う。

「現地に飛び込んで共生共感すれば絶望等してられない。自力で立ち上がる人たちを市民運動の人たちは連帯しよう」としない。政府にはワーワー言うが」。

また「朝まで徹底討論PKO……」の論者たちは、海外派兵は違反の人たちも自衛隊（軍隊）はあって当たり前、

無いのは馬鹿とばかり議論する中女性是一人。あること自体憲法違反を問われているのに。やはり男に任せていると人類滅亡の浅知恵しか生まれまい。

非暴力の論理も生まれない。

こちらで女性だけのあごらを設けねばとつくづく思った。

10・4 山川暁夫・鈴木裕子氏を囲んで

——女たちのかんかんガクガク討論集会

生田あい

十月四日、池袋エポック10で、「今なぜカンボジア派兵なの、国際貢献の本当の狙いは？」をテーマとした「女たちのかんかんガクガク・討論集会」が開かれた。

この集会は、反PKOの内田選挙の中で生まれたへ女たちのネットワークの発意で、これまでの経過や名称・枠にこだわらず集まり、ここでちょっと一息いれて私たちが

今どこにいるか、これからの運動のありようなどを共に考え、より大きな女たちの共同の力を創りだしていくべく開かれたものだ。

当日は、お一人お一人が問題提起者となってもおかしくないと思われる、首都圏の主だった女性たち五十数人が集

まった。

集會は大倉八千代・新美みつ子さんらの司会で始まり、初めに本尾良さんが、主催者を代表して戦後の自衛隊の前身である保安隊成立の背景や、戦後政治の流れの節目を振り返りつつ、今日の自衛隊の海外出兵という重大な日本の歴史の局面で、女たちが生活に根ざして、地域でしなやかに多数派をめざしていくことの重要性を強調されながら、討論会の持つ意義などを話された。

討論の最初に、問題提起を評論家の山川暁夫氏と、女性史研究家の鈴木裕子さんから受けた。

お二人の話は期せずして、世界と日本、歴史における現在と過去と、そして主体としての日本民衆と、そこにおける女たちの位置と責任という縦糸と横糸のような関連と相互を補完する問題提起となった。

その豊かな話を私個人の受けとめたものとしてまとめることでは、大切なをはずしているのではないかという不安を持ちつつも、乱暴にまとめてみれば、以下のようです。

まず、山川氏は「カンボジア派兵の本質とは何か」とし

て、「自衛隊の海外出兵をもって、日本は『解釈改憲』による軍事大国化への最後の橋を渡った」のだと言われた。

さらに「国際貢献は何のために、誰のために、何を貢ぐのか」として、氏は世界情勢の大きな変化の中で湾岸戦争を機とした「国連」と「PKO」の質的変化を指摘しつつ、「問題の本質は、日米安保の『世界安保』への変化の中で、『国際貢献』の名の下に、日本帝国主義が『カンボジアのマッカーサー』よろしく、他国と他民族の運命を管理する所」にきた。カンボジア人民自身の自立と自決の運命を蹂躪することなのだ」と鋭く説いた。さらに山川氏は、こうした「改憲状況」の中で、これまでの戦後の護憲運動の質のままで聞えるか、と挑発的に問題提起をしつめくられた。

鈴木さんは「戦後補償〈従軍慰安婦〉にかかわりながらPKOを問う」をテーマに話された。その主旨とするところは、〈従軍慰安婦〉問題の本質は、「皇軍」による組織的集団的「強姦」、「性搾取」であり、国内での性的抑圧と民族差別の完成を意味し、総体としてアジアへの民族抹

殺政策を含んだ日本の天皇制国家の国家的犯罪である。これは、今カンボジア派兵の中でも再生されている。この歴史は、日本の近代化以来の資本制と家父長制にもとづく男性中心社会に由来しており、その意味で日本の女にとって、この男権社会を支えてきた責任、男の政治にノーと言えなかったその責任が問われるべきではないか——という女たちにとっては、非常に重く鋭い問題提起であった。

コーヒープレークをはさんで、忙しい中を駆けつけてきて下さった衆議院議員の外口玉子さんからの、現在の社会党情勢とその中での女性議員たちの置かれている厳しい現実と闘いの報告を受けて、いよいよ参加者によるかんかんガクガクの討論が始まった。

それは、最近では珍しいほど中味のある意見が次から次へ出て、とても時間が足りないほどだった。

討論の焦点を整理すれば——

① 山川氏の挑発を受けて、「今こそ積極的に護憲を主張すべき」「いいえ、日本の繁栄の犠牲になった人々のことを考えれば、これまでの護憲ではダメで、もっと本質的

なことを」「民衆の原則をはっきり出しながら、当面憲法九条を守る運動とすべき」など、賛否両論分かれて今後の運動の政治の方向をめぐる点、

② 「国際貢献の陰で企業が何をしているか、具体的資料が欲しい」「新聞が書かない情報や市民運動の取組みを、情報ネットワークのようなものをつくって伝えていくことが今後の課題ではないか」「改憲勢力に対応していくためにも、女たちのネットワークが必要」「生活の中からPKOを考えるという視点で、女たちをいろいろにつないでいく連絡ネットワークを考えてほしい」などの主に「女のネットワーク」に関する点、

③ 「今の金丸に象徴される、金権政治こそ諸悪の根源」「金丸やめるで署名活動をしているが、反応がいい。こういうことを一つ一つ闘うべき」「労働運動の中で闘っているが、今ノーといえる一人一人の個人が重要」「こういう集会に来てみんなと会って話すと、元氣が出る」

「人間の『臓器』までもが売買され、かつその中にまで差別が貫かれていること、優生思想の強化がPKO派兵と無関係ではない、危険だと思う」等々、当面の政治課題や具体的な取り組みの報告に関する点——等でした。

最後に、討論のまとめとして、多くの参加者の提案を受けて、一つには「金丸に議員辞職を勧告する決議」「東京地方検察庁の、金丸信議員に対する略式起訴に抗議する決議」案の確認と、総理府への行動を決め、二つには、ゆるやかであっても、生活と地域に根ざした「女たちの情報、連絡ネットワーク」をつくっていくことを、参加者全員の総意として確認した。

こうして、女たちによる手づくりのかんかんガクガク討論集会は、女たちの中で今後の運動の政治方向をめぐる重要な討論の始まりをつくったのではないかと思います。

その後の急速な日本の政治の流動化の局面は、私たちにこの討論をもっと深めることと、その大きな拡がりへの努力を「女の情報ネットワーク」の具体化とともに、急ぐことを促していると思います。

それにつけても、今、知恵も元氣もある女たちは頼もしい素敵だ。日本の金権政治の腐敗を救えるのは、女たち以外にはないのではなからうか。そんなことをこの討論集を準備した一人として深く感じました。

皆さんはいかがお考えでしょうか。

★★★★★ お申し込みはお早く ★★★★★★

あごら20年のつどいは

11月7日(土) 東京・市ヶ谷にっしゅう会館で

☎ 03-3269-8159

A 田嶋陽子の「おもしろフェミニズム」

(1時-2時)

B AGORAボトム会議(2時-5時)

マスコミの限界/ミディコミの限界

下村満子・増田れい子・しまようこほか

会場討論大歓迎!

C トーク&スピーチ(6時-9時)

私は言いたい!!

河野信子・金住典子・高橋ますみ etc.

全国元気印の大集合

飛び入り大歓迎!! 運動・企画のPRもどうぞ..

会費 A・B・C各千五百円

一日通し四千元(夕食代込み)

宿泊四千五百円(朝食つき)

日本国際ボランティアセンター(JVC) の活動を支援してください

JVCは、インドシナ難民の大量流出をきっかけに、一九八〇年二月、タイのバンコクで設立された日本の民間協力団体です。人種、国籍、宗教、その他の信条の違いを越えて、世界中の人々が、抑圧したり抑圧されたりすることなく、私たちの生活基盤である地球を傷つけずに、永続的に暮らしていける社会をつくることをめざしています。JVCは個人、団体からの寄付金、国連機関からの委託金によって運営され、現在、タイ、カンボジア、ラオス、ベトナム、エチオピア、南アフリカ、パレスチナおよび日本国内で活躍しています。

私たちは市民団体として、政府主導の協力活動ではなく、国家／政府という枠を乗り越えて、私たち市民一人一人がカンボジア市民に直接的に協力するという、

「市民の論理」を提案します。それは、国益にとらわれず、あらゆる政治的恩惑に左右されない「世界市民の論理」です。

——『市民として関わるカンボジア』より

★講演会・勉強会・カンボジア料理会等に講師を派遣したり、スライドやパネル等の貸し出し、募金活動をやっています。ぜひご協力ください。

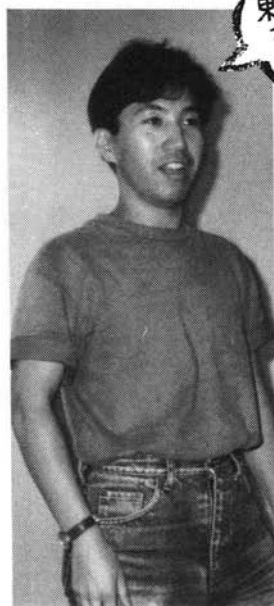
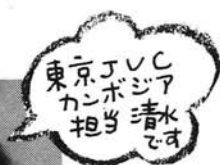
日本国際ボランティアセンター(JVC)

〒110 東京都台東区東上野1-20-6

(丸幸ビル6階)

☎ 03・3834・2388

FAX 03・3835・0519



今こそ怒りを結集して 巨悪の構造に迫ろう

金住 典子
増田れい子
斎藤 千代

(弁 護 士)

(ジャーナリスト)

(あ ご ら 編 集 部)

斎藤 先のPKO、そして今回の金丸の問題。PKOの話を、世の中が逆さに動いているんじゃないか、という話と結び合わせないと、今の日本の状況がみえてこないのではないかと、今回、急きょ「PKOの背後にあるもの」、という特集を組みました。日本各地で市民が黙っていないという動きをできるだけ伝えて、最後まで追撃の手をゆるめまい、と。

私、めったに怒らないんですが、今度はかりは怒り心頭に発しています。PKO法案の成立にしても、全くトリックもので、野党の対応が問題だったとしても、あれだけの世論の反対を問うことなしに、強行成立させてしまった。一つ一つ市民の抵抗のほうがおおくれになっていて、このままではどうなるのかとても心配です。それに対して私たちが何をしたらいいのか、話し合いたいと思います。

三権分立のない日本

斎藤 金丸の問題ですけど、五億円もらっておきながら、なぜ二十万円の罰金ですむのか、なぜ略式起訴ですむのか、ということが理解できない。

金住 犯罪行為があった場合、公訴提起するか否かの権限は検察官にあるんです。罪を犯した人は、公訴提起後、公開の法廷で適法な手続きにしたがって証拠調べ等の裁判を受けて裁判官の判決によらなければ処罰されないのです。

略式手続きというのは、罰金以下の軽微な刑にあたる罪について、検察官が簡易裁判所に公訴提起すると同時に略式命令の請求をし、裁判所も略式手続きが適当と判断したときは、公開の裁判手続きを行わず、検察官提出の証拠書類のみで処罰の命令を出す制度なんです。あらかじめ、被疑者に略式手続きによるか通常の裁判手続きによるか説明をして、被疑者が異議がないことを認めた書面を提出しなければ認められません。むろん、略式命令により処罰を受けても納得しないときは十四日以内に正式裁判の請求をすることができるようなんです。

一般によく知られているのは道路交通法違反の罰金以下の刑の処罰の場合ですね。

今回の場合、政治資金規正法第二二条の二の金九個人に対する寄付の量的制限違反として最高刑の二十万円に処せられたわけですが、この罰条の適用が正しいということであれば、手続き上は略式手続きも認められる可能性はある

わけですね。

一般庶民が略式裁判を受けるときは、一応簡易裁判所に呼び出されて、そこで略式審理を受けて命令が出されるという手順を踏むんですが、今回の場合、それも上申書を出しただけですんだんですね。略式手続きは公判を開かない手続きですから、それでも違法ということには理屈の上ではならないわけです。しかし『週刊文春』で立花隆さんが鋭く指摘されていたように、幹旋収賄罪等の疑惑があるし、竹下さんに対する右翼のいやがらせを押さえてもらうようなクザの親分に頼んだ際に使われた金とも言われているものですし、巨額の金が動いているんですから、見返りも巨大はずなんです。検察がそうした取り調べを放棄して最も軽い罪で起訴して済ませようとしたことがずいぶん国民を馬鹿にした話なんです。

札幌高検の検事長が批判されたのは、きっとこれでは公訴権を国民に代わって付託されている検察官の威信にかかわるひどい処理だという危機感からだったと思いますよ。内部からああいう意見が出るようになったという意味では進歩だということもいえるわけですが、国民の直接の代表である国会議員たちのひどさとそれに追隨している検察の



金住典子さん

「どんな場でも、民主主義
の原理原則を主張したい」

ありかたに黙っていられなくなつたとも言えますね。

斎藤 まだ戦前のほうが司法の独立はあったような気がしますね。父は判事だったんですけど、判事は現職を退いても終身官、生涯身分を保証されていて、時の軍部にいちばん抵抗したのは司法だったという実感があります。あの軍でさえ最終的には手が出せなかった。だからどんな圧力を受けても真理を裏切らないという姿勢を貫き通せた。

今は「三権分立」していませんね。大体最高裁の判事を内閣が任命するというような、つまり行政の下に司法があるというような、そんな納得できない話は憲法に基づいて

いるわけですか？

増田 (ハンドバッグから、『ポケット憲法』を取り出して) 憲法を調べてみましょう。

金住 わあ、すごい。さすが増田さんですね。いつも『ポケット憲法』を身につけていらっしゃるのね。これこれ、憲法第七十九条に「最高裁の裁判長以外の裁判官は内閣で任命する」ってありますね。

増田 長は誰が任命するのかしら？

金住 それは裁判所法にあるんです。三九条に「内閣の指名に基づいて、天皇が任命する」と。

斎藤 最高裁の判事を内閣が任命するというのは、どう考えてもおかしい。今の司法は、時の政府の顔色をみて行動しているような印象を与えている。提訴したから安心ではなく、提訴したから心配という判例が、こここのところふえていますね。だいたい裁判に回される前に、政治家がらみの問題は指揮権発動で不起訴になる。

自民独裁は人権問題

増田 今度の金丸問題で検察権もあやしいと実感させられ

た。

金住 このあいだのPKO法案をめぐる国会審議を見て思ったのですが、つくづく民主主義の質といえますか、主体性の弱さを感じました。そしてその根本に立憲主義とあって、天皇も大臣も国会議員も、裁判官、検察官もすべての公務員に憲法尊重義務が憲法で課されている（憲法九十九条）にもかかわらず、そのことをしっかり踏まえている議員が誰もいないことに驚きました。

裁判官は、「良心にしたがい独立して職務を行う」という裁判官独立の原則が憲法で規定されていますが、検察官は、公訴権の行使は「検察官一体の原則」にしたがって行うこととされているんですね。いずれも身分は保障されています、裁判官は弾劾裁判と国民審査による以外、行政機関が罷免することはできません。検察官も検察庁法で一定の身分保障をしています、公務員としての懲戒処分は認められているんです。

したがって、検察官のほうがはるかに組織に縛られて仕事をしているにもかかわらず、札幌高検の検事長がいち早く発言されたことはまさに立憲主義の精神を発揮されたわけで、すばらしいことだと思えます。こういう発言をし

たからといって発言者を懲戒処分することはできないのですから。

それにくらべ、国民を直接代表しているはずの議員たちは、政党という組織に属していたり、政党のお陰で国会に出ていますから、自分の頭で考え自由に意見を言ったり、自分の信念にしたがって行動するという人がかえって少ない。長いものに巻かれるタイプの人が国会議員に多いというのが国民にとって不幸な現実ですね。

斎藤 議員は検察庁の出頭命令でも拒否できるほど身分が保障されているのに、体を張って行動する人がほんとに少ない。何とも残念ですね。

増田 日本人は「ドン」が好きなのよ。法や秩序ではなくて「ドン」が言うことは、すべて正しいという、ね。

斎藤 リーダーを求めないで、「ボス」を求めるのね。金住 PKO法案の審議の際にも、それこそ自衛隊は、自民党の一元独裁政権のもとで、「解釈改憲」というとまともなやりかたのように聞こえますが、要するに数の論理でねじ伏せて今や世界有数の軍隊になってきているのは明白です、したがって憲法九条に実質的に違反していることは明らかなのに、全く憲法議論をしませんでしたね。

その自衛隊を海外に派遣するというのは事実上の派兵なんだから、憲法改正手続きを経て九条を改正して自衛隊を容認しなければPKO法も無効になるという根本問題なのに、そういう立憲主義にかかわる基本的なことを与野党議員を含め誰も議論しようとしない。参議院の本会議の直前に私はそのことを『朝日』の「論壇」に投稿したんだけど掲載されませんでした。おそらく自民党一党独裁政権のもとで憲法論議をしたら改憲されてしまうという危機感があったのかもしれませんが、肝心な時に原理原則にしたがった議論を尽くさないということは、けっきょくマスコミも野党も力の論理に負けている証拠ではないかと私は思うんです。それに、民主的な力というのは正しいことを堂々と考え主張し議論を闘わずなかで育つんですよね。そのことを自覚しない人たちが余りにも多すぎます。でも私のようにどんな場でも民主主義の原理原則を主張するのを、在野の中でも好まない人が多いですね。なんだか日本人のほとんどが力の論理に流されていることに抵抗感を感じていないように見えますね。長いものにまかれるのが好きなんです。こういうなかにいると自分のほうが子どもっぽく見えたりすることもあるんですが、いや、ほんとうに民主主義

をこの国で育てていくにはこれが基本的に大事なんだと自分で自分を励ましたりしています。

斎藤 そういう「子どもっぽさ」というか「一途さ」は、今の日本ですらでも大切なことではありませんか。近頃は、呆れ返るようなことでも怒らなくなっている。「どうせ言ってもダメ」という絶望。これはもう民主主義の終焉ですね。

増田 怒り方が足りない。なまくらなんです。ようやく昨日あたり百くらいの地方町村議会が金丸問題に対して、「とんでもない」という決議を出しました。末端の自民党の地方議員が怒っているんです。次の選挙に勝てないという選挙がらみのことではあるんですけどね。

永田町と、それをとりまくマスコミとか、評論家とかの間では、金丸のゴリ押しにやられてしまったところがあるけど、地方はそうじゃない、というのはおもしろいですね。選挙民とじかに触れ合っているということもありますね。

斎藤 地方議員には近頃、女性がかなり進出している。男性でも若いしろとうが当選している。地方議会にまだしも正義という意識があるのは救われますね。これがよい先例になれば、日本の政治にも多少が希望が持てるけど……。

“金丸旋風”を追い風にしよう

金住 おそらく自民党の竹下派では、金丸を政治資金規正法の量的制限違反による「略式起訴」で罰金刑ですませれば、これは検察がやったことだからというので、いわば検察の権威によって国民が納得すると言いますか黙る、と甘く考えていたのかも知れませんが、かえてそのことにより、権力の癒着と、国民を馬鹿にした発想が明らかにになりましたね。そのうえ金丸は、あの巨額の金は“政治資金”



増田 れい子さん

「市民感情をまったく理解しない特権意識のおそろしさ」

だというお墨付きを検察にいただいたも同然ですから、所得税脱税の追徴金も免れるという計算でしょう？

斎藤 なるほど。そこまで計算して「いさぎよく」、名乗り出たというわけですね。でも、それは合点がいかないと、

脱税ではないかと告訴した人、報告しなかったのは政治資金規正法違反ではないかと告訴した人たちがいますね。

金住 今までの贈収賄は、大臣などの公務員としての職務権限に結びついて行われていたわけですが、今回は、金丸が大臣の職務にあったわけではなく、自民党の最大派閥といわれる経世会や野党第一党の社会党にも流れたと言われていますから、収賄罪の適用が難しいと言われているわけですが、何かうまい話がなければそんな大金を佐川の側に出すわけではないのですから、これだけの巨額の金を何のために出したのか、その目的をしっかりと取り調べれば必ず賄賂性は明らかにするはずです。そうすれば立花さんが指摘されているような幹旋収賄罪が成立する可能性は十分あるんじゃないかと思います。こんなところにも、自民党の最大派閥の国会議員がやった行為には刑罰法規を消極的に解釈適用し、庶民が何かやればどんなアミを広げて厳しく処罰する検察の人権無視の体質が、逆に現れていますね。

増田 ただ今度の件はマイナスばかりでない。政権の内部、自民党の本質がありありと見えた（笑）。

金住 ソ連のことを共産党の一党独裁といって民主主義を踏みにじっていると批判してきましたが、そんな批判などできないくらい自民党の一党独裁の腐敗のすこさが明らかにになりましたね。

斎藤 フセインのこととも言えない。自民党のほうがよほど独裁です。組織的独裁。

増田 金丸の論理は自派が安泰なら自民党も安泰—自民党さえ安泰ならこの国も安泰という論理。そして、安泰にするために選挙には勝たねばならない。勝つには巨額のカネが要る。そのカネをつくってどこが悪いということでしょう。

金住 腐った権力支配を許してきたのは野党にも責任がありますね。今回の金丸問題で国民が知った事実のもう一つが、民社党や公明党はいわずもがなですが、野党第一党の社会党と自民党との癒着の問題でしょう。野党第一党が金丸から金をもらっているなどということが事実だとすれば、政治腐敗の追求や政治改革など期待できないという深刻な現実を知るきっかけになったと思います。

だからこそ青島さんが病後の体を押してハンガーストライクを始められたのでしょけれど、同調する国会議員がいるかと思ったら、いませんでしたね。青島さんのように自分の信念を貫ける議員がいなくところに深刻な問題があると思います。

斎藤 大きな政党ほど抱束が大きくて、個人の意志で行動できない。あれは悲劇ですね。何にせよ今度のことは国民にとっては願ってもない勉強のチャンスになりましたね。

ただ議員の中にも正義のためにからだを張って行動している人もいる。この機会に、一人ひとりの所信と収支明細を積極的に公表してほしい。与野党共に自浄作用が絶対に必要ですね。

それにしても、与野党を問わず、そういう議員を選んできた国民にも問題があるのでは。

金住 テレビに登場する政治評論家のなかにもそういう言い方をする人がよくいるんですが、私はそれには異論があるんです。政治家は国民の税金から高額の活動費やさまざまな特権を与えられて国民の代表としての職責を果たす義務のある政治の専門家なんだから、政治家の責任をもっと明確にする必要があると思います。

野党にしても、選挙の時だけうまく宣伝して当選すれば、あとは自民党のやることに異を唱えてさえいいといった安易な態度があるのではないかしら。イギリスでも政治腐敗防止法ができたのは、名前は忘れましたが一人の国会議員が多くの抵抗や困難に会いながら自分の信念を貫き通して実現したと聞いています。昔だったら足尾の鉋毒問題で被害住民の側に立って闘った田中正造のような議員さんですね。それが本当に国民を代表する政治家の責任の意味だと思います。

斎藤 もちろん政治家の責任は重大ですが、女も選挙権を



斎藤千代さん

「おかしいことは絶対に許さないというパワーが欲しい」

持ちながら情けない与野党を選んでいるということは考えたい。税金を納めている国民、政治を委託した国民として、おかしいことは絶対に許さないというパワーが欲しい。

金住 確かに主権者はわれわれ一人ひとりの国民だという自覚が弱いんですね。だから、議員になる人も選挙の時は頭を下げるけれど、当選したらこっちのものという意識をもつことが許されて、議員になったとたん自分は偉いんだという態度になってしまう。国民も政治のことは議員さんまかせと安易に思いこんできた結果のつけですね。

斎藤 政治家が市民感情をまったく理解していない。

増田 ほんとうの市民感情がわからないままに独裁を続けている。また、わかれうともしないお粗末さ。

斎藤 国民を恐れていない。踏みしだいてもいいと思っている。これは人権問題だと思う。

金住 戦後ずっと続いた自民党の一元支配は、自民党議員にさまざまな利権や特権を与えて腐敗させたばかりでなく、野党の議員も特権を同じように受けますから、いつの間にか特権になじみ特権意識を醸成されたんじゃないかしら。国会議員という肩書、国会議員であることで得られる高収入、野党の議員になった人も、ついついその特権的地位に

投じたいですね。

問題を見えなくしている

権力情報ネットワーク

憧れ、地位につくとずり落ちたくない、そのためには国民の代表という意識より、自分をその地位につかせてくれた党からどう見られるかということが大切という議員が多すぎるんじゃないかしら。そうでなかったら、もっと信念と行動力のある議員がとくに生まれていてもいいわけですからね。

増田 西川きよしさんが言っていたんですけど、国会議員になると雨が降っても決して濡れないですむというのね。さっとクルマが来てね、決して濡れない。これでは国民の気持ちが変わらなくなると、その特権のおそろしさを言いあてていた。

斎藤 ウサギ小屋に住み、満員電車で毎日押しつぶされる悲しみが次第に薄れていく。そのことを選挙民が繰り返して繰り返して訴え続けることが必要ですね。

そして、庶民の心を忘れない人、私たちと行動を共にする人には、惜しみなく感謝し、激励したい。古手による新人議員いびりもあるという話も聞きますが、それを許さないという意思表示を私たちもハッキリ示したい。私たちのような市民運動でも、何かやれば必ず石を投げられます。百万の石をあえて受けて立つ覚悟の人に、私たちの一票を

斎藤 こうした問題の底に、情報の問題もありますね。情報を独占することとは、どんなふうにも民衆を操作できるということでしょう。湾岸戦争の現地に行ってみて、新型爆弾がどんどん開発され実験されていることがよくわかりましたが、こうしたことも全く報道されていない。今年、三月にイラクに再び行って、アミリーヤ・シュルターの公開していない地下を初めて見せてもらったんですが、言語に絶する惨状でした。たった一発の爆弾で外側はなんでもないのに、中にいた人たちは、ヒロシマ・長崎と全く同じ状態になったのですが、それは一階にいた女性と子どもたち。イスラーム世界なので、地下には男性だけが別居し、飲料水があったんだそうです。地下の一分の水を蓄えておく貯水タンクが一発の爆弾で破壊されて水がドット、あふれ出ると同時に、その水が数百度の熱湯になって人間は溶けて流れた。その血や髪が壁にこびりついていました。

何トンかの水が一瞬で数百度の熱湯になるといふのは尋常一様のことではない。

金住 そういう新型爆弾の開発は、ほとんどの人が知らされてないしね。

斎藤 アミールヤの実状を知ったとき、あ、米ソとも核軍縮を言い出すだろうな、と思いましたら、その通りになりましたね。

いま核兵器を持っても使えないし、維持費が大変でしょう。だから核に代わる新兵器を開発し、実験したのだと思います。湾岸戦争は、新兵器の実験戦争、そして旧型兵器の投棄・廃棄戦争だったと思いますよ。旧型兵器は所かまわず捨てていますよ。

増田 イラクが旧型兵器のゴミ処理場になった。

斎藤 工業先進国が結託した謀略戦争ですね、あれは。ほんとにふしぎな戦争で、どの国も宣戦布告していないから未だに終戦にならない。戦勝国が安保理十五か国の決議だけでイラクの海外資産を勝手に分配するなど、それこそ国際正義に反する行為ですね。経済制裁で毎月一万一千人もの人が死んでいるのに、制裁を解除しない。その一方でクウェートやクルド族には援助して、アメリカにも賠償金を

はらうなんて、そんなバカな……。国連が諸悪の根源ですね。

金住 そもそも湾岸戦争は、イラクとクウェートとの紛争に対して、国連が平和的解決の可能性を放棄し、アメリカが国連と正義の名を使って一方的な破壊と殺戮をしたというのが実体でしょう。そのおぞましさに対してどのように怒りをぶつけていけばいいのかとやりきれない思いがします。

先日、テレビで「NHKスペシャル」を見ていたら、アメリカの宇宙戦争計画が湾岸戦争で初めて使用され大成功だったことが報道されていました。

いってみれば、イラクはアメリカの宇宙戦争計画の実験場になったということもできるんじゃないかしら。そういったことは、いつも後からわかるんですね。おそろしいことです。

増田 このおぞましさに対してどう怒っているのか。国連もどんどん変質しているわけですね。その大元はアメリカなんだけれども、日本が追隨して盛んにメッセンジャーボーイのごとく変質させようと行動するわけね。

斎藤 そういう日本政府の方針には、さすがに外務省も氣

が気でなくて、この間、国連で渡辺外相が演説するとき、

「武力による解決を推進しよう」というガリ事務総長の提案に全面的に賛成しようとしたのに対して外務省が必死で反対したみたいですね。そして「PKFは慎重に」と少々だけ提案を加えた。でも、その程度の補足ではなく、本来、日本がキャスティングボートをとれるチャンスだったんです。憲法を旗じるしにして武力による解決を抜本的に否定する新方針を出せばよかった。国連憲章の前文第二章にも「武力による行使、または恫喝を行わない」とあるんですから。

増田 それをやるだけの魂も、勇気も、洞察力もないんですね。

斎藤 フェミニストの中でも、なんで斎藤さんはイラクのことばかりに熱中するの、と非難した人がいるんですけど、私はイラクの問題は大問題と思っているの。イラクの問題は、まさに力による支配の基礎がためて、これを許したらあらゆるものの仕組みが力による支配に変わる。天下分け目の大問題だと私たちは必死だったのです。フェミニストは長い間何に抵抗してきたかというと、力による支配に抵抗してきたわけでしょう。

金住 私もこのごろフェミニストと言っても大きく二つに分かれているように感じています。男性社会に伍していくことを男女平等だと割り切っている人が少なくないように思います。たとえば、この夏の参議院選挙の時、ある社会党系のフェミニストで知られる女性議員が「政党や議員の姿勢を論ずることなく、どの党からでも女性議員を半分ずつは候補に出すべきだ」という趣旨のことを言っていました。こうした考え方は、「数の論理」に傾いていると思うんです。数の論理と力の論理は結びついていると私は思っていますので、私としてはとても違和感を感じました。私にとってフェミニズムというのは、単なる男女同権主義ではなく、個人の尊重と対等な男女関係ということが本質的なキーワードだと思っています。対等な人間関係というのは、従来の男性優位社会の発想であるパワー主義ではつくれないんですね。

斎藤 あらゆる力の行使を拒否してこそ成立する。

金住 そもそも差別社会というのは力による支配管理の目的であり結果でもあるわけですから、差別社会と闘う立場は、非暴力。力で管理しようとするすべてのものとの闘いだと思うんですね。ですからフェミニストと称しながら名

声や權威を肯定したり、そのうえに乗りたがるというのは、フェミニズムの本質とは違うものではないかと私は考えています。

六年前の参議院選挙の時、私は、山本コータローさんと駒尺さんなんか呼びかけて、「日本初のフェミニスト党誕生？」というキャッチフレーズでつくったへちきゅうクラブから立候補して、結局誰も議員を出せず、それきりへちきゅうクラブも解散したんですけど、あの時、土井さんを推し立てて、フェミニストと言われる人たちの多くが社会党に流れたわけですね。

私は、組織主義や数の論理という発想は、けっきょくは力の論理で動くものだと思っていますから、そういう論理で動くものには積極的に参加したいと思っていないんです。ですから、今もそういう動きには一線を画しているわけですけど、へちきゅうクラブは、旧来の政党の組織主義的な発想を否定し、対等な人間関係を基礎にした個人のネットワークという新しい発想があったので共感したんですね。でも理想を言うはやすく行うは難し、スタートに際して十分な意思確認がなく、各人バラバラな発想で参加していたので、簡単に内部崩壊したのだと思っています。

土井さんはあれから委員長を降りたわけですけど、そのことに関係なく、あの時土井さんに結集した女性のエネルギーがほんとうにパワー主義ではなく、女性の柔らかな視点を生かす方向に育てられたか、というと、どうも男の思考（パワー主義）に女も取り込まれつつあるのではないかという危惧を覚えます。

斎藤 率直に言わせて頂ければ、へちきゅうクラブにも掲げている理想と内実の落差はあったと思います。土井ブームも、へちきゅうクラブが志したようなある種の理想主義があり、だからこそ多くのフェミニストが参加したのだと思いますけれど、党の歴史の中にある底深い男性主義は、一群の新人の力では、到底変えることができなかった。それでも、土井さんの主導権が長続きすれば少しは違ったと思うんですよ。新しい芽がそれなりに育ったと思えますけど、あのブームがバブルで終わったところが残念でしたね。あの時、私は繰り返し言ったんです。「屋島」も「檀の浦」もまだ終わっていない、せいぜい「一の谷」だからこれを勝利と言ってはいけない、と。ただどあたかも檀の浦のごとく感じてしまったんですね。客観認識の甘さが女といわず日本人の中にあることも問題じゃないですか。

金住 なんでもほんとうに人が動き出すときは、物事の本質がほんとうに見える時ですよ。そういう意味ではかなり見えて来つつあるのではないかしら。

斎藤 たとえ失敗しても動いてみることは何より意味がありますね。もう一つ、情報の問題もあるんですよ。情報の南北格差が実に大きい。ジャーナリズムは何をしているのか。増田さんは現役を離れたから、思いきり発言できるでしょう（笑）。

増田 日本の新聞は「永田町新聞」ですよ（笑）。あと、「ワシントン新聞」（笑）。この間ね、ロシアのジャーナリストや経済学者の人たち三人の話を聞く機会があったんですけど、ひとりの記者がいうのには、旧ソ連もアメリカの記事が多かったそうです。世界がアメリカしか見ていない。日本の新聞はアメリカと直結した永田町しか見ない。そうすると情報はゆがむわけです。そうじゃないんですね。スウェーデンだってデンマークだっていろいろあるわけですよ。そういうところもちゃんと見ていないとベシミスティックにもなるわけです。情報というのはもっと広く、細かく、具体的に、手に取るようにしなければいけない、と思いました。ジャーナリズムは火が燃えているとこ

ろしか見ない。獲物を狙うハンターみたいに動くものしか見ない、というところがあります。

金住 動いたり燃えちゃってからでは遅いですよね。でも若い記者さんがジャーナリズムを目指して入って来たときには希望に燃えているわけですよ。ジャーナリズム独立の原則と言いますか「ジャーナリズム憲法」のようなものをつくる必要がありますね。

増田 でも動き回るためにはお金がいりますね。そのお金は会社が出すわけですから企業ジャーナリズムである間は大変な限界があると思います。だから少なくともアメリカ式個人立の自営業のジャーナリストにならないとね。フリーでニューヨークタイムズとかと契約するんです、アメリカでは。

金住 そのかわり良くも悪くも競争が激しいわけですよ。日本で、もっとフリーのジャーナリストを育てるという方向は考えられないのでしょうか。

増田 およそ考えられないですね。でも、新聞記者に能力がないとなれば、学者や研究者など、そういう人たちがライターとして契約する、というようにはなるかもしれないですね。むしろ、外側にいる人たちのほうにチャンスはある

かもしれない。私みたいに一度出たらそれまで。新聞社もムラ社会ですから。だから私は「へあこら」という大樹に寄り添っていいかと思ってるの（笑）。非暴力、力を否定する、もうこれ以外にないと思ってるの。

斎藤 二十年間、大変だったけど「へあこら」を続けて来たのは、あまりにもジャーナリズムが情けないからですよ。金権政治とうらおもてになっている。だからミニコミの限界を百も承知の上で、せめて今ミニコミが……と、蟻の斧をふるっているわけです。

この現状を破るために、例えば「地球市民内閣」とかつくって情報のパイプとか発信のパイプをつくる時期にきたんじゃないか、それをやらないとこの状況は変わらないんじゃないか、と思ってるんです。市民も自分の市民権を守ろうと思うのなら、放送局をひとつ持つとか、新聞社をひとつ持つくらいのことをしてないといけませんよ。金住 いま既成政党への不信と結びついて労働組合への労働者の組織率が非常に低くなっているようですね。

私が弁護士になった頃というところから二十二年ほど前ですが、その頃は、社会党系、共産党系と労働組合も弁護士事務所もはっきり分かれていて、労働者の人権問題はそう

いう事務所の弁護士だけがやっていたんです。

今は、サラリーマン社会と言われるほど、ほとんどの人が働いている社会ですから政党系の事務所だけで労働者の多様な人権問題を扱えないんですね。

また東西のイデオロギーの壁が崩れて、真の民主主義と人権が世界共通の課題になってきているわけです。もっと自由な感覚で、憲法や労働諸法を利用して、「私たちの労働組合をつくる」「私たちの人権闘争する」といった機運をつくる必要があるんじゃないか、とこのころ考えるんです。

そして旧来の政党依存型、組合依存型の政治ではなく、もっと市民運動中心の政治に流れが変わっていけば、政治も変わっていくんじゃないでしょうか。

斎藤 だからやはり新しいものをつくるしかないんじゃないんですか。連合が新党をつくっても意味がないんです。一人ひとりの市民が新しいものをつくって、それを太くしてゆくしかない。そういう時代だと思っんです。

金住 新しいものを求めている。私自身その一人です。既成政党には魅力がないんです。これからの議員や政治家に求められる資質は、共に考え、共に生きる真に民主主義的

な思想と人格をもっているかどうかということだと思っ
ます。そういう人だと国会議員になったら、ますます謙
虚に身を粉にして国民のために働くという生き方をする
でしょうからね。権威主義的な姿勢の政治家と共に新し
い社会をつくりだそうという気持ちにはなれませ
んし、またそういう姿勢は人びとの善意の柔らかな
エネルギーを傷つけていくんですよね。議員や政治家
の名声や特権のために人びとをうまく利用しよう
とするタイプの人では、心ある人は信頼して共に社会
変革のために働くという気持ちがないと思っ
てこないと思いますよ。そういう意味で既成政
党を含め

「我こそ」という体質の党や政治家には魅力がない
んです。

斎藤 今回の参院選の投票率が50・72%という
のは、その証明ですね。だけどそのことは敵を太
らせるだけだと思っから、私たちは投票したり、
反PKOの候補者を立てたりしたんですけど、
日本のことが本心に心配でやっいてるという
その真意が残念ながら野党に伝わらない。

金住 でも、独自候補を立てるのも難しいわね。
へちまクラブでやってみて思ったんですけど、
選挙法からして身についていない。どの時期に
何をやれば有効なのか分からず、後手後手に
回ってしまう。今の選挙は玄人、プロ

でなければできなくなっている。もう少しや
るうちに、今やっている市議の人たちの蓄積
を積んでいけばうまく生かしていけるかも
しれないのですけど。

斎藤 市川房枝さんのところにはノウハ
ウが伝わっているのに、あれが中断した
のは残念ですね。

増田 今回の金丸問題なんか、市川さん
が（お墓の中で）どれくらい怒っているか。
政治資金規正法とどれだけ聞ってきたか、
とつくづく思いますね。このことのために
聞っておられたのかと思うと、涙がでます。

斎藤 市川さんは、歳費の三分の一を寄
付されていた。金がないでも政治はでき
る、と。

増田 有名な方だったにしても、それで
やってこられたのですから。

金住 この間からどうしたら新しい、持
続的、有効なものになるか、そのビジョ
ンがまだ思い浮かばないんです。あれこれ
と形を考えても躊躇する。その理由は何か
なっているんですけど、組織をつくる
とどんなに素晴らしい建前ものでも、
日本人の体質だとどうしても上下関係が
できたり、「ドン」ができたりしやすい
でしょう。

斎藤 固定的な組織でなく、アドバ
ルーンみたいな結集軸

がほしいのね。市民情報の受信機関と発信機関。それが無いと庶民の情報はマスメディアには流れない。

金住 あらゆる組織や政党から自由な立場で、PKOの本質的な問題点を徹底討論して、それを情報として公開するとか、時々、重大な問題について徹底討論していけるような軸がほしいですね。

私たちが必要とする情報を得て、何が問題かかみ砕いて、分析して、公開していけるような力を育てられるようなものが欲しいですね。

斎藤 そのためにはお金がいるんですよ。情報を集めるにしても、統合、分析、流布するにしても。

増田 日本の役所は国会議員が行っても情報を隠すくらいのところがあります。

斎藤 企業と労組が一体になってから、内部告発もほとんどなくなった。労働者も利潤追求型になってしまった。一応、ものはとったから労組も要らなくなったわけね。

増田 お金のある側が情報を独占することができる。資本を集積して、自前の市民政権がほしい。国家をはずして、国連を解体しようというくらいのものでできればね。

斎藤 そこです。そこまでやらなくては。フェミニズムの

精神はヨーロッパにもアメリカにも、全世界にあるんですね。火の手を上げられるんですよ。フェミニストのネットワークもこの二十年间で出来ているけど、まだ情報の伝わり方が遅いのね。ハードウェアをもっていないから。

増田 いろんな人のお金とチエを結集して、直接自分の利権にはつながらないけど、反対給付が目に見えるように受けられるとか、いま仕組みられている網が見えるようになるとかね。

金住 いろんな人の力を活性化できる「地球市民情報ネットワーク」とかっていいんじゃない？ 東京支部とか、ニューヨーク支部とか。

斎藤 やりましょう。パソコン通信もいいですね。ゆくゆくはお金を集めて衛星を一つあげるくらいのことはしたい。統一教会が衛星局を持っている時代なんですよ。

金住 それいいですね。必要なものは商売になるし、カンパばかりでなく、お金も集めて。そうでなければ長続きしない。

増田 NGOの世界ね。

斎藤 でもNGOもいま、国家と結び付いている強大なNGOだけが国連出席の資格をもっているわけね。グレース

ルーツのNGOはリストに載っていない。だけどそういう草の根組織は結構地方にはうごめいていている。あれがもう少し細胞としてつながっていくようになればいい。

金住 きちっとしたスペースがあつてね。本拠地ができればネットワークはできますよね。みんな求めているから。財団法人みたいな形ででもできるし。

でも持続させるには、非暴力、フェミニズムの視点をもった世界のどういう人々と手をつないでいけるかということね。新しい哲学がいりますね。そういう新しい哲学をもった地球市民とネットワークするという発想でないと、新しいものは生み出せないですね。

アメリカの最高裁で一九七三年に「ロウ判決」という新しい女性解放を開き男女共生社会を展望するような哲学や理論を秘めた判決が出されたのですけど、それを作り出したアメリカの女性たちの哲学と言いますか解放思想の深さのようなものが日本にはなかなか伝わってこないんですね。判決文だけしか紹介されない。あちこちで、地球市民という感覚での素晴らしい哲学や解放思想が生み出されているはずだと思うんですが、そうしたものを発見し、つなげていく核となるネットワークがないんですね。

これからの解放思想や理論は、自分の人生をかけて自分にも問にかけて真摯に生きている人びとによって作り出されるものだと思うんです。学者がつくる理論にはそういう意味で限界があると思うんです。

そういう理論が早く適確に交流されれば、お互いに励まされて元氣も勇氣もわいてくると思いますけど。

ビジョンさえちゃんとつくれば、人もお金も集まると思います。でもそのビジョン作りが大変。しっかり固めなくてはすぐ砂上の楼閣になりますからね。

斎藤 ともかくいま一番大事なのは敗北主義にならないこと。PKO派兵は着々と進み、各地の自衛隊の大キャンペーンも始まっているけれど、国民一人ひとりが立ち上がって、PKOを推進してきた構造そのものに立ち向かえば、必ず阻止できると信じて貫き徹すことだと思います。戦後四十七年、営々として築いてきた不暴力の思想がここで踏みだかれてはたまらない。不暴力パワーが結集して暴力を打ち負かしましょう。

増田 戦後四十七年の経験を活かしてね。戦後って何だったかを考えてみると、世界の権力は核軍備に走った。そしていまその破綻を迎えたのだけれど、しかし、軍備、武力、

暴力による支配という路線を捨てたわけではないのね。引き続き危険極まりない。アジアはいつの間にか兵器庫に化しているというし、紛争のタネはいくらでも蒔かれるだろう。人権は引き裂かれる寸前にあるのかも知れない。だから人権の出番なんです。自分で自分を守るために、立ち上がる。そのとき私たちの哲学が生まれると思います。女

性がもっと主役意識を持ちたい。

斎藤 そのためには一人ひとりが自分をほんとうに大切にしましょう。そして隣の人も、その隣も大切にしていきたいですね。

(一九九二・一〇・六)

かんかんガクガク 聞いて・話して・ネットワーキング!

11月7日(土) 1時-9時 あこら20年のつどいにどうぞ

A 1時-2時 田嶋陽子の「おもしろフェミニズム」

——いま一番話したいこと——

B 2時-5時 あこらボトム会議 マスコミの限界/ミディコミの限界

下村満子・増田れい子・しまようこほか 会場発言大歓迎!

★ 5時-6時 食事と交流

C 6時-9時 女と男の言いたい放題

河野信子・金住典子・高橋ますみほか

全国元気印大集合! あなたもぜひ一言を☆☆☆

場所 東京・市ヶ谷にしよう会館で ☎03-3269-8159

会費 A・B・C各千五百円 一日通し四千円(夕食弁当つき)

食事と宿泊のご予約はお早く。宿泊費一泊 四千五百円(朝食つき)

お問い合わせ・申込みは あこら事務局まで ☎03-3354-3941

PKOバネがいま日本を揺るがす

防災訓練に戦車が出動

東京 大倉八千代

〈世田谷区では〉

「防災の日」の九月一日、世田谷にある都立砧公園を中央会場にした第十三回防災訓練が、東京都、世田谷区、神奈川・埼玉・千葉の各県と横浜・川崎・千葉の各市が参加しておこなわれました。訓練は、駿河湾を震源域とするMハ・〇の地震の発生を想定したものです。

訓練には、陸・海・空の自衛隊三百十三人に、警視庁の警官九百人が参加しました。

当日、私は市民グループへ92総合防災訓練を考える世田

谷の会〉のメンバーの一員として、中央会場である砧公園で、午前九時から「自衛隊指導型の防災訓練に反対する」というチラシまきをしたり、参加者にハンドマイクで私たちの主張を伝えるために参加しました。

ここで、〈92総合防災訓練を考える世田谷の会〉（以下〈世田谷の会〉）の説明をします。

私が、都庁や区役所や世田谷区内の労働組合（地区労）の職員でつくられている「PKO反対のグループ」から、〈世田谷の防災訓練を考える会〉の準備会へのお誘いを受けたのは六月の末でした。そして参議院選、「PKO反対の候補者・内田まさとし必勝」の闘いを、その会の人たちと共にしながら情報交換、相談会を繰り返し、八月二十一日には林茂夫氏（軍事問題研究家）から「海外派兵時代の防災体制と自衛隊」というテーマの講演を聞くという学習

会も致しました。その結果「世田谷の会」の名で、世田谷区長に「防災訓練への自衛隊参加についての要請書」も提出しました。つまり「世田谷の会」は組織ではなく、まさに「この指止まれ」式にできたグループなのです。

〈中央会場では〉

会場ですす驚いたのは、小学、中学、高校生が先生に引率されて次々に来たことと、世田谷区に二百四班ある防災組織が、お揃いの白いチューリップ・ハットに、その地域を明記した紫のモタロウ旗をたててぞくぞくと集まったことです。

後で聞いたところ、二百台以上のバスの送迎で、三万人近い人がかりだされたことです。それはまさに戦時中の防空演習を彷彿させるものでありました。

また自衛隊の装甲車や戦車があちこちに置かれて、試乗させたり、暗視装置を覗かせたり、ヘリコプターからの降下訓練などもあって、子どもたちや区民を、「いかに自衛隊になじませるか」というための仕掛けが随所で目につきました。その上、制服や迷彩色を着た自衛隊員が、列をつくって会場を移動したり、「陸上自衛隊・展示相談コーナ

ー」や「災害と自衛隊」というコーナーでは、雲仙や大島の噴火や台風の時などの災害に、自衛隊が国民のためにどれほど役立っているかを見せるパネルも展示しており、まさに自衛隊のPRショーという感じでした。

しかし『せたがや』という「区のおしらせ」には、「震災時には同時に広範囲にわたって多様な被害の発生が予測されることから、区や、警察、消防、公共機関などの防災関係各機関が個々に対応するのではなく、連携した対応が必要になってくることから、九月一日の東京都と世田谷区の合同防災訓練には警察、消防、公共機関が参加します」とだけ書いてあって、自衛隊の自の字も書いてないのです。

〈治安訓練も〉

周知のように日本は世界でも有数の地震国ですから、安全な町づくりと共に、防災訓練の大切さは、私にももちろんよくわかっています。しかし今回の訓練の場所は、私の家からバスを乗り継いで一時間もかかります。つまり本来の避難場所ではないのです。そんな所に大量の区民を集め、防災訓練をして本当に災害時の役に立つのでしょうか。

また大震災時には、広い地域で大きな被害がでます。そ

んな時に自衛隊が川に橋をかけたり、道路の障害物を除去したり、ヘリコプターで区民等を運んだりできるでしょうか。（当日は以上の特殊な訓練もし、ヘリコプターで十五人を運んでみせるというようなこともしたのです。）

私は「NO!」だと思います。

たとえば、一機で十五人しか運べないヘリコプター。いったい八十万区民の避難民の中からその十五人を、どうやって人選するのでしょうか。いくら考えてもわかりません。また会場には、私服警官が大量に動員されていました。

たとえば、私たちは会場入口のロータリーでチラシくばりをしていたのですが、二時頃フツと気が付くと、四方の木陰に大量の機動隊と私服の警官が隠れていて、私たちは取り囲まれている状態になっていました。そしてその輪がジワジワと私たちの方へ迫り、無気味な雰囲気になってきたので、仲間に聞くと、宮沢首相や国会議員が視察にくるので、それまでに私たちを排除して、騒ぎをおこさせないようにするためだということがわかりました。果して彼らが視察に来る前に、私たちはほとんど人の通らない横道に追いやられてしまいました…。

これも後で聞くと、私たちをターゲットにした治安訓練

も確かにしていたということで、「防災訓練」の名のもとに、戦前のような治安維持や国民動員体制づくりの訓練をするのも目的の一つだったようです。

へなだしお事件の意味するもの

一九二三年の関東大震災では「朝鮮人が焼き打ち事件を起こしている」というデマが流され、戒厳令が敷かれ、その間に軍隊・警察そして民衆までも加わって、六千人以上の朝鮮人・社会主義者と言われている人たちが虐殺されました。

この大量虐殺事件は、第二次世界大戦中の「朝鮮人強制連行事件」や「従軍慰安婦」に対する態度と同じように、政府は真実を覆い隠し、謝罪や補償をしていません。

それなのに政府は「国際貢献」の美名で、カンボジアへ自衛隊を派兵してしまいました。

しかし自衛隊は、今回のように災害時に役立つとどんなにPRしてその目的をカモフラージュしても、戦争を目的とした軍隊であることには変わりありません。そしてどの国でも軍隊は、人を殺すためにのみ存在しているのです。その証拠の一つとして、一九八八年に横須賀沖で起こった

「なだしお事件」があげられます。自衛隊の潜水艦「なだしお」と、釣り舟「第一富士丸」が衝突した事件です。

「なだしお」に衝突され海に投げ出された「第一富士丸」の乗客は、潜水艦の乗組員たちに助けを求めました。しかし潜水艦の乗組員たちはただ見ていただけだったということです。溺れかけていた人たちは、日本の船だったら助けしてくれるはずだからアメリカの潜水艦だと思ったのでしょう、「ヘルプ・ミー」「ヘルプ・ミー」と英語で哀願しながら波にのまれ、海の中に消えていった人もいたといいます。結局近くにいた漁船が三人だけ助けることができましたが、三十人以上の人たちが亡くなってしまいました。なんと悲惨な事件でしょう。

でもこれは、むごい言い方なのですが、ある意味では当然のことかもしれません。なぜなら軍人は、短時間により多くの敵を殺すのが使命であり、潜水艦は構造的にも人を助けるように出来ていないからです。この事件は自衛隊の在り方、軍隊の在り方を象徴的に表していると思います。

〈防災につよい町づくりには〉

自衛隊が前面に出た、今年の「世田谷の防災訓練」は、

治安維持の訓練と、憲法違反の自衛隊を「認知」させるためのPRの場であり、本気で災害時に役立つ防災訓練ではなかったと、はっきり言いきれます。

先にも書きましたが、震災時に安全な町をつくることは私たちの願いですから、私たちは防災訓練そのものを全面否定しているわけではありません。それどころか何とかしなければと絶えず考えています。

しかし、身近な危険である核燃料輸送車が世田谷区内を走り回っていることには、何の対策もしていませんし、防災を考えるための資料として、高速道路や大きな建物に対する情報を求めても、公開されないのが現状なのです。だから今年の「防災訓練」は、本気で災害時に役立つ訓練をしたわけではないといえるのです。

〈この原稿を書くにあたって〉

自衛隊や軍隊の在り方など、賢明なあなたには「釈迦に説法」かもしれませんね。

しかし私がこんな当たり前のことを、改めて書くこう思ったのに、次のような理由があります。

当日、戦車の前で小学五年生五、六人のグループに「戦

争についてどう思うか」と話してみたら、言下に「戦争はきらい」という声が、いっせいに返ってきました。ところがその次に、「戦争は嫌いだけど、アメリカが湾岸戦争で世界に貢献したのだから、こんどは日本が世界に貢献するのは当然だよ」という言葉が返ってきたのです。

私は啞然としたと同時に、いろいろと考えさせられました。その一つに、反戦の伝え方に、私も含めて、「反戦・平和」の闘いをしている人たちに大きな勘違いがあるのではないかと思ったことがあります。

つまり自分たちで分かっていると思ったことを具体的な内容と言葉でどのくらい伝えることができるのか、これから私たちに科せられた大きな課題だと改めて思いましたので、あえて「自衛隊は軍隊だ」を書かせて貰いました。

さてあなたの地域の「防災訓練」はいかがでしょうか。ぜひ情報を交換したいものです。

☎・FAX・03(3718)7858 大倉

侵略をたたえる「新発田連隊遺勲の譜」

東京 高野ゆう子

四十七年目の夏

夏の終わりに、疎開地を訪れた。新潟県新発田市。

相馬御風の詞による県立高等女学校の校歌、町を巡る水路、町外れから山並みまで続く穀倉地帯、そして新発田連隊……なお胸に残る風景を、四十七年後の風景にてらして自分をそこに置いてみたいと思った。

越後平野の稲穂に囲まれても、非農家の家では雑炊を食べ、高女では昼食時に帰宅させ、また登校させるほどの食糧事情であった。そうした往復の中で、東側に見えたのが新発田城の石垣と物見櫓。城前の広場にはいつも小隊が中国蔑視の歌を歌いながら行進していた。

支那のチャンチャンボウは毛が長い(弁髪のこと?)
ニッポンダンジは桜色……

前後の歌詞は忘れたが、おかしなことにメロディーは戦後のマーデー歌と同じだった。

西側は松・雑木の鬱蒼と茂る公園で、明治以来の忠魂碑も見え隠れしていたが、足を踏み入れる余裕はなかった。

東京大空襲のあと、難民のように降りたち、苦い思いで半年後に去った駅に、四十七年後の細かい雨が降っていた。

石垣の奥には戦車が並び

町の形は十二歳の記憶のあらずじどおりであった。

女学校が、共学の高校に変わるのは当然で、飯豊山を称えた校歌が石碑に刻まれる身となってしまったことは残念ながら致し方ないことであった。

予想違わず、連隊跡が「陸上自衛隊新発田駐屯地」になり代わっていて、これは甚だしく残念だった。おりしも正午、いぶかしげに私を見る門衛の背後から、昼食を告げるのか、だるそうなラッパの音が漏れている。

「市民のスポーツ活動の為に、駐屯地内の運動場を開放します」。正門脇に看板がたち、金網越しにベニヤ造りの赤い海賊船や御輿が見える。地域にこやかに微笑みかけ

る自衛隊の姿である。

駐屯地を東に迂回すると城の石垣・物見櫓に続く。堀の運は満開で、のどかな観光の風景となるが、城門の大本戸は頑と閉ざされて、訪問者には「新発田城跡」の説明だけしかない。隙間を通して見えたのは、荒れた庭と波板の囲い。日本各地の古城跡が、まがいの城を建てたり公園として整備されて観光化されているのに珍しくも欲のないことだと思いつつ、さらに北側へ回る。石垣が途切れてコンクリートの塀となり、私の身長から上は有刺鉄線がかけられている。

塀の割れ目を覗いてギョツとした。動悸がする。

目の前にキャタピラー……何十年も映画でしか見なくなつた戦車というものが置かれているのだ。盛り土に駆け上がり、手を高くあげてカメラのシャッターを押す。

閉ざされた城の中は、戦車とジープと幌付きトラックの隊列であり、城門からは見えぬように波板で囲われていたのだった。

県の玄関新潟駅に大きな写真が掲げられ、観光バスのルートにもなっている新発田城は、こうして表紙しか見せられない戦闘器材の貯蔵庫として連隊の遺産を受け継いでい

るのだった。

西公園は忠魂碑・慰霊碑の団地

空腹で通った道をはさみ、自衛隊の西、高女の北にある公園は、木々が切り倒され砂利が敷かれ、広く明るく整備されていた。中央西の奥に十メートルもあろうかと思われる剣状の忠魂碑が聳える。「○○○○親王」と彫ってあるようだが雨上がりの石は黒々として読めない。新発田連隊に関わりがあり、戦死した皇族の記念碑でもあろうか。その周囲には、四角錐台の忠魂碑がいくつも点在する。

みな古いものだが、中に一つ、新しく異様な円錐状の塔があった。「慰霊平和塔・ビルマ従軍歩兵第十六連隊あやめ会」。新発田城は、別称あやめ城といい、疎開当時、高女の校長の愛称は「あやめ東条さん」であった。この町は、何かにつけ「あやめ」をつける。

生きて帰り、平穏な老後を迎え得た人々にとっては懐かしいかもしれぬ異郷ビルマ寺院まがいの塔に、生還し得なかった人々を祀るとはどういう神経であろう。

そう思いながら公園入口に戻ろうとすると、これまた真

新しい看板があった。緑地に白文字もくっきりと「新発田連隊 遺勲の譜」とある。明治四年の連隊創設から、日清戦役及び台湾出兵、日露戦争、シベリア出兵、満州事変、支那事変、ノモンハン事件、太平洋戦争時にはジャワ・ガダルカナル・雲南・ビルマ作戦など、海外侵略犯罪史そのものである。あろうことか慰霊塔・碑保存会はこれを「国運を賭す全戦役に参加して国宝部隊としての栄光の勲を宣揚する。この間、戦没・殉難した一万五千柱の御魂ここに眠る。我ら、その遺勲を顕彰し伝統を継承する」と称え、平成三年八月十五日にこの看板を立てたと記している。

半世紀変わることなく

「国運を賭す」という言葉は、侵略されて運命が危うくなった国の言い方ではないだろうか。中国に侵略し、勝手に傀儡政権をつくって、「満州はお国の生命線」と他国内に生命線を敷いたヤクザ論理から、一步も変わっていない。

あらゆる侵略行動に加担したと考えるのは私。在郷軍人あやめ会（一）にとっては国威を発揚した「国宝部隊」となる。

台湾での高地民族の過酷な鎮圧と最前線への徴用、ビルマでの泰緬鉄道建設にかかわるイギリス軍捕虜の酷使など、多くの加害事実が明らかになっているのに、まるで配慮もない。この町には、今日まで、読んで気づく人もいなかったのか、指摘すれば村八分になる土地柄なのか。隣の高校の社会科教師にも、高校生たちにも生きた「反面教材」となるのに。

疎開地に二日を過ごし、私は帰京した。

八月の終わりに、ジャワにおけるオランダ人慰安婦事件が大きく報ぜられ、ここに「第十六軍」と名も出され、関与した人、裁判により断罪された監督者のことも判明した。「遺勲を顕彰し伝統を継承する」……恐るべき遺勲、伝統である。お国の方針に疑問を持ち、これに従った（従わざるを得なかった）ことを恥じるよりも、国・我ともに価値あることをしてきたと互いに「勲を宣揚」しあっていたほうが、安心で嬉しいのであろう。

日本軍隊の蛮行を反省・告発する勇氣ある人々はまだ少ない。誠意ある人々を非難し攻撃する本末転倒と、慰霊碑を立て、身内で顕彰しあう自己満足の裏には、何か覆い隠したいものがあるのではないかと憶測してきた。臆面もな

い「遺勲の譜」によって、私は憶測を確信とするようになった。

よどんで流れぬ水路のように

自分および自分の国が行なってきたことが、相手にどのような傷を残したか。加害者側でありながら教科書の記述にも天皇の「おことば」にも、自分の体面を優先させようとするから、被害者にはいっそう謝罪の誠意が感ぜられない。それを見ている戦中生き残りは、国際的批判を身に受けるわけでもなく、とんでもない看板を建てることにもなるのだらう。相手の立場にたつ加害の反省のない「遺勲の譜」を、他国の人が読んだらどう思うかという想像力にも欠けているではないか。こんな矮小な感覚で、国際化だの、国際貢献だのと海外へ出ていくことが、新しい加害……経済侵略・自然破壊などの……を生むのだと、実感した。

市役所には、「国の守りに若い力を！」自衛隊員募集」の垂れ幕だけが下がっていた。

自衛隊の町……軍都の人々は、戦中・戦後ずっとあのラッパを聞き続け、生活に織り込み、なじんでしまっている。

ロシアとの交流も進んでいるという新潟の、空港に遠くない新発田市で、「変わらざるもの」を、私は見た。

四十七年を経た水路も、形ばかりは変わらなかったが、よどんで流れず、退廃の匂いがした。

自らを撃たずに「反対」を叫べますか

沖縄 浦島悦子

「沖縄のPKO基地化ハンターイ！」

「アジアへの派兵を許さないぞー！」

「P3C基地建設ハンターイ！」

自衛隊那覇基地ゲート前にシュプレヒコールが響きわたる。〈自衛隊の海外派兵に反対する市民連絡会〉の横断幕の前に集まった人々は、ものものしい警察の警備や右翼の妨害を突き破るように、こぶしをあげる。

九月二十三日から十月二日にかけて、沖縄県内の、多くの市民、労働組合、労働団体等が抗議集会やデモ、職場集会、街頭宣伝、ビラまきなど、さまざまな手段で反対の声をあ

げる中で、PKOに参加する自衛隊の第一次、第二次先遣隊合計二百六十四名が、那覇空港を経由してカンボジアへと飛び立っていった。

それは、PKO業務に従事させられる沖縄国公労や、最新鋭対潜哨戒機P3Cへの送信所建設に反対して、からだを張ってたたかっている本部（もとぶ）町豊原区の人々をはじめ、多くの県民の平和への願いを踏みにじって、自衛隊Ⅱ日本軍が、沖縄をアジアへの前線基地にするという宣言であり、日米安保の全アジアへの拡大に伴って、米軍基地の島・オキナワから日米共同使用の基地・オキナワへと転換していく第一歩でもあった。

生まれて四十三年間、一度も越えたことのなかった国境を、私は今年始めて越える機会に恵まれた。二月にフィリピン、八月にタイ。いずれも一週間から十日の短い旅だったが、沖縄もふくめた日本を外から見る機会を与えられたことは、百冊の書物を読むにもまさるかけがえのない体験だったと思う。

アジアの国々は気候・風土も沖縄と似ていて違和感はない

かったし、出会う人々はみな明るく親切だったが、私は旅のあいだ中、自分がカネモチ・日本の一員であること、醜い日本人、恥ずべき日本人の一人であることを否応なく突きつけられた。

「現在の日本企業のやり方と、かつての日本軍の銃口が、私たちの中ではだぶるのです」と言ったフィリピン・ルソン島南部、ラグナ湖畔の漁師。ラグナ湖を中心とする五つの州にまたがる巨大総合開発計画Ⅱカラルソン計画が、日本のODAによって進められている。先祖代々住みつづけた土地から人々を追いついて、環境を破壊し、低賃金と劣悪な労働環境、厳しい管理のもとで労働者をこき使い、公害をまき散らしながら、莫大な利益を得る日本企業・資本の実態は、アジアのどこの地域にも共通するものだ。

かつての戦争で、アジアの中で唯一、日本の直接占領を受けなかったことで反日感情が少ないといわれるタイは、それゆえにか、日本企業の進出がもっとも著しい。街中を走り回るTOYOTAやISUZUの車から、日本語とタイ語の両方で書かれたスナック菓子の袋にいたるまでが、タイ経済への日本資本の支配を物語る。

「日本から遊びに来るなんてカネモチなんだね」

と私に言った、バンコクで最大のスラム、クロントイ地区に住む女性のなにげない一言が、私と彼女との間にある越えがたい境界を照らし出す。この境界をどう越えるのか……その道を私が見つけ出し、切り拓いていくのでない限り、私は彼女の手を握ることはできないだろう。

P KO…それは、フィリピンの人々がいみじくも「ビール・キリング・オペレーション」と呼んだように、アジアの自然環境、伝統文化、人々の生活をこごとく破壊し犠牲にして得た（そして、これからも得ようとする）日本企業・資本の権益を守るために自衛隊Ⅱ日本軍が出ていくということにほかならない。フィリピンの、タイの、照りつける太陽のもとで、私ははつきりとそれを実感した。

そのP KO派遣軍の中継基地、前進基地として沖縄が使われることを許すなら、フィリピンやタイで出会った友人たちに、私はどう顔向けできようか？「国際連帯」などということばは、恥ずかしすぎて、とてもとても使えなくなってしまった。

私たちにとって困難なことは、アジアの人々を踏み台に

している日本企業や資本が、私たちの外部にあって「資本が悪い」と、断罪すればすむようなものではなく、私たちの日々の生活が隔々まで、それによって支えられているということである。PKOが守ろうとしているものは、日本企業・資本の権益であるばかりでなく、アジアの人々の犠牲の上に成り立っている私たちの豊かな生活そのものでもあるのだ。

「PKOハンターイ」

とふりあげるこぶしは、自衛隊や日本政府、資本とともに、私自身をも撃たずにはいない。「PKO反対」を百万べん唱えようと、私たち自身の日々のくらしがPKOに加担していることに無頓着なら、それは単なることばにすぎない。

先日、デモに連れていった三歳の息子が「……ハンターイ、……ハンターイ」と言いながら家のまわりを歩いていく。「ハンターイ」の前は聞きとれなかったのか、何やらゴニョゴニョ言っている。

「PKO反対よ」と教えてやりながら、この子たちの未来を踏み台にしたり、されたりしない社会をつくっていくにはどうすればよいのかと、私の心は晴れなかった。

(一九九二年十月五日記)

市川房枝基金授与

新聞切り抜きに見る女の16年 Ⅲ

——1975・メキシコ会議

各紙のダイジェスト版とジャーナリストの座談会・年表など、必携の記録集です。A5判2575円ですが、あごら会員に限り、特価千円（送料込み）でお頒ちします。

お申込みは振替東京0-5264（あごら・BOC）へ。

私たちは 黙っていた



札幌

PKO派兵の自衛隊員に コンドームの公費支給？

朝日新聞の八月十四日の朝刊に「カンボジアへ派兵される自衛隊員に避妊具支給を検討している」という記事が載ったとき、多くの女性には「やっぱり」と危機感をもった。そこで「へあごら札幌」など北海道の団体が中心になって要請行動が提起され、ハセクシユアル・ハラスメント一人アンケートをすすめる北海道の会、近藤恵子さんが上京した。九月十一日の要請行動にはあごら事務局も参加して、竹村泰子参議院議員や高橋喜久江さん（売買春と問題とりくむ会）、朴貞子さん（韓国民主女性会）と婦人民主クラブ、婦人通信のメンバーとともに外務省・防衛庁・総理府に「自衛隊の海外派兵に反対し、アジアの女性たちに対するあらたな性的じゅうりんを許さないための要望書」を持って、各省庁を廻った。

はじめに外務省では国連局の小西審議官に要望書を渡し

た。私たちの要望・抗議に対して小西審議官は「そういうことがないようにしたい」と丁寧にこたえた。朴さんは目に涙をため、戦争中そして戦後といかにひどいめにあったかを訴えた。

続いて六本木にある防衛庁へ向かった。防衛庁では守屋広報課長ほかが対応したが、テープレコーダーも写真撮影も防衛庁職員を写しては駄目という厳しいものだった。守屋課長は「朝日新聞の記事は事実無根で困っている」と弁明し、最後は「自衛隊員として恥ずかしくないように行動します」と力をいれた。しかし隊員の自律的な行動に任せるといいながらもエイズ予防は考えていると発言し、不信感は拭いきれなかった。

最後に総理府のPKO本部・柳井事務局長は「隊員たちにカンボジアの歴史や言葉を学んでもらいたいと思っている」と話し、「今は教育水準も高いし、かつての戦争の時のようなことはありませんよ」とも語った。

今回の要請行動は竹村議員と一緒にあったせいか、いずれもソフトな対応であった。そして各省庁とも、お茶やコーヒを女性職員が出してくれたので、とても驚いた。まだまだ女性がお茶を出すのは当たり前という行政の現場を見たような気がした。

短絡的かも知れないけど、女性がお茶を出すことに疑問

を感じない男たちに、他国の女性の人權や人格を重んじる
ことができるだろうか？と不安を覚えた。

前林則子（あこら事務局）

■ 仙台 ■

自衛隊大PRに反発の動き

国会での審議も不十分なまま、PKO法は六月十五日衆議院を通過、ついにカンボジアへ第一陣として海上自衛隊補給部隊と陸上自衛隊員の施設大隊が派遣された。

さらに自衛隊の在留期間の長期化を想定し、当初の予定に加え、第三次の派遣部隊として、東北の第二施設団（宮城県船岡）が候補に挙げられているという。このような地元からのPKOによる海外派兵の動きに、仙台でも危機感が深まり、全国の反PKOの行動に呼応して、海外派兵を許さない活動への取り組みが行われてきている。

全国のPKO法案阻止の行動に連動して、仙台において

もPKO法案の賛否を問う市民投票（仙台実行委員会——岡崎トミ子事務所）が行われ、この投票に参加した市民の八五%が、PKO法案に反対した。PKO法案の、国会審議（？）が重要な局面を迎えた六月三日から十五日までの連日連夜の衆参議員面会所前でのPKO法案を廃案する行動に呼応して、仙台では六月四日から二人の青年がハンストを行なった。しかし、中央では六〇年安保を想起させるほどに高揚した運動をマスコミは完全に無視し続け、法案審議が不十分なままの採決に抗議する牛歩戦術を批判し、自民党の強権的な国会運営を正当化した報道を行なった。このような偏向した報道は、中央での緊迫した運動の雰囲気を与えないまま、中央の行動に連動して燃え上がりかけた地方での反PKO運動の沈滞化を助け、強行採決に対する市民の怒りもやり場のないまま、霧散してしまったのである。

このような状況の下で行われた参議院選挙は、宮城県では候補者選びに難航した末擁立した女性候補が、「連合」の足枷に縛られ、PKO問題に触れることもないまま敗北した。

選挙にも反PKOの意志を反映できず、いよいよPKOが動き出し自衛隊が海外に派遣される、という危機感から

女たちによる反戦平和行動として在仙十七の女性団体のよびかけのもとに八・一五母親の平和行進が行われ、戦争へつながる海外派兵反対を訴えた。

一方、PKO法案の衆議院通過を受けて、自衛隊側の宣伝活動も活発に行われた。全国でも五年ぶりという「ふれあい防衛フェスティバル」と銘うった防衛博覧会が、宮城（西仙台ハイランド）において、全国自衛隊父兄会主催、県、仙台市、マスコミ各社の協賛、後援の下に七月十五日から八月二十三日までの期間開催された。会場では「国連時代に生きる自衛隊」などとPKO下での自衛隊活動を美化、自衛隊の存在をアピールする内容の自衛隊機関紙が入場者に配布された。開催期間が夏休み中とあって、子ども連れの入場者が多く、迷彩服を着た子どもたちが戦車に試乗したり、自衛隊員とサバイバルゲームに興じる姿が見られた。このような恐るべき光景の後には、徴兵制として戦争への道筋が通じていることは容易に想像することができ

る。

この博覧会は、子どもたちに自衛隊がまるで戦争映画の主人公であるかのように印象づけ、PKO海外派兵を容認し、戦争や徴兵制への肯定的考えをうえつけようとするものであり、見過ごしにはできない催しである。この防衛博開催に対し宮教組など教職員組合、マスコミ共闘が抗議行

動を行なったほか、宮城全労協は宮城県、仙台市に対して抗議の申し入れを行なった。

九月十一日PKO法が公布、施行された。自衛隊千八百十一名がPKO法の参加五原則の「当事者の停戦合意」すら無視して、カンボジアに派遣されようとしている。

武器を携帯した自衛隊（自衛隊幹部が派遣部隊について「我が国軍」と発言、後で取り消しているが）の海外派遣は「憲法第九条」を踏みにじり、歯止めなき戦争への道の反対の運動と連動して、デモや集会そして自衛官一〇番の設置や雑則を広める活動など、多様な取り組みが行われている。

かつての日本は、「アジア恒久平和のため」「大東亜共栄圏」構築のためという名目でアジア諸国で侵略戦争を行ない、多数のアジアの人々の尊い生命を奪い、略奪の限りをつくした。そして現在まで、日本政府はその被害者に謝罪も当然の補償も行わずに、いまま「国際貢献」「平和維持」を唱え、自衛隊を海外派兵しようとしており、アジア諸国は「日本軍隊」の海外派兵とみて再度の侵略を懸念している。PKO派兵を黙認し、再びアジアの人々に対して加害者となるか否かが私たちに問われている。

今こそ私たちはアジア諸国の人々と手を結び、戦争への道を拓く自衛隊の海外派兵をくい止めていかなければならない。

横林洋子（岡崎トミ子仙台事務所）

東京

「いつてらっしゃいといえますか？」

—PKO法「雑則」—

◇自衛隊だけが行くの？

九月二十八日（月）の毎日新聞朝刊（全国版）に前記のようなタイトルで、私たちが出した意見広告（一面全面）をご覧いただけましたか？

六月十五日、PKO法が成立して約四か月、十月十三日に、自衛隊施設大隊三百八十人が突然日本航空のジャンボ旅客機を使ってカンボジアに派兵されました。紛争当事者間の停戦合意すら守られていないのに。

多くの人たちは、行くのは「自衛隊員だけ」と思っていないのでしょうか。

PKO法第五章

「雜則（注1）第二十六条（民間の協力等）」「本部長

（注2）は第三章・規定による措置によっては国際平和協力業務を十分実施することができないと認めるとき、又は物質的協力に關して必要があると認めるときは、關係行政機關の長（注3）の協力を得て、物品の譲渡もしくは貸し付け又は役務の提供について国以外の者（注4）に協力を求めることができる。」

（アンダーラインは筆者）

（注1）法律の後に加えられる付け足して、法律家もほとんど読まないという。

（注2）時の首相。今なら宮澤首相。

（注3）国のすべての省庁と委員会の長。

（注4）国家公務員および国の行政機関以外のすべて。つまり地方自治体、企業又は民間人である私たち一人一人。

民間航空会社の最大の責務は、乗客と乗員の安全です。

民間航空機の安全航行のために結ばれている「国際民間航空条約」によれば、軍隊を乗せた飛行機は、民間航空機とはみなされません。今後、日航機は自衛隊員を乗せていなくとも軍用機と間違えられて狙撃される可能性もあるので

す。にもかかわらず、日本航空は、防衛庁のチャーター便の要請に応じました。

また今回、自衛隊の車輛や物資を運ぶのは、民間のチャーター船、しかも乗組員はフィリピンや韓国の人たちなのです。いずれも先の戦争で日本が侵略し被害を与え、未だきちんとした謝罪も補償もしていない地域の人たちです。国の言う「民間の協力」が、外国人にまで及ぶことを知っていたでしょうか。

注3の説明を読めば、国が「国以外の者」に求めることができる協力は、あらゆる分野と人に及ぶことになります。今のところ、法律そのものに強制力があるわけではありません。が、一体どれだけの人が断ることができるでしょうか。単身赴任すら断れず、また過労死も珍しく思われないような今の私たちの人権状況を考えると……。

◇「エイズと牛歩とPKO」のピラをまいて

こんな「民間協力」の条項が、この法律の中に入っていることを知ってびっくり仰天したのは、PKO法案審議中でした。六月八日の朝日新聞の「都民一〇〇人に聞く」というアンケートで、二十一歳の女性が「エイズのように直

接かわってこないから関心がない。PKOは一般の市民生活に何か影響があるんでしょか」と答えているのを読んだからでもあります。

さっそく六月十一日から国会周辺で、この内容を一人でも多くの人たちに知ってもらわなければと、「エイズと牛歩とPKO」という題のビラをまき始めました。毎日いろんな形で印刷しては、リュックや手提げ袋に詰め込んで運びました。途中で出会った多くの人たちが進んで受け取ってくれ、またたくさん持ち帰ってまいてくれました。

◇より多くの人々に知らせるために「意見広告」を!!

他の国のPKOで、このような形での「民間協力」を求めているのではないとも聞きます。問題の大きさに比して、私たちの知らせられる範囲は限られています。

そこで、国会の周辺で、また集会、反原発や無農薬野菜の共同購入で知り合った女性たちで集まって、PKO法「雑則」を広める会を作り、新聞に意見広告を出す運動を六月二十四日から始めました。

全国のそれぞれの「つて」を頼りにビラを送り、あるいはまき続けました。が、なにしろ未経験の上に、私たちのささやかな暮らしから見ればとてつもないお金がかかる話

です。果たしてできるものやらと思う一方、全国紙に出すと言った以上はなんとしても集めなければと、眠れないこともしばしばでした。しかも、自衛隊派兵前、十月末を目標としていたのに、派兵日程は早まるばかり……。

◇多くの無名の人たちの思いを

十三人の女性が呼びかけ人として名前を連ね、自宅の住所や電話番号を書いたビラをまきまくり（これが実感）でしたが、一堂に集まったことは一度もなく、十分顔も知らない同士という人もいる無謀さと金額の高さ、運動や、お金集め方法についての無知を加えると、無謀さが、幾重にも連なる会でもあります。が、そうした「柔軟さや大胆さ(?)」に見も知らぬ多くの方々が共鳴し、励ましや共感の手紙、電話をたくさん下さったこと、そして年金や生活費を削って送って下さるお金……。何度、感動に胸ふるわせたことでしょう。それが、「行ったらっしょいといえますか」という九月二十八日の広告を出す決断をさせたのです。というのは、半月以上前に紙面を押さえなければならぬのですから、お金が集まるかどうか「かけ」をする訳です。それに早まった派兵を前に何らかの「きっかけ」を作る力にならなくてはとも思ったのです。

◇解散するのはいつのこと

意見広告をだし、足りないお金集めに奔走しながらも、一方ではその後出かけた集会でも、あまりこの事を知らない人が多いのにびっくりしています。

また先にのべた、国際民間航空条約違反や、外国人にも
およぶ協力の問題等どれも見過ごしにはできない事柄はばか
り。にもかかわらず、「PKOは終わった」という風潮。

歴史を振り返った時、ある日突然徴兵されたのも、空襲になったのでも、原爆が落とされたのでもないのです。徴兵といえば、十月三日、自民党の森喜朗政調会長が、十八歳人口が半減する二〇一〇年をめどに「国民奉仕隊」なる部分徴兵構想を語っています。（10・14朝日新聞）

PKO法が審議中に出された核燃料輸送に関する情報公開の一方的打ち切り、文部省の「自衛権教育」の導入通達そして東京都では「暴騒音防止条例」という名の私たちの運動取締法の成立。意見広告を原寸大に印刷したものを一枚三十円で売って広め続けることも始めました。合わせてカンパのご協力もお願いします。

私たちは、日々の暮らしの忙しさにかまけて二度と「知らなかった」が許されない歴史の前に立っていると思うから。

（文責 森 総子）

(文責 森 総子)

★連絡先

保谷市北町 3-4-5 ☎ 0424-2410

森
総子

武蔵野市境2-11-4 ☎ 0422-517602

佐藤 弓子

★カンパ送付先 郵便振替 東京8-757381

「PKO法」を広める会

日に出陣を分し、手続きにも疑問を懐かず、
日法が成立しました。本当の国際貢献とは何なのかい
と、米の三三がこんな意味では何となく、
国の議論の中では何も明らかになりませんでした。
この意見交換は私たちがKICの民間協力案項より、
自衛隊以外にも軍事活動をおこなう民間協力と特異な
参加協力がなければならぬ事を説き出すもので
それを教えるための「**批判**」です。

国以外のおたずねします

として、自衛隊が
海外にいくのつ

「雑則」
です。

いつてらっしゃいますか？



1992年9月8日閣議決定

実施計画

實施要領

非公開

「それの目的が、国内で運動を起すことだとき、
そこで成立した時、私たちは国外の者
と争ふたものの仕事を減らす、自衛隊ととも
に軍事行動をせざる、平和の活動に参加、
協力するの事だ、と主張した。だから、私
たちは、それを知っています」

「すべからぬ、さう……」と、それなのに、
いびきをかき、と云ふ事です。

PKO法「雑則」を広める会

こんなことをしています。

〈自衛隊の海外派兵に反対するバッジの会〉

イラクがクウェートに侵攻した時日本のマスコミは「邦人保護」を口にし、救援のため「日の丸」はいつ行くのだと、ナショナリズムを煽った。過去の歴史を学校教育レベルで思い起こしても、こうした動きは海外侵略へと繋がることは明らかで―あれよ、あれよ―という状況の中、即、行動で立ち上がろうと、一人でもできる意志表示として、バッジをつける運動を呼びかけた。デザインは知り合いの知り合い、製作所はハローダイヤルで見つけた小工場、文章は「自衛隊の海外派兵反対・憲法九条」。今から思えば先見の明があったというか、カンボジアへの出兵を阻止できなかったというか、思えば複雑。「日の丸・君が代」反対で知り合った人たちとの口コミを中心として、徹底した街頭行動を中心に活動した。

状況を的確につかみ、そこに切り込んで行く。そのため

には、いわゆる従来の方法では対応しきれない、ということとで、わたしたちのやり方を編み出した。有名人を連ねて呼びかけ人方式をとるのをやめる。自前で大きな集会はできないのでしない。会議をしても無駄が多いのでやめ、街頭に集まった時に、気分を集中し、次なる行動の大まかな合意を作る。非暴力直接行動を旨とし、警備のおまわりさんと、いたずらにトラブルない。人数にこだわらず、一人なら一人でできること、二人なら二人、百人なら百人でできることを追求する。だから既製のグループと、どう折りあうか、とか、党派に頼るとかの無用な心づかいはない。恋愛と同じで、無理にくっつきあうと、最後は苦い思いが残るのはよくない。マスコミに意見広告を載せるお金がないので、行動結果なりを最大限報道してもらうよう、努力する。

ということとで、バッジは全国に一万四千個、通信費も工面できた。横浜駅前でバッジ売り、渋谷駅前で、六十名位でダイ・イン。ケチャップを顔面になすりつけ、血のイメージを出した男性もいるし、飛び入りもあった。これはTVのニュースに流れ、某財界人は「昼の晴れた日に、寝こんでも戦争は解決しない」と皮肉を言ったが、小雨の日だった、ということと、「それなら、あなたの反戦方法は

何？」と逆に質問したくらいで、世間の話題になった。山手線一周、車内ツアーと銘打って、電車に乗ってビラ配りや、署名集めもした。デモは疲れるので、車内でやってみたがこれはよかった。乗客は、ビラをじっくり読む。パジャの模様を拡大した布を身にまとっての行動だから恥ずかしいのだが、一時間弱のこと、何とかなる。アメリカ大使館、イラク大使館にも出向いた。南イエメン大使とも直接会って話をした。続いて国会包囲作戦。千二百名位だと手をつないで包囲できるが、集まったのは口コミで六百名。社会党の女性議員も参加。警官は正門前に行かせまいとして柵を置いて弾圧したつもりになっているが、こちらにも、正門、裏門にこだわることもない。

総理府前で、よく抗議行動したが、周りは警官だらけということもあり、演説内容を、軍隊と警察の違いや、欧米並みに警官組合を作ってみたら、などにしたことも多い。また、戦時中の日本軍の残虐行為の写真を手に持って通行人に見てもらおうとしたが、よけてしまっし、こちら手も疲れるので、地面に置いたところ黒山の人だかりとなった。なまじの説明も拒否された。ひとり、ひとりが考えて自分で判断したいのだ。演説よりはるかに心に届く。

市民運動も「自分が正しい」と思うと、「ビラを受け取

らない」「演説を聞かない」とつい愚痴ってしまうが、通行人にも通行人の事情もある。この地面写真パネル展示は、今でも時々やる。自衛隊が出兵してからは、「自衛隊必読パンフ」を作成し、防衛庁・市ヶ谷駐屯地にまきにいった。情勢は、かなり厳しい。自衛隊の海外出兵という目に見える形での侵略と、日々の中での経済侵略が合体した日本での日常生活は、きわめて座り心地が悪い。はつきり言えば、再びアジア侵略を許したのは、わたしたちのいい加減さだった。権力にむかっては、「憲法を守れ!!」と叫ぶが、自分の家の中での男女不平等憲法違反には、甘い。わたしたち自身が日常的に犯してきた憲法違反の結果が、今回の自衛隊の海外派兵を可能にした。

これからの反戦・平和運動は荷の重いものかもしれない。しかし、たじろぐわけにはいかない。思想は重厚に、行動は軽く元気にやりたい。

幸い、パジャの会は、組織ではない。かかわった個人が、自分で自分の行動を決定し、人に呼びかけなければ呼びかけるという、個々の主体性に依拠している。今までの経験から学びとったものを大事にし、活動の幅と質を拡げていきたい。

(新美 みつ子)

憲法九条意見広告を出して

— 起き上がれない日もあったけど —

「第九条の会ヒロシマ」の世話人会で新聞への意見広告が決まった時、正直いって完全に燃えていなかった。五月の初め大阪で「九条違憲訴訟全国交流会およびPKO法案反対集会」があり、新聞に土井たか子さん出席の集会記事が大きく載った。その下に「第九条の会ヒロシマ」が八月六日に意見広告を出す記事があった。くり返し記事を読む度に責任感がずっしりと胸に重く、心が燃えてきた。

五月九日より県外からの張り込みが毎日入りだした。しかし六月、PKO法案が国会を通過する。県内の意見広告への賛同者が少ない。六月末が近づいても予定の半分弱。約束通り全面広告が出せないと「九条の会」は信用を失う。憲法九条さえますます軽視されかねない。眠れない夜、思い余って入院している母に電話をする。

栗原君子さんが立候補して下さるとの朗報。同じ日、母より「あなたの口座に百万円振り込んでもらったから好き

に使って。元気をだしなさい。福がきますよ」との電話がある。七月に入ると意見広告費がまとまって入りだした。昼間は仕事と選挙のために外出、夜は電話と入金の整理。気が付いたら空が白んでいた日も重なる。選挙に勝った喜びもゆっくり味わう暇もなく二十二日より原稿作りと校正の作業に追われる。締め切ってからも申し込みが続く。二十七日最終の共同校正作業日、お金も目標達成とみんなに報告した時、過労にやつれた藤井さん、心労に面がわりした小松さんの顔にも笑みが浮かぶ。

八月六日朝七時より一万枚のコピーをまく。

「読んで下さい」と手渡ししながら胸が熱くなる。口よりものを言う応援してくれた仲間の顔。ありがとうと言ったら涙が出そうなのでそしらぬ振り。ごめんなさいね。ありがとう。その日のうちに県外の参加者に新聞発送。夏場に弱い私、PKO法案反対活動、選挙と重なったこの夏は辛かった。起き上がれない日もあったけど、だんだんやつれていく藤井さんが、それでも一生懸命頑張っている姿を見て気力を取り直した。お蔭で私も責任を果たすことができました。

「憲法は破る為にある」と政治屋から学ぶPKO法

(山本真理子)

”コンドームつき自衛隊”でアピール



九月十五日、呉市の中央公園で急きょ開かれた自衛隊海外派兵に反対する「青年女性集会」に、藤井さんと二人で参加した。呉からは十七日補給艦「とわだ」がカンボジアに向かって出航する。広教組・自治労・解放同盟等の呼びかけで千三百人が参集。ヒロシマを再び侵略の発信基地にさせまい!と決議した。

栗原君子さんたち、日本女性会議の横断幕は人目を引いた。青いベレー帽の自衛隊員が持つ銃の先にコンドームという絵に「何しに行くの」と書かれた言葉。東京の斎藤千代さんの提案を实践されたとのこと。迅速かつ大胆!

(浜村匡子)

香川

命を守る闘いを!

普通寺市は人口約三万八千人の小さな町である。この中央部分に自衛隊駐屯地が大きな位置を占め存在する。アーミィグリーン系のトラックやジープ、同じ色調の制服姿の自衛官が、日常的に市民生活の中に溶け込んでいるのがこの町の特徴でもあり、かつての陸軍師団の流れを受け継いで、『自衛隊の町』としてのカラーが強いのは否定できない。当然、自衛隊関係者の占める割合も多く、私の家の近所にも元自衛官が何人か住んでいる。

この町からカンボジアに向けて百名の自衛官が出兵していった。その中には若干十九歳の若者もいたと伝えられている。

そんな中で、去る八月二十六日、四団体(労組や人権団体)の呼び掛けにより、(自衛隊を海外に出したくない普通寺市民の会)準備会を結成した。そして、9・6結成集会に向けての会合を持ち、案内状、パンフレット、ちらし、

ステッカー等の準備にかかった。当初、自衛隊員にむけての電話相談も計画していたのだが、力量不足のため見送ることに決定。（このことについては賛否両論があった）

さて、結成集会を開く会場の借用について一悶着が生じた。市の施設である会館を借りに行った際、会の名称を見た事務職員が許可しなかったのである。翌日、再び交渉した際には、借用者名を会の名称でなく個人名で書くようにと指示された。その話を聞き、けしからんと憤慨した私たちは、会館への申し入れ書を持って話し合いに出掛けた（どうやらこの会館の職員は元自衛官が多いという話も耳にした）。

話し合いの中でどんなことが出てきたかというと

※この会館は勤労者のための研修機関であり、集会には貸せない。

※PKOに反対する集会があると右翼団体がやってきて困る。

※会館を利用する他の利用者に迷惑になる。

※借用者名は個人名で書かないと責任が明らかでなくなる。

※玄関に集会の看板を出してもらっては困る。

等々、あれこれ言っていたが、かなり感情的で話にならないことばかりであった。このように行政の末端、市民と直接関わりをもつ部分を担う人が自己規制をし、表現の自由

を平気で侵害していくのである。PKOに反対することが罪悪であるという考えを植え付けられてしまっているのに驚く。話し合いに行った私たちは、できるだけ丁寧に理解を求めたが、効果は期待できにくいようであった。

九月六日の集会当日には約五十余人が参加。映画『侵略——語られなかった戦争』を見た後、浄土卓也さんの講演「日本の戦争責任と戦後補償」を聞いてアジア侵略の事実を再確認し、戦争の悲惨さが未だに消えぬ地に自衛隊を派遣することが、再び侵略の道へと進む第一歩であることを知った。参加されていた在日韓国人の方の、「今、日本の軍隊が来ることを望んでいるアジア人は一人もいないであろう。未だ戦争の傷が癒えぬままの状態なのに、あまりにも残酷なことだ」という意見は胸に応えた。また、ケニア人の男性は「国際貢献の在り方をもっと深く考える必要がある。現在カンボジアでポルポト派がやっていることは、かつて日本軍がやった行為と同じである。それに対して日本がやめろというのはおかしい」と語った。反省しない日本、人権意識の育っていない日本が国際援助・貢献といった名目でカンボジアに出ていくことに危険性を感じるのは当然である。

〈市民の会〉では、チラシ・パンフレット・ステッカー

等を作って活動しているが、社会党系や共産党系の集会やデモが行われたり、他県の労働組合が腰を据えて情宣活動をしたりして、善通寺市内はかつてなかったようなムードが漂っている。反PKOの集会・デモがある度に、いつもは平穏な町に赤旗がなびき、パトカーや機動隊の車が現れ、右翼の車が「君が代」や軍歌をがなりたてている情景は誰の眼にもただことではないだろう。また、駐屯地の柵には『カンボジア派遣くろうさま！ 元気で頑張って来て下さい』という趣旨の看板が掛けられてもいる。『PKOくろうさまセール』を打ち出した店もあるらしい。が、市民は本音が言えないでいるのかもしれない。なにせ小さな町である。隣近所には自衛隊員やOBが大勢住んでいる。子どもたちの父親が自衛隊員だったりもする。地縁・血縁でつながるこの土地で反対運動に精を出すのはよそ者が中心にならざるを得ないのが実情でもある。実際のところ、軍都として栄えてきたこの町には他に目立った産業もなく、自衛隊というアーミーカラーと共存共栄してきたのであるから、ある程度はやむをえないことではある。けれども、ほんとうにこれでいいのか。遠い国で日本軍が何をしよう、この町には関係ないのか。自分に火の粉がふりかからなければ、なにがあっても平気なのか。市民の一人一人に目を覚まして欲しい。

私はステッカー（ハガキサイズに作ってある！）の裏に41円切手を貼り、友人に送っている。ショッキングピンクで目立つから、郵便配達の人も見えてくれるだろう。PKO関係の新聞報道にも眼を光らせている。全国版よりも香川版の報道に疑問をもつ内容が多い。『無事を祈る。がんばっていつてらっしゃい！』といった見出しが出ているのに腹が立ち、投書も出した。もうええ加減にせんと怒るぞと本気で怒っているのを伝えたい。私は今が闘い時だと思っている。今黙っているとまた戦前がやって来る。徴兵制がやって来る。我が息子にもやってくるかもしれない。その時になって後悔しないために、なんとしても阻止したい。かっこうでなくやらなければならないのだと思っている。

共同通信の記者である浅野健一氏の講演のなかで特に印象に残ったのは、『日本は民主化闘争を経験していない。アメリカのくれた憲法に乗っかって平和憲法だと思っている。自分たちが闘い勝ち取ったものではないのである。人権意識の希薄な日本人は再び過ちを犯す危険性を孕んでいる』ということである。同感である。金権政治が横行する政治界に何を期待できるであろうか。国民一人一人が目覚まし立ち上がらないと、何も変わらずじまいである。

善通寺もその他の町も同じ体質をもっている。いや日本

中にことなかれ主義が蔓延しているのである。臆病で無関心な人間に作られたことに気付かず、ささやかな幸せで満足させられているのだ。PKOを話題にすることすら勇気が必要とすることを問題にしたい。先ずは私自身のこととして問題としていきたいのだ。

私たちはささやかな歩みで満足してはならない。地道に少しずつやっていくことはかりを指しては聞いては破れる。粘り強く、執拗に執拗に迫っていく内容を構築していかなければ結果は知れている。『人間の鎖』というデモンストレーションを形だけに終わらせては、ただのショーである。ほんとうの意味での鎖を作っていくなければならぬだろう。私は戦争を知らない世代の人間であるが、戦争の恐ろしさは想像すればすぐにわかる。住井すゑさんは『文化とは命を守り育てることである』と言われた。『命を守り育てる』ことが平和国家を創造することであると確信している。

反PKOの闘いは『命を守る闘い』である。

一九九二年十月七日

〈人権を考え行動するヒラの会〉会員
〈自衛隊を海外に出したくない普通寺市民の会〉会員

(南 佳見)

福岡でも みいーんな頑張っています

湾岸戦争勃発時の国際協力法案以来、福岡でも、さまざまな市民グループや、女性グループ、労働組合が、自衛隊の海外派兵に反対して運動を繰り広げてきました。

とりわけ、昨年の秋、PKO法案が審議されていた頃は、連日のようにいろんな団体が福岡市の中心街で行き交う市民の人びと等に問題を投げかける行動を展開し、さらに、今度の国会で審議されていた時も、女性たちの小グループによるすわり込み、ハンスト（このために中心街に大型テントをはって警察から取り囲まれた）など、賑やかに、元気にアピールしつづけました。

そして、今……

今もいろんなグループが、以前ほどの派手さこそありませんが、この問題でさまざまな活動をしています。その中から、次の四つのグループの活動を紹介します。

一つは、伊藤ルイさんが代表をしている〈海外出兵を許

さない六・一五の会。男女混成ですが、市民運動に関わっている人たちが、今年の六月十五日国会でPKO法が成立した日をとらえ、以後毎月十五日（場合によればその前後）に集会やデモ、街頭ビラ配り等の活動をしています。

とりわけ、十月十三日のカンボジアへの自衛隊本隊の出兵に向けては、さっそく行動を開始し、さらに今後も、市民調査団としてカンボジアに行った人を招いて講演会をしたり、アジアの中の平和について考える講演会の企画も準備中とのことです。

次に、どうしても福岡市でのPRが多い中で、福岡市から離れた小都市で、自衛隊駐屯地に対して働きかけをし、りしている（海外派兵を阻止する小郡市民の会）の活動を紹介します。やはり、女六対男四の割合の混成グループです。今年六月十五日前くらいから小郡駅前（座り込んだり、月二回の駅前ビラ配りを貼りつよくとりくんできています。

十月十三日には、労働組合等にも呼びかけて二百人ぐらいでデモ行進して自衛隊で申し入れ書を手渡したり、十月十八日は逆に他団体から呼びかけられて一緒にビラ配りや、やはり自衛隊に申し入れ書を持っていったりしたそうです。

十月十三日の時は、実は人間の鎖で自衛隊駐屯地をとり囲むつもりだったそうですが、警察の制止にあい、実現し

なかったそうです。ちなみに、申し入れ書を手渡す時警察や機動隊にとり囲まれながらも読み上げて手渡すそうです。

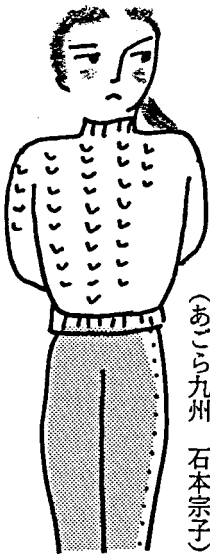
三番目は（自衛隊の海外派兵に反対する九州市民ネットワーク）。代表は、木村京子さん。協力法審議の頃よりどちらかというと、平和のとりくみのメニュー提案的な活動をしています。例えば、湾岸戦争当時は、ブッシュ大統領、フセイン大統領、海部首相への要請ハガキ三点セットのとりくみ、全国市民一票投票のとりくみなど。今後は市民調査団としてカンボジアに行ってきた人の講演会やビデオ上映、日本国内の憲法や平和問題というところからアジアまで視野を広げて平和問題を考える講演会の企画をしているとか――。実はこの企画に早速のつたのが、前出の（六・一五の会）です。

最後に私も参加しています（はやめてよ！PKO法（案））女たちの会）の活動です。この会は、昨年十月に「PKO法案に反対する女たち、この指とまれ」の声（声をかけたのは、前出の木村京子さん外二名の方です）に集まった女たち三十名によって結成されました。十二日までは四十八時間ハンスト、街頭行動（ビラ配り）マイク教宣を中心に活動し、三日にはデモ行進を小規模ながらにぎやかしく行い、また北沢洋子さんを招いて講演会を行ったりしてき

ました。四月には、福岡市の一番の繁華街のある天神岩田前で大型テント二つを設営して三十六時間ハンストと座りこみを敢行！（この時一度は、警察の警告に従いテントを撤収しましたが、夜、再度設営！）この時は、全国市民一票投票に参加し、きれいな布地にアップリケで「PKOはいらない！」等書いたゼッケンをつけ、派手な（とてもきれいな）横断幕を張りめぐらし、のぼりも色鮮やかで派手な生地のものを用意し、実に華やか、かつ賑やかな雰囲気できらびました。八月には、JVC（日本国際ボランティアセンター）の人で、カンボジアやタイで活動してきた女性を招いてカンボジアの状況を生で知る学習会を催すなど、地道に活動が続けてきています。

今後は、十二月八日の開戦日に向け、トークマラソンの準備を始めているところです。

以上、機械的な紹介になりましたが、福岡でも「やつぱり自衛隊の海外派兵はおかしい！」と声を上げ、アピールし続けています。



（あこら九州 石本宗子）

沖縄

前線基地化された怒り爆発

基地のゲートに怒りをぶつける

日本の中でも戦争に恐らく一番敏感な沖縄では、PKO派遣と沖縄の中継基地化に、PKO抗議行動が一段と盛り上がっています。九月二十二日、奥武山球場駐車場での総決起大会には千人が集合、「強化され続けてきた自衛隊の沖縄基地がさらに海外への中継基地とされる」と、危機感と怒りの声をあげました。パレスチナから、大阪の世界平和フォーラムに参加したというリリー・フェディさんは、「この島の軍事基地を見ると不愉快になる。息の長い運動が政府を動かすだろう」とスピーチ、一同は、航空自衛隊那覇基地ゲートまで「海外派兵阻止」「P3C基地は許さない」のシュプレヒコールを繰り返しながらデモ、基地でも大声を張り上げましたが、県警機動隊がゲートをがっちりガード、右翼の宣伝カーがポリウムを張り上げ、三つ巴の混戦が、堅く閉ざされたゲートにぶつけられました。

先遣隊到着にさらに怒り

二十三日には先遣隊第一陣が那覇入り。市民グループや学生は自衛隊那覇基地第一、第二ゲート前で抗議集会。

「沖縄は日本の最南端ではあるが、自衛隊の前線基地ではない。過去の苦しい体験からアジアの人々と幸せに平和に生きる拠点が沖縄だ」と、基地化に激しく抗議しましたが、大日本維新党の街宣車二台が「海外派遣賛成！」の示威行動、騒然となりました。これらの抗議をせせら笑うように、第一陣出発と入れ替わりに第二陣がC130で到着、一泊して二十五日早朝出発。一坪反戦地主会など十八団体は、二十六日、牧志公園で集会とデモ。島民の怒りは、高まるばかりです。

P3C作戦センター反対も激化

これに先立って、七月から海上自衛隊は本部町豊原にP3C対潜水艦作戦センター（ASWOC）送信所建設の測量作業を開始しようとし、地元住民は「戦争のための施設は不安」と、いきり立っています。

（伊良部裕子）

★★★ お申し込みはお早く ★★★

あこら20年のつどいは

11月7日（土）東京・市ヶ谷につしよ会館で

☎ 03-3269-8159

A 田嶋陽子の「おもしろフェミニズム」

（1時～2時）

B AGORAボトム会議（2時～5時）

マスコミの限界／メディアコミの限界

下村満子・増田れい子・しまようこほか

会場討論大歓迎！

C トーク&スピーチ（6時～9時）

私は言いたい！！

河野信子・金住典子・高橋ますみ etc.:

全国元氣印の大集合

飛び入り大歓迎!! 運動・企画のPRもどうぞ!!

会費 A・B・C各千五百円

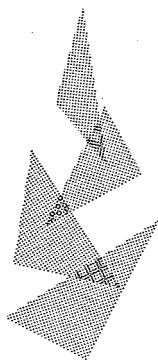
一日通し四千円（夕食代込み）

宿泊四千五百円（朝食つき）

申込み あこら事務局 ☎ 03-3354-3941

——反PKO選挙戦を通して見えてきたもの

市民運動の一環としての選挙



内田雅敏

投票の結果が明らかになり、落選が確定的になったとき、選挙事務所に詰めていた記者団から「告示直前の立候補で、しかも政党の支援のない市民派選挙、三十万余の得票は善戦ではないか」と質問が飛んだ。この質問に対して私は「この三十万余の得票が善戦であったかどうかは、この選挙戦を通じてできた市民・労働者・学生のネットワークが今後も持続し、反PKO法の闘いを継続できるか否かによって判断される」と答えた。

この発言は「名言」であると支援者たちの共感を得た。敗北感の微塵もないさわやかな敗戦の弁であるとも言われた。

別に気のきいたことを言おうとして考えていたわけではない。質問に対して自然に出てきた言葉であった。それは「反PKO法」「戦後補償の実現」という二つのスローガンを掲げて闘われたこの「内田まさとし選挙」が、まさしく市民運動の一環としての選挙であったことから必然的に導き出されてきた言葉であった。

十八日間にわたる選挙運動。宣伝カーを駆って都内全域を回りながら、そして夜の集会をこなす中で、こ

の「内田まさとし選挙」は市民、労働者、学生たちによって担われた市民選挙であるということを日に日に実感していった。中央において市民、労働者、女性・文化人、学生、弁護士各選対が作られるのと同時に、地域ごとにも選対が作られた。これらの各地域選対を支えたのは女性たちであった。

「戦争に反対する〇〇女たちの会」　「〇〇を許さない女たちの会」　「〇〇会」等々、さまざまな名称を用いて地域で草の根の民主主義の運動をしている人々、生協運動、環境保護運動をしている人々、そしてこれらの運動の核となっているいわゆる革新無所属の議員たち。これらの人々は「国際貢献」の名のもとに自衛隊が海外に出され、憲法の「平和主義」の原理が踏みじられることに強い危機感を抱いていた。

今般の反PKO法選挙は、護憲の闘いであった。五、六月のPKO法国会、自公民の強行採決に対して、社会党、共産党、社民連の各議員たちは、「牛歩」というぎりぎりの手段も用いて抵抗した。それは護憲のための体を張った闘いとして多くの市民の共感と感動を呼んだ。多くの市民がこの社会党、共産党、社民連の議員たちを激励するために国会の議面前に駆けつけた。

七月の参議院選挙は、当然この護憲の闘いが継続されるものと思った。ところが、共産党は別として、社会党、社民連は「連合選挙」の名のもとにこの護憲の闘いを放棄した。しかし、市民は護憲の闘いを放棄しなかった。市民は、政党による除名の脅迫にも屈せず、護憲の闘いを貫徹しようとした社民連の田英夫、社会党の國弘正雄、いとう正敏参議院議員らとともに、反PKO法を鮮明に打ち出した護憲派候補を独自に擁立し、選挙戦を闘った。

そして選挙戦が始まってからも、五、六月のあの国会闘争を「牛歩」までして闘った社会党、社民連の議員たちに決起を呼びかけ続けた。残念ながら連合の締めつけの下、一部の人々を除いては彼らの決起はなかった。そのいきさつおよび今般の私の立候補の経緯については別に書く機会があったので、あわせて読んでいただきたい（「反PKO法選挙を闘って」『状況と主体』九月号）。ここでは政党が放棄した護憲の闘い

を「内田まさとし選挙」を通じて市民が貫徹したことだけを記しておく。

共に闘うにあたっての信頼関係

参議院選挙は終わった。しかし、この「反PKO法」と「戦後補償の実現」をスローガンとして闘われた「内田まさとし選挙」が、市民運動の一環としての護憲の闘いであった以上、闘いの継続は当然のことであった。七月二十六日の敗北宣言の中で闘いの持続について触れたことはすでに述べた。

八月六日、九日、十五日と暑い夏が過ぎ、秋の自衛隊の海外派兵を目前に控えた九月十七日夜、日比谷野外音楽堂では「憲法を生かす会」主催による「自衛隊の海外派兵阻止・反PKO法」の全国集会が行われ、多くの労働者、市民、学生が集まった。六月の国会議面前集会以来久々の大きな集会であった。

労働団体、市民団体の報告、田英夫参議院議員、七月の参議院選挙で反PKO法を掲げて広島選挙区で当選した栗原君子参議院議員らの発言もあった。斎藤一雄、外口玉子衆議院議員の発言もあった。司会は長谷百合子衆議院議員であった。私は、斎藤、外口、長谷の各議員がどのように、とりわけ七月の参議院選挙——それは五、六月の国会闘争に続く第二段の反PKO法の闘いであった——について発言するか聞いていた。

だが彼らは、五、六月の闘いと九月からの闘いについて発言しただけであり、七月については一言も発言しなかった。考えられないことであった。九月からの闘いを共にするために、七月については一言も発言とはできないはずだからである。誤解をしないでほしい。私は今、彼らを非難しようとしているわけではない（外口さんが自治労の厳しい締めつけにもかかわらず東京選挙区の内田候補、広島選挙区の栗原候補を社会党の推薦とすべしとする田辺委員長宛の文書に、他の十七名の議員と共に署名していることについて知らないわけではない）。共に闘う仲間として批判しているのである。このような批判なくしては真の信頼関係

は生まれてこないからである。

私はP K O法案が強行採決されたとき、衆議院の議面前にいた。そこではP K O法廃案全国実行委員会主催の緊急集会が行われていた。斎藤一雄衆議院議員が自公民の強行採決を激しく非難する演説をしていた。私はこの演説に感動した。私一人だけではない。そこに集まっていた多くの人々が同じように感動していた。そしてP K O法案が強行採決されたとしても、引き続き自衛隊の海外派兵阻止の闘いを継続する決意を固めていた。斉藤さんはこのような決意をさせる演説をしたことについて責任を持たなくてはならないと思う。

栗原さんに次いで発言した私は発言の最後をこのような趣旨の言葉で締めくくった。この発言は会場では共感を得たと思う。それは七月の反P K O法選挙を聞いた多くの人々の思いであったからである。斎藤一雄さんたちには是非ともこの思いを受け止めてほしい。

「護憲」の足腰を鍛えるために

「反P K O法」「戦後補償の実現」を掲げての「内田まさとし選挙」が、「護憲」の市民運動の一環として聞われたことはすでに述べた。ところで私たちは「護憲」というとき、あまりにも戦争の放棄を謳った憲法九条に依拠した運動をしてきた嫌いはなかったであろうか。都合のいいときだけ憲法を持ち出してきたことはなかったであろうか。憲法は「国民主権」「平和主義」「基本的人権の保障」の三つを基本原理としている。これらの原理はこの国において根づいているであろうか。私たちはこれまで憲法の理念を実践してきたであろうか。

一九八八年秋、いわゆる昭和天皇の下血騒ぎに始まった天皇賛美の風潮は、まだ記憶に新しい。従軍慰安婦や朝鮮人・中国人の強制連行などアジアの各地から起きている戦後補償の請求、戦争の問題が解決されな

いままで、どうして平和憲法の理念を訴えることができなかったか。国内外における様々な差別、人権侵害、企業の海外進出による環境破壊、このような問題を放置して、基本的人権の保障を言ってみてもむなし。今、私たちは本当に憲法の理念を実践することによって、この国の有様を変えていかなければならない。それにはこの国の過去の歴史と向き合い、そのことを通して、現代および将来を考えることである。

四十七年経って、今なお、あの十五年戦争の被害者あるいはその遺族から戦後補償の請求がなされているのだ。なぜ四十七年間も放置されていたのであろうか。冷戦構造の中に逃げ込み、アメリカの極東戦略に組み込まれることによって、この戦後補償の問題を免れてきたという指摘がなされている。確かにそうだと思う。この点がかつての「同盟国」ドイツとの違いであろう。

より根本的なことは、あの十五年戦争について、アジア・太平洋戦争という認識がなかったことではなからうか。アメリカと戦争し、負けた。広島、長崎には原爆も落とされた。そして世界に類のない戦争放棄を謳った平和憲法を与えられ、アメリカに許された。悪いのは軍部であってそれ以上の責任追求はなされなかった。戦争に対して最高の責任を負うべき天皇は、何ら問われなかった。私たちはこれでもう戦争の問題はすべて解決した、すなわち日本は平和国家になった、つまり憲法九条を持つことによって、戦争の問題はすべて免責されたと勘違いしてきたのではなからうか。アジアの国々と戦争したという意識が希薄であったが故に、これらの国々の直接の被害者に対する戦後補償が放棄されてきたのではなからうか。

戦争責任問題で天皇制との対峙

今、アジアの国々の民衆から直接なされている戦後補償請求、私たちはこの請求に対して誠意を持って答えることによって、アジアの国々の人々との間に、真の友好と信頼を築くことができる。それが憲法の理念

を實踐することである。そのような実践がなされるならば、現在起きている外国人労働者に対する様々な人権侵害、企業の海外進出による環境破壊についても、取り組むことになるはずである。さらに戦争責任の問題を考えるに当たっては、天皇制について考えざるをえない。天皇制こそこの国の精神構造を規定している無責任体制の極である。天皇制との対峙なくしてはこの国の戦争責任の問題の終わりはない。

今、このような問題をまったく解決しないままに「国際貢献」の名のもとに自衛隊という軍隊が海外に派遣され始めた。湾岸戦争という戦争を契機として語られ始め、軍隊の派遣として論じられた「国際貢献」。どこかおかしくはないであろうか。カンボジアの民衆の救済のためだというなら、すでに十数年前から民間のボランティア団体が、現地の民衆の必要に即した支援をしてきている。このようなボランティア団体の活動を、これまで日本政府が援助してきたことがあったか。

日本政府がこのような声を無視し、国会において強行採決をしてまで自衛隊を海外に派遣しようとしているのは、この派遣のねらいが海外における日本の権益の獲得とその保護、そしてアジアにおけるアメリカの軍事力の空白を埋めるところにあるからである。このことは経済学者ら多くの人々が指摘しているところである。

アジアの人々と真の友好関係を築くための「国際貢献」のあり方を考えるとき、このような事実を見落とすわけには行かない。

残念な「ニューウェーブ」の諸君たちの態度

社会党が推薦した連合型の森田候補に対抗して、市民が中心となって「内田まさとし」候補を擁立したのは、前述したように社会党内の護憲派議員の決起を促したものであった。ところが、本来護憲派であったは

ずの弁護士集団を中心にしたいわゆる「ニューウェーブ」の議員たちは、決起するどころか、選挙戦の終盤で逆に森田候補ら連合型候補に対するテコ入れを進言する申し入れを田辺委員長に対してなしている。連合型候補で唯一当選した東京選挙区の森田氏が、その後民社党に走ったことについては新聞等で報道されているとおりである。

田辺委員長に前記申し入れをなした「ニューウェーブ」諸君たちが、このことについてどのような総括をなしているかは明らかでない。

ところで九月十日、筒井信隆氏ら十八名の衆議院議員が、参議院選の総括について田辺委員長宛に「意見書」を提出した。この意見書は参議院を大敗北——社会党は三年前の選挙に比べ千二百万人の支持を失った——と位置付けた上で、敗北の原因については社会党が「政権を担う党への党改革が決定的に不十分であったことにつくる」とし、敗北した連合型選挙の当否については一切触れていない。

今、彼らの総括について理論的な批判を試みようとは思わない。ただ彼らが敗北の原因としてPKO法国会における「牛歩」「議員総辞職」「戦術の誤りを挙げていることについては触れておきたい。総辞職戦術は別としても「牛歩」したから選挙に敗北したという総括は間違っていると思う。審議が未了にもかかわらず強行採決によってPKO法を成立させようとする自公民に対して、可能な限りのあらゆる抵抗手段を取るのとは当然ではないか。ことは国家の根幹である憲法の問題であるのだ。選挙戦に敗北したのは「牛歩」というぎりぎりの抵抗手段も辞さなかった護憲の闘いを参議院選で貫徹せず、自民党の補完勢力である民社党と手を組んで連合型選挙を行ったからである。「牛歩」をしたから負けたというのと「牛歩」の路線を貫徹しなかったから負けたというのでは決定的に違う。

確かに東京では反PKO法を掲げた「内田まさとし」候補は敗れた。しかし、広島、沖縄では反PKO法を掲げた候補が、連合型候補を敗って当選した。東京でも「牛歩」で闘い、反PKO法を掲げた上田耕一郎

候補が、比例区の得票を約二十五万票上回る七十五万票で当選している。

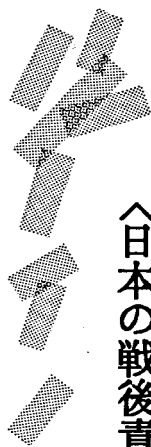
前記「意見書」が、「牛歩」について国民の七割が反対であった（どのような根拠に基づいたものか明らかでないが）から誤りであったとしているのは、「牛歩」せざるを得なかったことを国民に説得することを断念しているという点において、俗に媚びているものであり、また、その「意見書」の署名者たちが推進した、連合型選挙の誤りを「牛歩」に転嫁しているという意味において、二重の誤りを犯している。選挙には労働組合による物、人の支援が不可欠と考えている彼らには、連合に対する批判はタブーなのであるうか。彼らの多くは前回の選挙において土井ブームに支えられ、市民の支持を得て当選した。しかるに彼らはこの市民の力に依拠しようとせず、政権獲得を至上命令として改憲への道に進んでいる連合に依拠しようとしている。

今、本当に大切なことは理念なき政権獲得ではなく、憲法の理念に立ち返り、憲法の理念を實踐する中で、政権獲得の能力を身につけていくことである。確かに道は遠いかもしれない。しかし、どんなに遠い道であってもそれ以外にこの国を変えていく方法はない。佐川疑惑の中で「金丸やめろ」とハンストに入った青島幸男参議院議員、それに触発されて行動を起こした革新無所属の地方議員、そして市民たち、この運動の大きなうねりが、今、金丸をして議員を辞職させ、竹下に対しても迫っている。彼らの持つ市民感覚にこそ学べきものがあるのではなからうか。

（弁護士）

戦後補償が行われていればPKO派兵はなかったはず

へ日本の戦後責任をハッキリさせる会 の白杵敬子さんに聞く



聞きて（あいこら編集部）

編集部 へ日本の戦後責任をハッキリさせる会 の発足は

〈韓国・太平洋戦争犠牲者遺族会〉との出会いがきっかけだったそうですが、今回日本がカンボジアへPKO派兵することについて遺族会の人たちの気持ちは？

白杵 遺族会や戦争犠牲者の当事者はPKOに反対です。

日本から直接の謝罪も補償もないし、当事者にとってはまだ戦争は終わっていないわけです。

編集部 日韓条約で補償はすんでいるという意見もありますが？

白杵 それは一九七五年韓国政府が日本からの経済協力資金の一部を使って元軍人・軍族の直系遺族のみ八千五百人くらいの人に十九万円くらいを渡して終わりました。それも遺族の約三分の一。強制連行者、傷痍軍人は対象外

です。日本人の場合は未亡人や元軍人には軍人恩給など生涯支給されてますよね。

遺族・当事者にとっては強制的に連れていかれて戦争に加担させられた状況なのに、戦後は日本が負けたということとで一切チャラにして補償以前の決着もきちんとしていない。さらにひどいのは、いまだにどこで死んだのかわからない、戦後の戦死通報というものが旧植民地の人たちにはきていないのです。

編集部 今回のPKO派兵も同じような思想のもとで動いて、経済侵略の意味が強いPKOと言えらると思うのですが。白杵 国益ですね。湾岸戦争をテコにしてあわてて軍事的な部分をチャンス到来という形でとびついた。アジアのコンセンサスのないままやったという背景があると思う。カ

ンボジアに派兵する前にやる必要があるだろうという気持ちです。

日本国家が無理やり連れていったのに、自分の父親や夫がどこで死んだか通報もない。強制労働させられた人たちが自分の未払い賃金を供託してあるにもかかわらず、供託金がいくらありますよという戦後通報もない。遺骨探しにもいっさい参加させない。日本人だけが南方だ、シベリアだ、東南アジアだといって遺骨収集して自動的に靖国神社へ祀っている。

肉親のせめてもの気持ちとしては、夫や息子、父親がどこで死んだか知りたいし、現場に行つて追悼したい気持ちがある。日本人は国費でやっているのに、同じ太平洋戦争の犠牲者であるそういう人たちは連れて行っていない。それは戦争の被害者は日本人しかないという視野狭窄が日本人遺族の中にもあるし、心理的に植民地の人間をいかに戦争に巻き込んだかという部分はふたをしてきている。

編集部 くさいものにはふたをしてしまう日本の人権意識の低さなどは肌で感じますか。

曰杵 意識の低さというよりも人間の心があるのかなと思いますね。日本が敗戦後、まっ先に手がけたのは、戦後処

理だったわけですよ。何百万人もの人が外地から引き上げるところから始まって、住宅を与えて、どこで死んだかをきちんと探すところからやっているが、植民地やアジアの人たちには何もしていない。放置したままです。

編集部 それは日本の政治をひっぱっているリーダーたちにも原因はあるのでしょうか。

曰杵 在日に対する指紋押捺についてもそうだし、戦後民主主義といながらも、徹底して旧植民地の人間の人権問題の部分は排除、区別、差別をしていたから、在日の身分問題と戦後処理問題の根は戦前と同じ、管理と差別の考えであり、政治の責任は重い。

編集部 やつと日本でも戦後責任を問うという形が出てきて、〈日本の戦後責任をハッキリさせる会〉は名前からも的確に表現しているわけですが、こういう時にまたPKOで海外に自衛隊が行くということは、政治のリーダーだけでなく日本人一人一人が自分の問題として戦後問題がとらえられなかったといえますね。

曰杵 広島島の原爆問題などでもいえるように、被害者意識の部分のなかでのみ戦後処理がなされてきた。アジアへの侵略や植民地問題については運動してきた革新側もこそっ

とぬけたままずうっと今日にきてしまった。だから今、自衛隊反対とかアジアとの連帯とか言いながらも実質的な根拠が見えないままきてしまっている。米ソ関係の冷戦構造がなくなつて、世界の大きな変動期のなかでどさくさに紛れて、日本は国際貢献と言ひ始めた。

編集部 では戦後補償や謝罪をきちんとしていけば、自衛隊のカンボジア派兵は行われなかったでしょうか？

曰杵 そうですね、それは言えますね。戦後、侵略戦争に対する実態調査や反省を日本人自身の手できちんとしてこなかった。意識的には戦前の発想のままでから国際貢献と称したら、即、自衛隊が出ていけばよいというような形になってしまふ。湾岸戦争で最初に金を出して、次に掃海艇を出してと進み、これからはアメリカに頼るというよりも日本が積極的に出ていく戦略に転換させてきた。

編集部 日本の軍事費も膨大で韓国などで攻撃型になっているのではないかと批判がでていると聞きましたが？

曰杵 日本の軍事費は世界で六位ですが、大事なのは援護法にもとづいて日本人の戦争被害者に対して援護している二兆円のお金が含まれていない。それを含めると軍事費はもっと突出する。

編集部 第二次世界大戦を考えるとドイツのユダヤ人問題があるが、ドイツなどではどうなんでしょうか。

曰杵 そうそうユダヤ人に対してはナチスがどうしたとか日本でも関心がもたれている。

編集部 『アンネの日記』は今も本屋にいくとズラリとありますよね。

曰杵 日本軍が中国で何をしたかというのはない。

編集部 ドイツのユダヤ人虐殺問題に隠れて日本は戦後アメリカとの関係だけを強めていったけど、ここにきて、慰安婦問題が韓国だけでなく、オランダもビルマの女性も慰安婦にされたということで世界の女性に対して性の侵略をしていたともいえるのではないか。

自衛隊のコンドーム問題も今回でいますが、国が性の管理をするというのは変わってないですね。

曰杵 その前から自衛隊とか、日本青年××隊がアジア友好と称して行くたびに、裏話として買春の話はなんども聞いています。

編集部 日本も基地があるところには歓楽街ができて、栄えていますよね。自衛隊の方でコンドーム配給を否定しても、軍と性の問題は切り離しては考えられないような気が

しますが、その意味からも軍隊慰安婦の問題はきちんと謝罪、補償することが重要ですね。

ヘハッキリさせる会」はそういう意味でも戦争の本質を問いかけていく中で大きな位置をしていますが、裁判へい



第2回口頭弁論での記者会見、司会をする臼杵さん

たる状況などはいかがでしょうか？

臼杵 アジア・太平洋戦争は我々の歴史でもあるわけで、その実態をはっきりさせなければいけないと思う。ヘハッキリさせる会」にはマスコミ関係の仕事をしている人も多いので、一九九〇年の四月からこれまで八回、訪韓調査団というのをだして二万人近くいる遺族会の中で、約二百人くらいの人を一对一で面接調査をしました。裁判も調査のなかで原告に適した人を選んで提訴をした。どういう形で進行されて、どういう状況の中で働かされて、戦後どういう生活を送ってきたかきちんと記録をしないといけない。時間もかなり地味な仕事だけど、これが運動の基礎になる大切なことだと思う。

編集部 そういう活動をやる中であらためて戦争が見えてくるし、PKO阻止への活動にも繋がっていくと思うが？
臼杵 今、慰安婦だけが浮き上がって、慰安婦問題を解決すればいいんだと遊離しすぎているが、今しなければいけないのは外国人に対する全体の戦後処理の問題だと思う。

日本人によって一家がバラバラにされ、親も自分も母親も、今でも傷のために次の世代もずうっと謝罪も補償もなく三世代にもわたって続いているという状況をきちんとと

らえて、できるかぎりの誠意をもってやらなければいけないし、やらなければ私たちの世代が引き継がなければいけない。

編集部 裁判が第一回、第二回と進み、国側はのりくりで道のりは長いと思うのですが、どのような展望をもって裁判にのぞんでいますか？

臼杵 裁判をやる意味は国と原告といった、当事者が法廷という同じ土俵で争える。その真実、その事実について争える。法的に争うという土俵に国を引っ張り出したという意味はあると思う。運動だけだったら窓口に行って何とか出せとか、謝罪しろとか言うただけけど、裁判することによって国は逃げるわけには行かない。

編集部 新聞に自衛隊の海外派兵は檻の中から虎が出るといった一コマ漫画で皮肉られていましたが、最後に一言どうぞ。

臼杵 P K O問題だけでなく、敗戦後日本はアジアを踏み台にして経済大国になった。かつての戦争責任もあいまいにしたまま。ですから国際貢献をする前にやる必要があるでしょ、と言いたい。犠牲者個人への戦後補償もなく、湾岸戦争の流れの中で国際貢献ができてしまった。誠意

をもって補償することによって、P K O派兵の問題など日本の軍事大国化に対して、大きな歯止めになると思う。

それを抜きにしては日本は二十一世紀に進めない。本当にやらなくちゃいけないものをやらないで、国際貢献と称して平和のために道路を作っても、アジアの人々は信用しないと思う。戦争被害者は年齢的にも高齢になり、時間がないのです。国際貢献以前に順序が逆でしょと言いたい。

*お知らせ

第三回口頭弁論（東京地方裁判所）

十二月七日（月）午前十時～十一時

たくさんの方の傍聴とカンパをお願いします。

（九月三十日 談）

＜日本の戦後責任をハッキリさせる会＞ 連絡先

①150 東京都渋谷区渋谷二一五―九 パル青山

☎ 03・5466・0692

FAX 03・5466・0786

カンパ振込先

郵便振替・東京11551701

看護婦・光と影（１）

Ⅱ堺市 森 光子さんⅡ

聞き手 増田れい子

はじめに

看護婦さんの取材をはじめて一年余りになる。これまでに四十人の現職、元職の看護婦さんから話を聞かせてもらった。二十代の若い人から六十代、七十代の人まで、年齢年代層もまちまち。国公立病院、地域病院、個人病院と働く場もさまざま。外来、病棟、老人専門と分野もとどろりである。

知れば知るほどもっと看護婦さんの日常、職場で家庭で地域での日常、その内面、生や死についての思いを知りたくなるのだった。

取材はいつ果てるともわからない状態でいまでもコツコツ続けているが、斎藤千代さんのおすすめで、ノートに掲載させていただくことになった。有難いチャンスだと思っている。

看護婦さんの現場は実にきびしい。月に十回をこえる夜勤、仕事の量と質にまったく見合っていない報酬、不十分過ぎる社会的評価。

あまりにも影の濃い労働である。もとより看護婦さん自体の「影」に対する挑戦は、ナース・ウェーブな

どのかたちで間断なく続けられている。光に満ちたナース・ライフの実現は八十五万看護婦の誰もが夢見るテーマだろう。

千九百万人の働く女性（雇用労働者・パート含む）のなかに占める八十五万人。女性の働く場としては教職とならんで歴史的にも長く専門性が高い重要な場である。

その八十五万人の女性たちが、苛酷な目にあっている。捨て置けないのである。

点滴を受けながら患者を看護する看護婦さんがいる。こどもをおぶってナース・ステーションで立ち働いた経験のある看護婦さんもいる。半病人の看護婦さんが、病人を看護している状況はどこにでもある。

誰でもが人生のうちに病むのに、病んだときの救い主の看護婦さんが、半病人なのだ。

それが豊かなニッポンのもう一つの姿である。こんなことを心のまんなか（片スミではない）に置きながら、私は、具体的に立ち働いているナマ身の看護婦さんのナマの声をテープに収めていった。できるだけナマナしくお伝えしたくて、原稿は、語りのスタイルにしてある。

最初にご登場いただくのは、森光子さん。一九二三（大正十二）年七月十九日生まれの六十九歳。広島日赤を振り出しに途中、中断しながら六十五歳まで通算すると三十五年、看護婦として働いた。

一九四五年八月十五日、世界最初の核爆弾が広島を焼き、一瞬にして二十万人にのぼる死者を出したが、森さんはそのとき職場である広島陸軍病院第一臨時分院に出勤の途中だった。

病院は爆心地から二、三百メートルのところであり、森さんは八時三〇分のタイムカードを打つべく病院の近くまで来ていた――。

*

暑いので、人家の軒下を縫いながら歩いてたんですね。汗ふきふきね。服装は黒いモンペに白地に黒の水玉のブラウス、運動靴、アタマには麦わら帽子がむってました。突然光った。光だけが見えて、あとはもう

何もわからない。気がついたら川のそばに落ちていた。大田川ですね。その河原です。でも、目が見えない。何も見えない。これは目をやられたと思つたらそうじゃない、目は開いててもあたり一面真っ黒で何も見えないのです。しばらく闇をうかがつていたらぼんやりものが見え出した。川が見えた。あ、川やな。あぶないから土手をよじのぼろう。必死でよじのぼつてみたら、うす暗いなか、全然家がない。のっぺらぼう。どこの国へ来ちゃったんだろう思て……。それから夢中になって走った。

陸軍病院の看護婦は、敵機が入ったら昼でも夜でもいつでもただちに病院へかけつけなければならない。それで走ったんでしようね。

家はない。のっぺらぼうなのに、ふしぎに道だけは残っている。走つて着いたところが本院の看護婦宿舎だった。ここは爆心地から八百メートルぐらい離れたところだ。

宿舎は木造でね、バラバラになった材木の下から、助けてエ助けてエ、と声がある。火が襲ってくる。材木どかしながら逃げたんです。ゴメン、ゴメンネと言いながら逃げた。

道は逃げる人でいっぱいです。みんな皮がつるむけになってつらみたいにぶら下がるんです、皮が。わあ……いいながらね、逃げる。その人たちは兵隊だったと思います。

爆心地、いま平和公園になってるあたりというのは、戦争中は軍都広島を中心地で練兵場やら工兵隊やら病院やらね、軍関係の施設がひしめていたところですね。

戦況が悪くなって、傷病兵が増える。病院船がどんどん入るようになって、臨時分院をおいたわけです。私は日赤看護婦として十八年の春に広島陸軍病院に配属されて、ですから原爆受けたときはまだ経験二年の新米ですよ。

道ばたには死者がいっぱい、動けない人がクチゲチに、水頂戴、水、水、と泣いている。けど、構っておられない。とにかく逃げて逃げて、着いた先は、陸軍病院が、いざというとき避難する場

所になっていた戸坂村でした。市の中心から五キロ離れたところでは、

その戸坂村の小学校に、もう被災した人たちが集まってきました。教室にズラッと、トロボの魚みだいに並べるんです。三千八百人収容したんです、一度に。私は名乗ってすぐ、看護をはじめました。

からだ中スリキズだらけ、ホコリだらけ、ハダシで、服はボロボロ、村の人たちが自分のブラウスを脱いで着せてくれた。水玉のブラウス脱いだらだに点々と黒いモノが張りついている。何だろうと思ったら水玉の部分が、そのままこけて、体に張りついてたんです。

三日三晩、不眠不休で看護しました。その間にもまた空襲警報が鳴る。すると泣いていた赤ん坊のクチを母親が押さえて、シーンとなる。

やけただれた人たちもおそろしくて、ひと言も言わない。看護婦もよばれない。警報の間だけからだを休めるのです。

地元の婦人会が炊き出してくれたおかゆや重湯を一人一人のクチにのませる。やけどでクチのあかない人には、口移しでのませる。

クスリといったら赤チンとチンク油きりない。それもすぐ底をついて。

私をよぶ声があるので近寄ると、顔の皮はむけてツルツル、髪の毛はチリチリ、ハダカの女の人。ムシの息ですよ。誰？　ときいたら同じ病院の看護婦さんじゃないですか。ゆかたを探してきて、かけてあげました。彼女は死にました。

死にます、みんな次々死んでゆく。息のあるうちに名前聞いてノートに残しましたが、次々死んでゆく。死んだらみんなハダカにするほかない。かけてあげたゆかたもはずして、別の人にかけてあげなければならぬ。死んだ人の着ていたものは、まだ生きている人のために使うのです。

死体はまとめて山の上にあげて、一日中焼く。そのうち死体を置く場所さえなくなりました。

原爆にやられると赤痢のような状態になって下痢するんですね。立てる人は、必死にトイレにゆく。そのトイレの戸口のところに折り重なって死んでゆくんです。

アウシュビッツさながらでした。向こうからハダカの女の人がかけてくる。ハダカなのに帯だけおなかにグルグル巻いている……と思ったら帯じゃなくて、とび出した自分の腸。その腸をおなかのなかにたぐり寄せながら走っていたんです。

一週間後、被災者は増えるばかりで、分院を開きました。最初のところからさらに奥へ入った塩原という駅のそばの小学校。軍関係の患者三百人を主に収容したんですが、その小学校、長いこと使わなかったので、天井が落ちてきた。私はその天井の下敷きになって、のちのち足のマヒに見舞われることにもなったのです。からだ中にトゲが刺さっていました。あの日から丁度十日目。はじめておフロに入り、負傷したので、お前は練兵休じゃ言われましてね。そして、八月十五日を迎えたのです。

*

話はまだまだ続くが、このへんで一息入れよう。森さんのメモによると、戸坂にいったん収容された被爆者は一万三千人。しかし面倒見きれず六千五百人は移動させ、戸坂に残ったのは四千五百人、うち千三百人は一週間以内に亡くなったという。

その間、何ともやりきれなかったことといえば、原爆にやかれてついには脳症をおこす。脱水と熱のためだ。脳症をおこした兵士の一人が夢うつつにだらう。

「一つ軍人は忠節を盡くすを本文とすべし」と軍人勅諭を唱えはじめ、「一つ軍人は……」と次を言いかけつまる。すると別の兵士がそのあとを、「一つ軍人は……」と続けるのだそうだ。そのようにして、次々と「一つ軍人は……」の声が、瀕死の兵の中から空中にとめどもなく放たれるのであった。

森さんは言った。「私なんかも毎朝、軍人勅諭を暗誦させられるの骨がおれましたが、新兵さんなんかど

んなに苦勞したか。原爆にやかれて、死を前にクチをついて出る。一つ軍人は……。の聲。終生忘れません。あんまり哀れで……。」

「一つ軍人は……」と言い出した兵は、たいいていその四十八時間後には死者となっていた。一つ軍人は……と唱えながら、他の患者のからだの上を、ふみしだいて走りまわるようになる。だから脳症の兵は手足をしばられて寝かされ、やがて死んでゆくのであった。

*

天皇の放送聞いたとき、よくわからんで一体何やったんやろいうたら、戦争に負けたんやと——。いま思うとマンガですけどねえ。何で日本が負けるの、そんなハズない。こんなみんな一生懸命やって負けるハズないって言いあいました。

翌日から傷ついていない兵隊さんはどんどん郷里へ帰って、みんなおらんようになってしまった。階級の上の人は残ってましたがね。

看護婦は一人として帰郷なんかしなかった。

そのうち天井がおちたとき出来た足のキズが化膿して四十二度の熱が出て、モノはみな五つぐらいにだぶって見え、音はエコーが入って聞こえる、でも三十九度に下がった日からもう看護です。私よりみんな重傷なんですから。

看護婦さん、ちょっとここがチクチクするから見て……と言われて患者さんのアタマを見たら、アタマ中のやけどが化膿している。そのやけどの皮の下にウジ虫がウヨウヨしているんです。そのウジを一匹一匹つまみ出してやる。それが看護です。もちろん、洗濯も炊事当番もね、何から何まで私たちがやる。

ものの言える患者からは名前と郷里の住所を聞いてハガキを出してあげました。

自分もいっとうなるかわからないから、ともかく郷里へハガキ一本出しておきました。熱は一応下がった

けれど、髪の毛はだんだん抜けはじめて、ほとんどなくなってしまいました。からだ中に紫色の斑点が出来て、立って仕事していたらいつの間にかデーンと倒れてしまう。だれも構ってくれないからその繰り返し。とうとう血液検査する決心して、してみたら白血球が千もない。八百やうと。普通は七千から八千あるものです。おかしい。検査の仕方が悪いのではないか。再検査しても結果は同じでした。

でも、原因はわからない。原爆の影響とは自分でも思わなかった。知識がなかった。他の二人の看護婦も同じ症状でした。原爆症だったんですね。

白血球をふやすために、私たちは、自分の血液をとって自分に注射するんです。異物が入れば白血球増えるはずだからと、そんなことしたんです。

九月になったある日、広島陸軍病院の本部に出かけた衛生兵の人から「あんたの遺骨が本部の安置所にあったよ」と教えられました。私の生死がわからないままに本部では死んだものと考えて、遺骨を箱に収めたらしいのです。その衛生兵がおどろいて「この人は生きているよ」と言ったので、本部では「あっそうか」と言っ、その骨箱を処分したそうです。どなたの骨だったのでしょうか。

十二月五日、復員式があり、広島陸軍病院は閉鎖されました。私は右足のマヒがとれず一応退職することにしたのです。

郷里は広島と岡山の県境の村です。アタマは丸坊主、顔はやけどのあとが黒々と……そんなみにくい私を村の人たちが見舞いといっ、てはのぞきに來るのです。じつと家の中にこもって過してました。

でもやはり生来、働きたいムシがだまっています。一か月のちには、国立福山病院に就職しました。が、右足のマヒは大腿部まで広がり、立ち働きません。ついに退職。途方にくれました。二十二歳になっていました。

何か、足がマヒしていてもできる仕事はないか考えました。

そもそも私が看護婦になろうとしたのは、自立して生きようと思っていたからです。祖母が自立自活しなければ……といつもそういつてました。

というのも、ひとつには母が結核で早く死に、兄と私が残ったわけですが、父は後妻さんをもらいました。弟が生まれました。自立したい、しなければ、親に負担をかけないで自立するにはどういう方法があるのだろうか。

親せきに子のない家があって、薬局をやっていたんです。私を養女にして薬剤師の勉強をさせたいというんです。でも、学資出してもらおうというのがどうも負担で、薬専の試験を受けるという名目でいったん旅費もらって出かけてその足で、かねて狙っていた看護学校の試験受けちゃったんですよ。合格です。アッハハハ。

でも、家中大反対でした。なにも看護婦なんかにならなくてもいいのです。ウチの娘には看護婦はさせない。そういう大人ばかりです。

どうしてか。日本の看護婦の歴史を少しもとくともわかりますが、しいたげられた女の歴史のひとつですね。明治政府がつくった病院、それは幕府軍との戦争で出た傷病兵を収容するためにつくったのですが、あばれる傷病兵をおとなしくさせるために、当時身分の低かった女たち、バクレン女と呼んでますね、彼女たちを動員して看護させた。

そういういきさつのためか、看護婦という違った目で見える。家中反対です。私はハンガーストライキやりました。三日間。父親はじめ、これであきらめて、私は広島日赤で勉強することになったのです。女学校から広島日赤です。助産婦、保健婦の資格ものに身につけました。

寮はある、食事は出る、学費はいらない。タダで学べて自立できるところは、看護婦の道だけでした、當時は。

三年学んで広島陸軍病院に入ったのが前にもいったように昭和十八年春です。月給三十七円五十銭。高給やっただと思います。学びはじめに誓約というのをしてましてね。

「看護婦生徒は修業年限年間もっぱらこれに従事し、かつ卒業後二年間病院に於いて看護婦の業務をなし、のち二十年間は身上に何らの異動を生ずるも国家有事の際には速やかに本社（日赤）の召集に応じ、患者看護に尽力せんことを誓う」

のち二十年間は召集……のところがかわくて、敗戦後私は日赤に生存届を出さないでしまったんです。原爆受けたからだでまたまた国家有事の際は召集じゃとてもじゃないと思っただです。ですから日赤側から見たら私は死者ですわね。

日赤で勉強をはじめるとき、父が折れて、着るものとして満足に持っていない私に、隣村にあった毛糸屋さんでセーター一枚編んでもらって、プレゼントしてくれました。

原爆、敗戦、失業、足はマヒ。さあどうするかと途方にくれたとき、ふっと編みものなら足を投げ出してもできると思いついたのは、かどでのときのセーターのおかげでしたか、編みものを習いはじめました。

一里ばかり離れたところに編みもの学校が出来たんです。自転車で三年間通いました。

陸軍病院で働いて得たおカネをもとでに編みもののキカイを買い、村中の人の注文をこなし隣村までおとくいさんにして、編んで編んで編み抜きました。

するうち、足のマヒがとれてきたんです。自転車がよかったかね、足がもどってきた。

それならやっぱり、看護婦になりたい。国立福山病院に再就職を願い出た。欠員がなかった、職業安定所へ行ったら、働きグチがありました。米軍の病院です。江田島の旧海軍兵学校に出来た米軍キャンプの病院です。そこが、一九五二年四月、講和条約発効を機に自衛隊に引きつがれるまで三年間、働きました。月給一万九千円。日本人のなかでは私がトップの給料でした。

一日八時間勤務、アメリカの看護婦のシステムに従って働いたわけですが、日本の看護婦がルーチンワークとしている食事の介助や排尿の介助などは一切やらない。それは看護助手のようなボーイの仕事。夜勤なし、宿舎は冷暖房つき。

あんまりヒマなんで、ガラス窓ふいていたら叱られましたね。それは看護婦の仕事ではないと。医師とまったく同等に扱われることに正直いって仰天しました。

ただね、朝鮮戦争が起きたでしょう。戦争に行きたくない死にたくない兵士が、自暴自棄になって自殺未遂おこしたり暴れたり、そして戦死者が送られてきたりね。

自衛隊に切りかわったとき、私は引き続いてとどまる気にはなれなかったですね。幸い福山病院にいた間、三か月講習で保健婦の資格とってましたので、米軍のあとは保健婦をやりました。

無医村勤務です。すぐそこです来て下さい……とよばれて出かけると、すぐそこが一と山も二と山も越えた遠いところですからね。広島県も広いですよ。そこで、仕事は人間相手とは限らない。保健婦さんだから牛のお産ぐらいわかるだろう、牛のお産手伝って下さいと、牛の面倒見ですよ。私は獣医じゃないと言ったって通用しない。

牛のお産はモウいや……と保健婦はやめましたね。思いきって大阪へとび出したのです。

原爆にあったことは知れわたってましたし結婚の相手はいませんでした。自力で生きるほかはない、大阪で看護婦のやりなおしだと勇んで出てきたのですが、履歴書に一行、広島陸軍病院勤務とあるのを見て、どこの病院もやとってくれないのです。

用意してきたおカネも使い果たしたころ、一緒に暮らす男性があらわれました。こどもが出来て、長男と次男とね。こどもを育てている間は、就職はできませんでした。

夫になった人は、飲む打つ買う何でもやる人でしたよ。肝ガンになって、結婚して十年目に亡くなりまし

た。

夫がガンを病むようになってから、これはもう何としてでも働かなくてはならない、看護婦としての空白は八、九年ありましたが、背に腹はかえられない、働かなければと探しました。探しあてたのが、耳原病院です。

民医連の病院です。ところが、自分は張り切っていても三日たつとボタンとたおれる。三日働いて三日休む。そんな状態なのです。

こどもがいるので、外来勤務でしたが、すぐたおれてしまう。肝臓をやられていたんですね。病院、労組とかけあって、やっと常勤になったんですが、なるまでの間、どうしてこんなに被爆者は差別されるのか、口惜しい思いで年中怒り狂っていました。

被爆者が就職差別される理由は、いつ死ぬかわからない。死んだら雇い入れたほうはいろいろ保証しなきゃならないでしょ。パートやアルバイトなら別だけど正職員にすればね、おカネが要るわけです。それでは困る、とこういうわけですね。健康な人をとったほうが、そりゃ、効率はいいいわけです。

私の場合、耳原で働いて、かれこれ十年もするうちに、からだのほうも少しはましになって働き続けられましたから、こどもも育ち上がりましたが、被爆者とわかったとたんに職場から締め出される人も数多くあった。職を失えば貧しくなるでしょう。貧しい被爆者から次々と死んでいったんですよ。

私も、いつ死ぬか、明日死ぬかと思われながら働いていたんですね。その後、子宮ガンの手術もやりましたが、一時は血小板が少なすぎて、手術できない状態でした。あの日、逃げまどったとき、足に針が入ったらしいんですね。その針が三十年以上もたってからひょこっと出てきたりしました。

（森さんは堺原爆被爆者の会の会長さんでもある。堺市には八百人からの被爆者がいるが、高齢化も進み、計報しきりとのことだ。話はまだ尽きないが、このさきは次号にゆずる。）

連載

凄惨！首里城地下の沖縄戦 2

琉球新報 32軍司令部壕取材班



交信途絶え機能せず

——通信隊無線と代わって伝令に

米軍が沖縄本島に上陸した一九四五年四月一日、那覇市立商業学校の三年生だった国吉真一さん（六一）は、鉄血勳皇隊として第三軍通信隊に配属された。入隊式で上官の稲垣班長が最初の命令を発した。「きさまらは今日から立派な軍人だ。きさまらの任務は伝令、水くみ、雑役だ」既に大里国民学校（当時）でモールス信号の打ち方や言葉遣いの訓練を終えていた。やがて無線を担いで兵士らとともに前線へ行き、日本軍の砲弾の着弾地点や、砲撃方向を前線基地に連絡する観測任務が与えられた。

しかし、肝心の無線機が役に立たない。「交信を始めようとするとも米軍は強力な妨害電波を出すのでなかなか通じなかった。交信が成功してもすぐに発信場所を特定されて正確に爆撃された」という。

無線機に代わって国吉さんらが、伝令として戦場を走り回ることになった。さく裂した砲弾の破片がカチ、カチと鉄かぶとに当たる。爪先大の破片が体にめり込んだ。沖縄

戦で最大の激戦地のひとつ、前田高地では仲間七人が戦死した。

五月二、三日ごろ前田から首里に後退。その後は司令部で命令を受け、時には伝令として壕外へ飛び出すこともあった。数字が並んだ暗号文で命令を受けた場合は暗号解読班へ持っていった。水についたら消える特殊インクを使用していたという。

司令部壕周辺にはいくつかの通信隊の壕があった。記念運動場（現首里城公園総合休息所・地下駐車場）南側の墓地を利用した壕で、島袋良徳さん（六七）は通信手として徳之島と交信していた。

ここでも米軍の妨害電波で送受信が困難になっていた。加えて司令部壕と島袋さんらの壕をつなぐ有線電話も、地上を走る線が砲爆撃で切断され使いものにならなかった。このため、徳之島から届いた電文は直接司令部壕内へ届けなければならず、司令部から徳之島へ送る電文も取りに行かなければならなかった。

「四月の早い段階で徳之島との交信は途絶えていた。無線機が使えないので私のいた通信隊はほとんど機能しなかった。軍は一機一艦、一人一戦車とか言って突撃精神をあ

おっていたが、こんな状態で戦争に勝てるはずがないと思った」と島袋さんは語る。

わずかな明かり頼りに壕内新聞を印刷

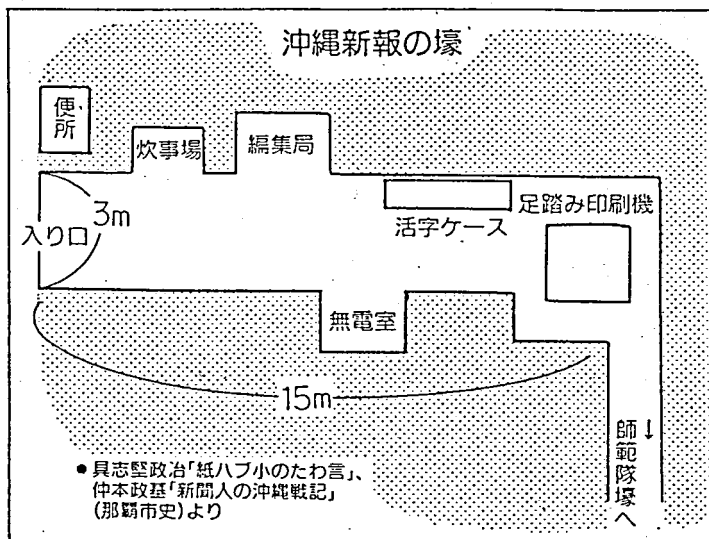
沖縄戦の最中、沖縄新報は住民にとって数少ない情報源の一つだった。沖縄新報は一九四〇年（昭和十五年）十二月末に創刊され、沖縄戦突入後の四五年五月末まで発行された。最後の二か月は壕内での発行だった。創刊から五年半足らずの短い生命。県民と共に戦争にのめり込み、戦火の中、多くの犠牲者と共に消えた。

壕内で発行を始めたのは四五年三月下旬。鉄血勤皇師範隊の造った留魂壕の左端を師範学校に提供してもらった。当時の記者だった大山一雄さん（七八）は「高嶺さん（沖縄新報社長・高嶺朝光氏）たちが師範側と相談なさって、入れてもらったんでしょね。ありがたいことだと思います」と、今でも感謝の念を忘れない。

うっそうと茂るアカギの太木。壕入り口を守る堅固な岩盤。大山さんの同僚、牧港篤三さん（八〇）は留魂壕を見て「この壕ならカンボ（艦砲射撃）がきても大丈夫だ」

と思ったという。

狭い壕内に活字ケース、印刷機が並び、三十人の社員とその家族が寝起きした。印刷機は大量印刷ができる輪転機



ではなく、足踏み式の平板印刷機。豆電球とろうそくのはのかな明かりを頼りに活字を並べ、印刷機にかける。時折壕内を襲う爆風はろうそくの火を消し、活字ケースをひっくり返した。

戦火を駆けめぐる記者は命懸けだった。大山さんは繁多川にある那覇警察署の壕、識名の県庁の壕を担当した。警察は住民の動向を知るための重要な取材先だった。「金城町の石畳をいっさんに駆け下り、弾の降る中、走って走って。壕を出るときから命は無いものと思っていた」

第三軍司令部の担当だった牧港さんは、軍情報部報道班員でもあった。朝六時ごろ、朝食のため米軍の攻撃が収まるころ、留魂壕から司令部壕に向かう。「石垣が全部崩落していて、石垣の間に足がはまり込み前に進めない。あくせくしてようやく司令部壕にたどり着いた」という苦しい取材だった。

米軍の艦砲射撃は容赦なく留魂壕を襲い、壕を隠していたアカギは一夜にして消え去った。壕入り口も爆撃で崩れた。「入り口の岩盤にカンボーが当たると辺りに変なおいが漂った」と牧港さんは語る。後年、牧港さんは「死の石」という詩でこのことを表現している。

紙面で戦意を高揚——今も残る『戦犯意識』

沖縄新報は一九四〇年（昭和十五年）十二月二十日、当時、沖縄で発刊されていた沖縄日報、沖縄朝日新聞、琉球新報の三紙が県警察部の指導で統合し、創刊された。言論統制をもくろむ新聞統合は宮崎に次いで全国で二番目だった。それから約一年後、太平洋戦争がぼつ発する。統後の戦意高揚は新聞の使命となった。

四三年二月、ガダルカナル島で戦死し「軍神」としてあがめられた与那国出身の大舩松市中尉は、戦意をあおる格好の材料となった。沖縄新報や朝日、毎日の全国紙沖縄版も競って軍神大舩の人となり掲載した。

戦意高揚を担った紙面構成について、当時、朝日新聞沖縄支局員だった上間正論さん（七六）は「戦意を高揚させるような記事を書くことに、当時はいささかの疑問も感じていなかった部分があった」と振り返り、「戦争の中に入るとものが見えなくなる」と省みる。

沖縄新報も同様だった。大山一雄さん（七八）は「戦争になっても報道の任務を遂行するという記者魂があった。」



大本営発表の「戦果」を伝える沖縄新報（1942年9月26日）

県民一致、戦意高揚のためにわれわれも頑張った」と言い、「戦争のお先棒を担いだという戦犯意識が今もある」と悔いる。

戦意高揚の新聞は出すべきではなかった―牧港篤三さん（八〇）は言い切る。「発行を止めることはできたかもしれない。しかし、金縛りにあったみたいで、それができなかった」

四四年10・10空襲で、十貫瀬にあった沖縄新報の輪転機が焼けたが、あらかじめ松尾に避難させていた輪転機で印刷を続けることができた。この日の、那覇の街から立ち昇る黒煙の向こうに沈む異様な夕日を上間さんは見ている。

「この世の終り」を思わせる光景だった。

翌四五年二月中旬、上間さんは軍司令部の薬丸兼教情報参謀から硫黄島に侵攻した米軍が、台湾でなく沖縄を攻めつつあることを知らされる。「お互い覚悟を決めようということだったと思う。しかし、沖縄が全滅するという悲壮感はなかった」と上間さんは語る。

そのころ、首里城地下では司令部壕建設が、急ピッチで進められていた。

戦果、美談、激励で埋まり新聞としての機能を失う

壕内で発行される沖縄新報を配るのは警察、兵隊、大政翼賛会沖縄支部、そして鉄血勤皇師範隊の千早隊であった。配布されたのは、首里一帯や南部地域に限られた。

米軍上陸後の沖縄新報で現存するものは四月二十九日付の一部のみ。「二万八千余を殺傷」の見出しが躍る。この新聞のコピーが大山一雄さん（七八）の手元にある。

「もう、戦果、戦果の記事だけです。それに、県庁や警察の壕に行けば『戦争美談』というのがあるし、知事や警察部長のコメントは県民激励だけなんです」と大山さん。戦果、美談、激励で紙面は埋まっていたという。

牧港篤三さん（八〇）は当時の紙面について「新聞としての機能は無くなっていた。戦争の中で新聞が生きるために、やむなくああいふ形になった」と語る。

戦況の悪化は壕内の人間を変えてしまう。兵士の士気が低下する中で、住民に敵対心をあらわにするものもいた。情報部の益永重（ただす）中尉もその一人だった。

「最初のころは良かったが、後に『沖縄の住民はスパイ行為をしている。警察、新聞記者でも、やってないとは言

切れない』と言うようになった」と上間正論さん(七六)は証言する。

五月二十三日、大山さんは担当外の司令部壕にいた。壕内の様子が慌ただしい。気になる大山さんに顔見知りの兵はこっそり教えてくれた。「実は撤退ですよ」

そのころ情報部で益永中尉と新聞記者が押し問答をしていた。

「何で僕らに知らせないんだ」「軍の機密だからだ」「協力させるだけさせといて、自分たちだけ逃げるのか」

五月二十五日、沖縄新報の解散が決まり、活字を地面に埋め、社員は月夜のなか壕を脱出する。戦争という時代の要請で生まれた沖縄新報はこうして第三二軍撤退の混乱の中、廃刊になった。

それから約二か月後、米軍の指導でウルマ新報(現在の琉球新報)が作られる。沖縄新報の壕に埋められていた活字を利用しての発行だった。

戦後、那覇市の波上に「戦没新聞人の碑」が建てられた。沖縄新報の犠牲者十二人の名が朝日新聞の宗貞利登、毎日新聞の下瀬豊の両名とともに記されている。

木に縛られ、砲撃にさらされる捕虜

——死体に石を投げる人も

夕食時に鳴りやんでいた米軍の砲撃が再び始まった。砲撃の合間を縫って、園比屋武御獄近くで通信隊施設に偽装用の土をかぶせていた県立一中鉄血勳皇隊の平良吉敏さん(六二)は、円鑑池と作業現場の中間に立つ木の下でうめく黒い物体に目が止まった。

近寄ってみると始めて見る米軍パイロットだ。昼間の戦闘で撃ち落とされたようだ。木に縛りつけられ、根元に横たわっていた。か細い声で「ミズ、ミズ」と訴えている。水をくんできて飲ませてやった。「こくこく飲んだ後、サンキュー ベリーマッチと言っていた。鬼畜米英と教えられていたが、いざ捕虜になった米兵の哀れな姿を見ると、憎しみよりも、何とかしなければ、という感情が沸き起った。とっさの判断だった」と平良さん。平良さんは一九四五年(昭和二十年)四月だと記憶するが、渡久山朝章さん(六三)も、同時期、同じ場所で米兵を目撃している。米兵は円鑑池側に顔を向けて座らされていた。

「上半身と顔にやけどがひどく化のうして悪臭を放ち、ハ

エがたかっていた。米軍の砲撃にさらし、彼ら自身の手で

仲間を殺させるつもりだったのだろうか。好奇心から英語

で名前と年を尋ねるとグッドバイと返事した」

内間武義さん（六四）によると、三月ごろ米軍機が高射砲で撃ち落とされ、バラシユートで脱出した二人のパイロットが第四坑道口近くに降りてきた。「右往左往する二人を沖繩の新兵が狙撃。倒れた二人の前に殺気立つ兵士や住民四、五十人がワァーッと集まり、木の枝や石で殴った。瞬く間に殺しておった」という。

指令部壕第五坑道口近くで、国吉真一さん（六一）は米兵の死体を目撃した。日本軍の総攻撃が失敗した五月初旬だった。

「くいに手足を縛られて、生きたまま着剣で突き刺された後らしく、頭がだらんと垂れ下がり、体中血だらけだった。死体に石を投げつけている人もいた」と証言。「そのころはみんな気が狂っていた。戦には負けているし、米軍によって仲間や家族を殺されていたので、米兵を見て、このヤローと思ったんじゃないですか」と語った。

国際条約どおりに扱わず、

暴行や食事差別などで虐待

沖繩新報記者で第三二軍情報部報道班員だった牧港篤三さん（八〇）は、情報将校の広瀬大尉が、首里警察署で一人の米国人捕虜を尋問するのを見た。一九四五年（昭和二十年）三月ごろだと記憶している。口ひげをはやした三十五歳前後のパイロットだった。四月か五月ごろ、もう一人の捕虜が司令部壕内に連れてこられた。「坑道内の寝台にいた兵士らにボカボカ殴られて、尋問する部屋へたどり着く前にぐったりしていた」という。

壕内で尋問を終えたその捕虜は、園比屋武御嶽近くの木に縛りつけられ、放置された。みんなが壕内に避難する中、一人だけ米軍の艦砲射撃にさらされていた。かれは後に、記念運動場（現首里城公園総合休息所）で殺されたといううわさが流された。牧港さんが沖繩出身の衛兵から聞いた話によると、捕虜には余り物の食事しか与えられなかった。「いくら敵さんでも食べ残しを与えたり虐待していいのか」と、その衛兵がこぼしていたという。

「俘虜（捕虜）は人道をもって取り扱うべし」——一九〇

七年十月、オランダのハーグで結ばれた「陸戦の法規慣例に関する条約」の規則（第二章第四条）に明記されている。捕虜の食料、寝具、衣服は捕らえた政府の軍隊と対等にせよ、とも定めている（七条）。日本もこの条約を批准しており、第二次大戦中も有効だった。

沖繩の日本軍も守らなければならない法律だが、「私の知る限り、捕虜が実際の条約どおりに扱われたとは思われない」と牧港さんは語る。

戦後、捕虜として、沖繩からハワイへ送られた人びとがいる。沖繩師範の鉄血勤皇隊員だった渡久山朝章さん（六三）もその一人。

「最初は殺されると思っていたが、ハワイの捕虜収容所で生活しているうちにそうではないことがわかった。沖繩戦当時に比べると食事もいいし、労働も楽だった。食事の改善を求めて日本人捕虜が作業放棄したが、裏を返せばストライキを起こすほど自由が認められていたのだろう」と振り返る。四十七年から四十八年にかけて、米海軍機パイロット三人を惨殺したとして、石垣島駐留日本海軍守備隊兵士らが横浜の軍事法廷で戦争犯罪に問われたが、首里の司令部壕周辺での出来事は取り上げられなかった。

アジアの女たちの会15周年

南と北の私たち

記念シンポジウム 性・人権・開発を考える

11.21（土）PM1:30～5:00

スライド『帰らぬ少女』富山妙子十日タイアーティスト
PART 1 アジアの女性たちはなぜ日本へ？ グループ報告
PART 2 買春のない社会をどう創るか パネル討論
高里鈴代 彦坂 諦 松井やより

11.22（日）AM9:30～PM5:00 これから私たちに何ができるか 分科会・全体会

東京・早稲田奉仕園

東京都新宿区西早稲田2-3-1

☎3205-5411

「住井すゑさんと八千五百人」

小島明日奈

約八千五百の座席が用意された日本武道館（東京都千代田区）。今年六月十九日の開場三十分前、ガラシとしたアリーナに立ち、私はまだ半信半疑だった。

「たった一人の講演会。本当にこの会場を埋めるほどの人がやってくるのだろうか」。

講演会のタイトルは「住井すゑ、九十歳の人間宣言——いまなぜ、人権が問われるのか」。住井さんにとって『橋のない川』第七部出版を記念した集大成の場でもあった。

それにしても、演者一人の講演会は、日本武道館では例がない。

「言い出したのは、私。いっぺん、世界人類にとって一番大切な差別の問題を大勢の人に話しかけてみたかった。同じやるならせめて一万人に、と。でも、みんなにたいへんな思いをさせてしまったようで、なんて世間知らずだったのかなあと反省してます」。

茨城県牛久市の牛久沼のほとりにある家を訪ねた時、住井さんは肩をすぼめ、小声で話した。いたずらが見つかった子どものような表情が思い出される。

開場後、静かに、着実に席は埋まっていった。九割は女性。

熱海の老人ホームに住む八十五歳の女性は、「おいしいもの食べてキョロキョロしていてもいいけれど、ぼおとしてただ生きているだけでは死んでいるのと同じ」、山梨県の山あいに一人で暮らし、畑でダイコンやサトイモをつくっているという八十七歳の女性は「戦争や農村の暮らし、私たちが味わった苦しみをよく表現してください。差別しないという姿勢を貫き、女の権利を開いてください」と訴えかえるように話す。

三十代、四十代のグループ、親子連れも目立った。どこからともなく人が集まってきたという熱気があふれていた。

「人間、九十にもなっていない話ができたら、化け物。今日はりっぱな話ではなく、日頃考えていることを訴えたいと思います」。そう語り始めた住井さんの熱弁は、一時間十六分。

「日本は民主国家ではないから、自衛隊を派遣するかしないでもめたりする。バカな話になるんですよね」「『橋のない川』は人間の命がいかに平等かを徹頭徹尾明らかにしている。書き始めて三十年近く経つが、世間は認めてくれず、いっこうに手応えがない」「地球上に国はいらないんです。たまたまここに生まれたから日本人。子どもを産む瞬間に日本人に生まれてほしいと意識するお母さんはいますか。地球の人間としてまともな人間であってほしい。それだけですよね」

八千五百人という数字を、きんさんぎんさんブームに共通する、「はつらつ長生きおばあちゃんあやかり症候群」だよ、と揶揄する人もいた。天皇制についても齒に衣（きぬ）着せぬ物言いを、聴衆全員が求めていたとはいえないだろう。しかし少なくとも、八千五百人が何かを求めてあの会場にやってきた。そのほとんどが女性だったことには、なぜか勇気づけられた。

私自身、『橋のない川』との出会いは、祖父母の家。棚にほこりをかぶった単行本が並んでいたが、誰が読むのか心当たりがない。祖母が亡くなってから、母が「おばあちゃんの本。読んでみたらと勧められたことがあった」と教えてくれた。

改めて第六部までを読みとおした。閉ざされた現実の中でも信念を持って生きる——高度管理社会下の最近の小説にはない「幸福」をしみじみ感じさせられた。

あの会場にあれだけの人を呼び込める、住井さんの次の人はだれだろう。武道館からの帰途考えたが、思いつかない。「さあてね、やっぱりあの時代を経てきたから、だろうね」。半分苦々しく、そしてほんのちょっぴり誇らしげに話す、祖母の声が聞こえた気がした。

（毎日新聞記者）

というのは、コワイ何かの象徴的暗喩なのでは……とフト考えてしまったのだ。

手元の和英辞典では「現場不在証明」の訳語の後にくだけた表現として「言い訳・口実 (excuse)」の訳も添えられている。ここで使われているアリは後者だが、それだけとも言いがたい。考え始めるとなかなか意味深長な気がしてくる。

フェミニンなもの（女性の特質や本能といった）のアリバイ。平たく言えば……社会や職場で女性が活かされていない。まだまだ門戸も開放されておらず、女性の能力や特性は尊重されているとはいいがたい、といった類の批判に対し、「そんなことはない。この人をごらんさい。ちゃんとキャリアを積み成功しているでしょう。あなたはまだ努力が足りないのでは？　もしかするとともに能力不足なのかも……」と慰撫無礼に門前払いをくわせる口実ないし仕組み。

このシステムに組み込まれる女性は、おおむね男性以上に男性論理に忠実な能力・気質の持主である上に、集団の論理や土台を揺るがすような言動はしないという暗黙の了解がある。言ってしまうと“名誉男性”なのである。である以上、この種の女性がスーパー・ウーマン・シンドロームや女王蜂症候群的傾向が強いのも否めぬところで、「女であればいいの??」の議論が再度フェミニズムの底流に根強いのも、このことと無関係とは言いがたい。

しゃかりきに働かされるのはイヤとモーレツ路線をはずれてみても、もっと効率の悪いアクセクに振り回されるのがオチだったりする自分の日常から考えても、「とにかく人生は生きにくい」ですヨネ。

“フェミニン・アリ” (Feminene Ali)

奥川 睦

アメリカのフェミニズム雑誌の草分け『ミズ』の編集長をしていたスタイナムがインタビューに答えた言葉の中に、これを見た記憶がある。「八十年代は女の時代。女性の社会進出も華々しいというけれど、実質的にはフェミニン・アリの域を出ない」といった感じだったかと思う。

アリはアリバイ (Alibi)の短縮型で、スリラー・ミステリー・刑事ドラマによく出てくるあの言葉。アリバイ工作・アリバイくずしなど、しょっちゅう耳にする言葉である。私は長年、日本語の「在る」の連用形と混同していたらしく、アリバイは存在証明と思いこんでいた。だから“名にし負はば、いざこと問はん都鳥 我が思ふ人は在りや無しやと”などという在原業平の“かきつばた”のエピソードで有名な和歌が脳裏をよぎったりしていた。

存在証明ではなく「不在証明」だと知った時、小さな驚きがあった。少なくとも言葉の上では正反対、黒と白の逆転という感じがしてしまう。だが実際は、視点を現場に置くか現場以外の場に置くかの違いにすぎず、実体は変わらない。『広辞苑』によれば、「犯罪が行われた時、被告人・被疑者がその現場以外の場所にいたという証明」とあるし、語源であるラテン語はelsewhere (他の所に)の意だとも紹介されている。であればますます混同するのも無理はない。にもかかわらず、やはり、居る・居ないの対照をなしてしまう

あべこり註疏書目録

弁護士之眼・おんなの目

離婚から原発まで

福武公子著

崙書房

著者のプロフィールを浮きぼりにする「まえがき」からぐんぐんひきいれられて、気がついたら、堅苦しくて敬遠しがちだった法律がすっかり身近なものになっている。そんなうれしい実感をくれる本。

「法律と人間の接点を考えながら、事件を見つめ、人間の情を汲み取って処理していくことがどうしても必要」という著者が、一生に一度あるかないかの大事件に遭遇している当事者と、一緒に喜んだり悲しんだりしながら、同じような出来事で悩んでいるであろうもっと多くの人々のことを思い、『ことばのかけ橋』（千葉日報コラム）につづり、今回それらをまとめたのがこの一冊です。

問題別に十のパートに分けて、過労死、セクシュアル・ハラスメント、子どもの権利、消費者の権利、原発やゴミなどの環境問題、慰謝料や扶養と相続、交通禍、土地問題等々六十余の具体例をとりあげ、実際のなウハウウも盛り込みながら、向かいあっているような親しさで軽妙に語りかけます。

そして、今の時代を賢く、悔いなく、豊かに生きていくためには、周りの人の中で自分の意見を表明できることが大切と、「法律はそのための知識の一つだが、知っているのと知らないのでは月とスッポン。気楽にこの本を役立ててほしい」といいます。

いま注目をあびている高速増殖炉「もんじゅ」の訴訟や、靈感商法にも積極的にとりくむ著者は、物理学専攻の研究者から転身した異色の弁護士。仕事上、女性であることを意識したことはないという切る中で、女性も男性も子どもも個人として尊重される社会を築きたいという熱い思いから、女性の視点が随所に光ります。

305ページ 1800円

（島田信子）

性愛 私を知らないあなたへ

手塚千砂子編著

学陽書房

「ガス燈」というモノクロ時代の映画を最近見た。見ながら腹が立った。ブツブツ文句が出た。フィクションと切り離せないほど「男と女」の関係って今もこの域を出てないんじゃないかと、怒りがたぎった。

バーグマン扮する、叔母からの遺産で何不自由ない金持ちの女性。その彼女と結婚したシャルル・ボワイエは、叔母の殺人現場は怖いから嫌という彼女を強引に、というより「僕を愛してるんだらう。だったら……」という感じで説得してしまう。

改装した古巣での新婚生活が始まって以来、ヒロインにとっては不可解なことばかりが起こる。気が変になりそうな彼女を、彼は「奥さんは精神の病気だから」とメイドにも近所にもふれ回り、外界からシャットアウトする。彼女の嫌うタイプの若いメイドを雇い、そのメイドの前で彼女のプライドを傷つけたり、ハートをかき乱しにかかったりもする。結局、彼は犯罪者であり、お目当てがあるわけだ

から、と納得させてしまうスリラー仕立てのストーリーなのだ。

だが、私にはやっぱり納得がいかない。見ていて、彼女が社会との接触を意図的に一つ一つ絶たれていくプロセスも、「これじゃダメ」と勇気を出し出席したパーティーでみじめに醜態を公然にさらし、よけいに落ち込み自信をなくしていくさまも、犯罪だから、悪意で意図したことだからではなく、男と女の日常的に繰り返されている構図のようには思えるからである。しかも、こちらは善意とおためかしで……。

おまけに、「八方ふさがり」の彼女の危機を救うのは、ロンドン塔で偶然すれ違い「おかしい」と直感した若い男性（ジョセフ・コットン）の親切から。ここでも「女を救ってくれるのは男」のメッセージ。

どうしてこんなに腹が立つのかと改めて考え、理由はもちろんたくさんあるんだけど、結局は自分に怒っているんだとわかった。これだけ悩み抜いて出会ったフェミニズム。それに全く興味を示さない配偶者。古い思考パターンの彼がそこにいるだけで、自分をその古さから抜き出してやれないで縛られてしまうふがいない自分。でも相手にも

怒ってないわけではないんだヨネ。「何一つ頼んだわけでも強制したワケでもない」とケロッとしてるんだから。

『性愛 私を知らないあなたへ』を読んで、自分にもこういう人生は選択できたんだ、自分に嘘をつかない人生が歩めたはずだ、こういう生き方がしたかったんだ、と痛切に思った。今ごろ気づいても遅いのかもしれないけどネ。私を一番知らないあなた！ あなたに一番読ませたい。読まないだろうね、この手の本。同じタイトルで上野千鶴子さんの対談集があるが、こちらは女たちへのロングインタビュー。

1300円 221ページ

(OKU)

昭和遊女考

竹内智恵子著

未来社

つつみ人形 おひな様

男と女 夫婦

廓女は ふと夢を見る

果せぬ夢 花嫁

一対の土人形に

廓のおんなの夢を託して

休みの日

こっそり簾笥の上に飾り眺める

それも――

三十路を迎えてからは

もう他人ごとと思う様になり

四十になって

ひな祭りに一日だけ飾って泣いた

仙台のつつみ人形は、三百年くらい前から作られている土の人形で、私がこの人形のことを知ったのは十数年前。

一昨年、故人になられた野本和子さんが書かれた絵本『つつみのおひなっこ』がきっかけでした。

女性は、たぶん誰でも、愛らしいおひなさまを見ているときは、ポツと上気した愉しさを味わうのだろう、とかつての自分の（？）情緒以外の感想をもつこともなくて。だから、この本を開いたとたん、目に飛び込んできたモノクロの一对のおひなさまの写真と詩を見たときは、本当に驚きました。

この本は、元遊女、女将、遣り手など、今も仙台の町に生きたる女性たち八人からの廊での生活の聞き書きだが「ああ、大体わかる」と、さっと素通りしかけた……と思った……どころか、語る彼女たちのそばにずうっと座って、片時も離れず、耳を傾けたのです。

十二、三歳で親元を離れ、廊の雑事を仕込まれ、一年経つか経たないうちに「お商売」が始まる。あとは……。

竹内さんは話を聞くとき、メモやテープを持たず、心と頭で聞いたそうで、話によっては五年、十年を経てやっと書かれたものもあったとのこと。ことばのたおやかさ、歯切れのよさ、そして清澄さ。仙台弁の語尾のやわらかさ。

「究極の聞き書き」。男性では決して成し得なかった仕事をされた竹内さんという女性に、すっかり魅了されました。

十五年にわたる聞き書き。四部作。表題に続き、『鬼追い』、『鬼灯火の実はいよ』、『娑婆恋どり』。

竹内さんは六十歳。福島県喜多方市在住。

(三船照子)

316ページ 2500円

自立の夢をかたちに

高橋ますみ著

学陽書房

初対面のますみさんの印象をよく覚えている。あごらの拠点会議・編集会議に初めて新宿へ出かけた時、喫茶店でみんなに囲まれ、紫っぽいワンピースを着こんでどっしりと存在感のある人がいた。それがますみさんだった。「自分でデザインして縫ったのよ」という言葉に、縫い物の大嫌いな私は複雑な思いが交錯して、劣等感を覚えた。

直接ご本人は知らなくても、予備知識があった。ご主人が中日新聞の記者、息子さんが二人、お姑さんの看護をされた、と。私にはかなわない三拍子が揃って、太刀打ちできない人との思いがあった。でも目の前の彼女は、人なつっこい誰にも好かれそうな肝っ玉母さんのイメージ。そのギャップが、この本を読んで埋まった。ウンウンと納得がいった。

ますます偉いナァー！ すてきだナァー！ の感嘆は大きいのに、その一方でゲンと親近感も増した。この不思議なハーモニーが、著者高橋ますみさんの魅力なんだろう、と納

得した。

エラぶらない、自分の手柄を言いたてない、苦勞や逆境をグチらず飛躍のバネにできる人。思いつきのよき、人柄のよき、アイディアを実行するねばりと推進力を持った人。お姑さんもご主人も、結構けだらけというわけでもなかったんだ、自分もグチグチ言っていないでガンバってみよう！

てな感じになる。

人にはそれぞれ夢がある。その夢は女性の場合、大半は自立への渴望へと向かう。結婚・出産・育児・介護、それらがほとんど女性の肩にかかってきて、自立の夢をはばむ。自立の愛はなかなかたちになりにくい。渴望は肥大化するのに、現実の壁は厚く、夢はしぼんでしまうことが多い。そういう状況が多すぎて、仕方ないとのあきらめが先に立つ。でもこの本で少しエネルギーを吸収してください。

まずみさんにはなれずとも、このパワーあふれるスーパーレディーが、縁（えん）や結（ゆい）を一人じめせず、上手に割り振ってゆく様を手がかりにすれば、誰でもそれなりの美しい人の輪、あったかくて優しい人の心は確実に広がってゆくだろう。そんな勇気のわいてくる本だ。

1400円 214ページ

（奥川）

あごら新着本リスト

書 名	著 者 名	出版社	定 価
いくさ世にいのち支えて	武田 英子	ドメス出版	1545円
エコ・ダイアリー 1993	エコビレッジ基金	エコビレッジ基金	1200円
五百年後のコロンブス	エドウィー・ブレネル	晶 文 社	3300円
母をくくらないで下さい	大熊 一夫	朝日新聞社	520円
やさしい関係	青木 やよひ	廣済堂出版	1500円
ふたつの祖国	近藤 悦子	自費出版	

『集合から』

大分へ赤とんぼの会に参加して

敗戦の八月十五日。広島は、先祖の霊が戻ってくる「お盆」の日。墓前に立てられた、色とりどりの灯籠が寺の境内を埋める。白い灯籠は初盆を迎える家。近くの墓地には、昭和二十年八月六日を命日と刻まれた名前の連なる墓がいくつも並んでいる。

この日、私は大分へ行った。〈デルタ・女の会〉の8・6交流会に参加された〈赤とんぼ〉の小野さんたちのデモに参加するため、浜村さんのお尻にくっついて行ったのだ。

八年前、浜村さんは英国のグリーンナム・コモン米軍基地撤去闘争に参加していたヒロ・サンプターさんが全国の女たちと交流したとき、ヒロさんを案内して〈赤とんぼ〉と出会った。

〈赤とんぼ〉は、八月十五日、日本開戦の十二月八日、憲法記念日の五月三日に戦争への道を許さないと十三年間デ

モを続けているのだ。デモは『名も無き人群れの会』と名付けて誰でも参加できるよう工夫されている。そしてこの八月十五日には毎年、憲法九条を守ろうと賛同者何千人の氏名を掲載した意見広告を地方紙一頁に出して今年が十回目！ 県下十市町の世話役（？）十五人中十一人が女。優れた企画力と持続力そして穏やかで大胆な行動を編み続けているのはどんな人たちなんだろう？

デモの集合場所は大分駅前広場。本物の赤とんぼの歓迎を受け、木陰に座っている年配の女のうちに目を止めると、「憲法九条は平和の原点です」と書いてある。私も早速お喋りの仲間入り。

午後一時、短冊に切った和紙やうちわに反戦の思いを書いて背中や帽子に飾った総勢二十人くらいが三々五々歩き始めた。途中の百貨店前で栗原貞子さんの夾竹桃の詩の入った自衛隊海外派兵反対のチラシ二千枚を配る。

私たちと交流するため、今回のデモはここで打ち切り。

交流会は〈デルタ〉の定例会と同じく和室で。始まる前から〈デルタ〉と同じ雰囲気だ。

浜村さんと私が〈デルタ〉の紹介と、PKO法反対の一点で女が燃えた栗原選挙の話。前回一議席を守った大分は今回は連合候補のためにPKOを争点にできぬまま敗れたという。PKO法反対で選挙が聞えなかった無念さを口口に訴えられ、広島と沖縄が希望の灯であったと言われる。お互いの気持ちがいびき伝わり話がはずむ。

「目をつむってではダメ。真実を後世に伝えなければ」澄んだ目の椋梨さんは八十歳。今夏、小学校で戦争体験を話した。「障害者」と共に暮らしている寄村さんは「日本には人権、民主主義が根づいていない」と深い思いを語る。明るくい口調でパシッと発言される小石さんは六十八歳で会の連絡先。人の話に耳を傾け、自分の言葉で筋道たてて話される。田中さんは六十四歳。戦争体験、人権を守る暮らしが若い人へ見事に引き継がれている。

今回の新聞意見広告には『憲法九条は生きている。海外派兵は憲法違反です』と大書された下に約三千人の名前がぎっしり。そして名前の真ん中に『あきらめない、へこたれない、屈しない。これから問題です。PKO協力法に反対し続けましょう』と書いてある。この言葉こそ、〈赤とんぼ〉の心意気だと感動。

聡明な小野さんの司会で知性・感性・個性豊かな女たちと交流できた今年の八月十五日を私は忘れない。

(8・15 島山裕子記)

アイリーン・スミスさんを迎えて

——ブルトニウム・アクション

アイリーン・スミスさんは、水俣病の写真集と患者さんとの対話によって、印象深く記憶していた人だった。その彼女が来るというので、実物見たさで出かけた。私の高速増殖炉「もんじゅ」についての知識はないも同然。会ってみて想像よりずっと「元気」で素敵だったアイリーンさんは、ヘストップ・ザもんじゅの代表で、太平洋を股にかけて運動を展開させていた。ベリーアクティブ。

反原発運動が鎮静化し、過去のことになったチェルノブイリ事故も子どもの渡日治療がニュースになる程度の今日この頃、フランスからブルトニウムが帰ってくるそう。えーっ、いやじゃねえ。やっぱりその護衛に自衛隊を出したいんよ。腹が立つねえ。くらの関心でブルトニウムアクションのハガキ行動に参加していた私は、もんじゅのこ

とをアイリーンさんから詳しく聞いて、背中に冷水を浴びた感じ。こわい。何でそんな事故要因の固まりみたいな原稿、稼働させようとするんだろう。なんで財界が商業利用不可能と見限ったブルトニウムを、もんじゅのためにフランスから持ち帰るんだろう？ 私だけじゃない。世界の各国が日本の行動を疑惑の目で見ています。

日本の核武装——口にするだけで恐ろしいことだけど、それを考えている人たちがいると。

そして私は頭に来た。ブルトニウム輸送船の名はなんと「あかつき丸」だという……！ 私の息子の名前を断りもなく使った悪いことをするんじゃない!!

先日、テレビで偶然フランスの再処理場の取材を見た。

「ハイ、このシリンドラーに入れて運びます。一本十二・三キロずつ云々」。うそお、五キロ集まると爆発するんじゃないの？ どうしてみんなこわがらないの？ 怒らないの？ アイリーンさんに会ったその日、背中に冷水、そしてムカついていた私は、座り込みでマイクを持ち、通行人の失笑を買いながら、ウソまじり、訂正だらけのスピーチをしてしまった。でもいい。笑った人は、ちっとは聞いてくれたのだらう。

(8・21 吉田絵理子)

連続講座 Rosa Luxemburg

今、女たちから世界の改革を

第四回 「フェミニズムの地平と課題」(仮題)

大越愛子(近畿大学講師、『フェミローグ』編集)

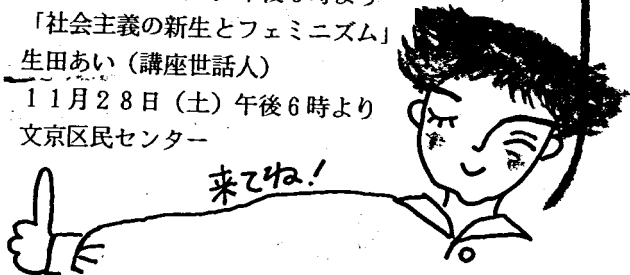
10月24日(土) 午後6時より

第五回 「社会主義の新生とフェミニズム」

生田あい(講座世話人)

11月28日(土) 午後6時より

場所 文京区民センター



男女差別をなくす会へのお誘い

日立といえば日本いや世界有数の大企業です（資本金二千六百九十七億四千七百九千万円、従業員七万九千八百一名）が、その日立で長年働いてきた九人の女性が、ことし三月三日、賃金と昇給差別の是正を求めて東京地裁に訴えをおこしました。弁護団も全員女性です。

堀口暁子、足立明美、浜永美津江、中村由紀子、清水光江、穂積美恵子、高倉正子、須崎明美、園田安子さんから九人です。

一番長い人で勤続三十年目、短い人でももう二十四年目を迎えるベテラン揃い、堀口さん（原告団団長）は国分寺市にある中央研究所で半導体試料の不純物の測定といった専門的な仕事をしています。また、清水さんは武蔵工場で半導体の組み立てにたずさわっています。

どの仕事、どの作業も神経を使う熟練度があるものをいう緻密な労働です。そして、みんな

働くことが大好き、一方、きびしい日常のなかでそれぞれ家庭をいとなみ共働きしながら複数の子どもを育てあげてきました。

ところが、彼女たちは、女性という理由だけで、同期同学歴の男性とくらべて賃金は年収で三百万円も下まわったり、格付けをおくらされたりしているのが現実です。

いったいこれはどういうことなのか、定年までこんな状態に甘んじていいのだろうか、長年耐えてきた女性たちは、一人前に扱われないくやしさを怒りに変えました。これは自分一人のくやしさではない、いままで日立で働いていた女性たち、これから働いていく女性たちに共通するくやしさだ、くやしさを放っておいたらいつまでもくやしさはなくならない。

九人は立ち上がりました。日立で働く女性は約一万人です。でも九人は考えました。

日本で働く千九百万の女性たち。その職場

く日立とすべての職場から

にいまだに根強くある差別。日立だけでなく日本のすべての職場から男女賃金・昇格差別をなくすためにがんばろう、なくすための裁判にしたい。

それで出来た会が「日立とすべての職場から男女差別をなくす会」なのです。編成総会は、この九月二日、女性労働問題研究の第一人者である伊藤セツ昭和女子大教授、広田寿子元日本女子大教授のよびかけで行われ、会長には元毎日新聞論説委員、ジャーナリストの増田れい子（私）がお引き受けしました。

この会は、原告団をはげまし、日立とすべての職場に真の平等を実現することを目的にしています（会則）。

女性の歴史の夜明けをもたらすための、この会にどうぞご参加下さい、お誘いします。

会員は個人加盟を基本にし、会員は年額二

千円、特別会費年額一口一万円です。ニュース『たんぼ』の発行や学習会、イベントを随時行なって参ります。

事務局

千一八七 小平市学園東町二一四一十七一二

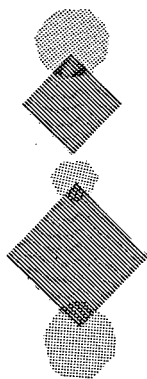
「日立武蔵・田中さんを守る会」気付

電話 〇四二三・四五・九七八四

FAX 〇四二三・四一・三七六三

（振替口座は来月号でお知らせします）

（増田れい子文責）



女の講座・女の集会

11・7	<p>優しさをもたらす ～民主主義と平等を旅して（スウェーデンの報告）～高橋 仁 駒込社会教育会館 2:00～5:00 ぐるーぶ 赤かぶ 主催 連絡先03-3940-6359(13:00以降)</p>
11・11	<p>昭和戦前の翔んでる女たち 講師 加納実紀代 1:30 ～ 4:00 日本女子会館 参加費1000円 日本女子社会教育会 問い合わせ先03-3434-7575</p>
11・14	<p>第4回東京ミニコミ発行者会議 品川区立総合区民会館「きゅりあん」 14:00～18:30 住民図書館 お問い合わせ先 03-3709-4335</p>
11・18	<p>いま、語ろう生と性 ——生命を大切にせる教育実践を目指して—— 浦安市文化会館大ホール 14:00～16:00 <u>連絡先 浦安市立富岡中学校鈴木房枝校長 0473-52-8477</u></p>
11・21	<p>女（ひと）と男（ひと）のいい関係づくり ——心とからだ 家庭で社会で学校で—— 浦安市文化会館小ホール 14:00～16:00 連絡先 浦安市総合政策推進室 企画課女性政策0473-51-1111(1508) 以上 詳しくは……アーニ出版内 性を語る会事務局03-3708-7326</p>
11・14	<p>かながわ女のフェスティバル'92 江ノ島国際会議——女がつくる『開発』—— 基調講演10:30 ～ 12:00 分科会13:00 ～16:00</p>
11・15	<p>総括シンポジウム・江ノ島女性コンサート 10:00～17:00 ☎0466-27 主催 神奈川県立かながわ女性センター・かながわ女性会議 -2111</p>

—あごら20周年記念—
11月7日(土)

A 1:00 - 2:00

田嶋陽子の
おもしろフェミニズム

B 2:00 - 5:00

マスコミの限界
ミデイコミの限界

あごらボトム会議

下村満子 / 増田れい子 / しまようこ

C 6:00 - 9:00

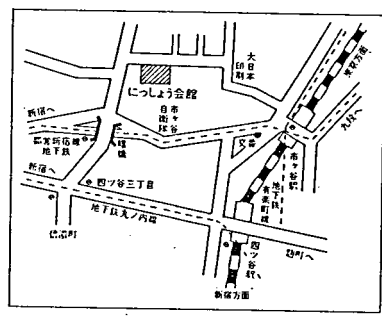
女たちの今, そして明日

アピールとトーク

河野信子, 金住典子ほか元気印の女たち★★★★★★★

A・B・C各 1,500円
1日通し券 4,000円

にししょう会館 大ホール
東京都新宿区市谷本村町7-19
☎03(3269)8159
★都営地下鉄新宿線「曙橋駅」
(A3 出口)より徒歩7分
★JR, 地下鉄「市ヶ谷駅」より徒歩15分
★市ヶ谷自衛隊駐屯地裏



主催・あごら20周年の会 東京都新宿区新宿1-9-6 ☎03(335)3941

◆PKO法案違憲訴訟を起こしませんか

PKO法案の通過、参院選での自民党の勝利、と余りにも情ないこの三か月でしたが、広島では女たちの戦いが勝利をおさめたことと、〈第九条の会 ヒロシマ〉の意見広告が出せたこと（八月六日朝日新聞の朝刊 大阪府下と広島県版に一面広告）で、未だ憲法第九条を大切にしたいと思っておられる人たちが大勢いらっしゃるのだとわかり、勇気をもめました。

しかし、どう考えても、この度のPKO法は納得がいきません。第九八条で、憲法をおかす法律はつくれないとあるのに、理論的でもない身勝手な解釈でPKO法をつくったことを許せないで、国を相手に訴訟しても現在の司法のあり方では勝てないとわかってはいても、声もあげずに泣きねいりは我慢ができなくて、裁判に持ちこむことにして、現在、準備をしております。

一道一都二府四七県、草の根たちが立ち上がって、各地の地裁に提訴したら、眠れる市民たちも少しは目をさましてはくれまいかと、はかない夢をえがいております。さぞ、おろかなと思われることでしょうが、近頃、背後から五十

年昔の足音が聞こえてきたり、長剣をつり憲兵の腕章を袖につけた兵隊、銃剣をかついだ兵士の姿、焼けくずれた街、親や家を失い、ぼろを身にまとい、汚れた顔にやせ細った手をあて、おかあちゃん、おかあちゃんと泣いている幼い子の夢を見るのです。

この二十年ばかり、やっと忘れかけておりましたのに……憲法違反の存在であるくせに、もう大威張りで、保障、保障と言いたてる声を聞くと、「お前たちのために命がけで働いているのだ」と大威張りで、したい放題。銃剣つきつけ、おどしたり、命令したり、そのくせ、いざという時には、女、子ども、年寄りを打ち捨て、自分たちだけ内緒で逃げた日本兵を思い出します。

武力をかさに自分の欲望をみたす軍人や、やくざを表舞台に出したら地獄になることを知ってる者として、自衛隊を表部隊に出すこの度のPKO法は許せないし、認められませんものから。

（山本 真理子）

◆昨日（八月二十七日）金丸副総裁が東京佐川からの五億円受領の「責任をとって」辞任しました。ところが、テレビの街頭インタビューなどを見ると「辞め

ただけまし」とか「潔い」という声が結構あるので、びっくりしました。どうして日本人は、こんなに政治家に甘いのでしょうか。

金丸氏が五億円受け取った九十年二月というのは、リクルート事件の反省から、国会で「政治改革」が論じられていた真ッ最中ですよ。

金銭に鈍感な日本の政治家も、今度こそ衿を正しているかと思われた時期に受領していたわけで、私はリクルート以上に悪質に感じるのですが、日本の有権者はもう怒るエネルギ―も失ったのでしょうか。（東京 小野きみ子）

◆選挙と八・六が終わって、私の夏は終わりました。とても充実した夏でした。八月十五日「名も無き人々の群れ」

（赤とんぼ主催）のデモに参加するため大分へ日帰りで行ってきましたが、PKO法反対の一点で闊い勝利（といっても二人のうち一人だけですけどね）した広島に随分元気づけられたと年配の女の方たち（六十三・六十八・八十歳の三人が中心）に交々語りかけられ、PKO法反対の女たちとのつながりがいっそう強くなって力づけられる思いでした。帰ったら栗原さんから電話があり、自衛隊海外派兵反対の意思表示を女だけでやろうという話をしました。九

月六日、女性選対会議でどちらかが提案します。

（広島 畠山裕子）

◆『あゝら』には毎回、励まされています。なぜ元気をこんなにくれるのか——考えていたんですが、たくさんの人たちが、それぞれに決してパーフェクトな主義主張を訴えているわけなくて、悩み考え、感じ、その思いを、かざらずに出しているからではないかと思うようになりました。

（松山 美湖）

◆私、市民の立場から、岡山市生涯教室推進協議会委員に選ばれました。『あゝら』を参考にさせていただきます。

（岡山 林 順子）

〔174号〕

◆先日、あゝらの読書教人が集まって一七四号従軍慰安婦の問題を中心に話し合いました。自分がかかえている悩みや問題点を出しながら話し合われたために、私はそれぞれの悩みのかたちは違っていても、根っこは同じこの問題と繋がっているのだなと思いました。自分のこととして「慰安婦問題」を考えられ、自分の生き方をみつめなおす機会を持てたことがとてもよかったと思っています。

（大阪 鹿井トミエ）

◆『あごら』は『婦人通信』『婦人展望』にくらべてかなり厚いのでふだんは辟易してしまうのですが、一七四号の従軍慰安婦特集は通して読んでしまいました。

かつての朝鮮国王や満州国皇弟に日本の娘をめあわせるなど政略結婚を強いて来たこと等も考えあわせ、すべての禍根は天皇制にあるように思います。その底辺に置かれたのが、他民族の女性だったのです。同じ年代の原告の方々を思うと断腸の思いがいたします。裁判支援基金につきましては、終了時まで継続して送金させていただきます。

(鈴鹿市 山本和子)

(175号)

◆主人の叔母に175号を送ったのですが、友達と違い、じっくり最初から読んでくれ、私にはうれしかったです。叔母の話によると、今までこういう悩みの本はあったけど、ほとんど建前だけで、本心が違っていた、けど、この本は気持ちが出ていると言われました。(岡山 平井啓子)

◆数年前の記録的な暑さの中でのアテネを思い出しました。その時は、五十年ほど前にアメリカ考古学会が発掘して復元したギリシャの市場で、昔はそこに人々が集まってきて盛んに議論をしていたとのことで、古代ギリシャはさすが

だなあと思っただけでした。

もう一度調べてみますと、「古代ギリシャでは、買い物は男の仕事で、男たちは朝起きるとアゴラに来て、政治談義に話の花を咲かせたり、雄弁家の話に耳を傾けたり、情報交換して、その後で買い物をして家に帰るという習慣だったらしい」とありました。それで、『あごら』の意味に納得しました。

東西ドイツの壁が崩れ、ソ連邦が解体した頃に、どこかの会合で、「輝かしい新しい時代が来た」としたり顔に話すいわゆる文化人の話を聞き、反論したのを思い出します。全体主義的な体制からの解放はなるほど自由の獲得にちがいありませんが、「自由」というのは「民族独立の自由」や「信仰・宗教の自由」でもあり、そこには民族間の争いや宗教上の争いが新たに発生するはずだと思っていたからです。

そして争いが起きると、老人・子ども・女性・病人・貧者といった弱い者の人権がまず損なわれます。

経済力ないしは貧富というモノサシで測った「南と北」・「開発途上国と先進国」という横軸に対して、人種や宗教や男女といったより人間的なモノサシで測る縦軸が、地

球を考える上で必要になってくるのではないだろうかと思
います。

「男という病・女という病理」に加えて「人間という病
理」を、老若男女まじえて、『あごら』で語られることを
期待しております。

(神戸市 廣島義夫)

◆PKO、何とかしなくては、と思っている時に到着、さ
っそく巻末のPKOの特集をコピーして配りました。わか
りにくかったPKOの意味がやっとわかったという声が多
く、うれしく思いました。欲を言えば、せめて一か月前に
ほしかったですね。

(広島 中田優子)

◆牛歩のバカバカしさをマスメディアがいっせいに伝えた
ことが参院選の革新衰退につながったような気がします。
175号、堂本さんの速報は一つ一つ胸に迫りました。こ
のような速報が大新聞なりテレビに出ていたら……と、つ
くづく思いました。『あごら』町の書店にドッと並ぶよう
にしたいですね。

(東京 浅井まり子)

◆「男という病・女という病理」——久しぶりに『あごら』
らしいタイトルですね。発足してまだ三、四年の〈松山〉
が、こんな立派な特集を出すとは……。奥川さんという方
にお目にかかりたくなりました。

(東京 野田陽子)

【編集後記】

◆時々刻々に悪化する社会情勢。9・27、10・4集会の準
備に手術前夜まで気をもんで、無念の思いで手術台に上が
ったためか、麻酔の間に見た夢は、なんと青島さんとハン
ストをしている夢でした。大変な時に参加できなかったの
が残念です。AGORAZEINは病室に金住さんたちに
来て頂いて、看護婦サンの目を盗んで気焰をあげた次第。
おかげで病気のほうで驚いて逃げてしまったようです。

(千)

◆着々と実行されていく派兵、その成果を褒めたたえるマ
スメディア。どうしても黙っていられないと、突如、この
号を企画しました。不完全ですが、あふれる思いを読み取
ってください。行動しましょう。一つでも二つでも。

(う)

◆PKOと政治腐敗は、やっぱり一体だったんですね。初
めてわき起こった市民の声。誰かが退陣したくらいでホコ
をおさめてはいけない。今度こそやり抜きましょう。フェ
ミニストの面目にかけても。

(い)

見えない戦争

斎藤千代 著

私の訪ねた戦後の湾岸／イラク・パレスチナ・イスラエル

硝煙さめやらぬバグダッドの地に、日本人、民間人として、
初めて足を踏み入れた斎藤千代の追真のイラク・リポート

定価 1545円

イスラームの女たち

ナイラ・ミナイ 著

——ウェールの蔭の葛藤——イスラーム社会は「保守的で女性を抑圧しているのか？」
そのような思い込みを取り除いてくれるのがこの本だ。ウェールの蔭でムスリムの
女たちは、西欧近代にも伝統にも埋没しない、生々しい生を模索している。

定価 2060円

いのちを見守る あごろ 172号

「従軍慰安婦」問題が突きつけるもの あごろ 174号

男という病 女という病理 あごろ 175号

冠婚葬祭とフェミニズム あごろ 179号

人と人の出会うひろばへあごろの月刊誌 定価 515円〜980円

BOC出版部

〒160 東京都新宿区新宿1-9-6
電話03-3354-3941 振替東京3-39331

へあごらは、ギリシャ語で「人と人が出会うひろば」の意味。

女の生き方、人間の解放について話しあうひろば。さくのないひろばです。

経歴も年齢も性別も関係なく、同じ平場で話しあおう。ちがう価値観にも耳傾けよう。

そして、女も、男も、生き生きと、のびやかに生きられる社会を目指そう、

と、一九七二年以来、資料誌『あごら』(年二回刊)を、また一九七七年からは『月刊あごら』を発行してきました。

特定の、管理された情報は氾濫していますが、私たちのほんとうにはしい情報は手に入りにくい現状のなかで、女の側が必要とする情報を集め、資料に基づいて討論したいと願っています。

あなたの地域の、職場の、そしてあなた自身の情報を、どしどしお寄せください。全国各地のへあごら拠点にもお出かけください。

●へあごらは、どの企業、どの政党、どの宗教とも、いつさい無関係。

会費と、有志の基金と、雑誌の売上代で運営しています。

●全国各地の拠点では、それぞれ、その地域に応じた活動をしています。

●現在の主な活動は、

①拠点を軸にした勉強会や社会活動

②『月刊あごら』および『特集あごら』の発行

③女性の創造力や専門的技術を集めた創造力の銀行(BOC)の運営

④読書室の運営

⑤可能性教室(英語教室、再就職準備講座など)の運営、その他。

●会費は月額六百元(月額七千二百円)、前納制。入会金は不要。

●申し込みとお問い合わせは、

〒160 東京都新宿区新宿一の九の六 あごら事務局(TEL 03-3354-3941)へ

あごら 178号 1992年10月10日 発行

●編集 あごら新宿

●発行所 BOC出版部 〒160東京都新宿区新宿1-9-6 ●03-3354-3941 ●振替東京0-5264

●発行人 くあごら 企画会議 定価980円(951円+税29円)

この ひろい宇宙に
たった一つの地球

その 大きな地球に
たった一人のわたし
そして あなた

かけがえのない地球

かけがえのないわたし

かけがえのないあなただから

たいせつに たいせつに しよう

あなたも

わたしも

地球も

たった一度きりの人生だから

思いきり

のびやかに生きよう

だけれども だれをも

ふみしだくことなく

胸の底まで深く息をし

ああ 生きててよかったねと

ほほえみあえる地球にしよう

へあごら

人と人の出会うひろば

へあごら

人と人の共に生きるひろば